戰争と建設

菊池春雄著

戦争と建設

企畫院調査官
菊池春雄著

序

滿洲事變と滿洲國建設、支那事變と新支那建設、大東亞戰爭と大東亞建設と、こゝ十年あまりといふもの皇國日本の動向は、舊き世界にさきがけて、戰爭と建設の聖なる營爲に精進しつゝある。そして、ナチス政權確立以來のドイツの動きは、建設と戰爭の立體像をなしてゐる。いはば戰爭と建設、建設と戰爭といふ一聯の觀念のうちに、われわれいとも明瞭に、新しき世界への曙、清鮮な息吹きを感ぜずには居られないのである。

米英に宣戰を布告し給ふた大詔が、われわれ一億皇民の魂を搖り動かし、み民われと感激せしめてこゝに一年。世界を根本から維新せしむべき八紘爲宇の天業

は戰爭と建設の道義性に溢れた、しかも逞しい姿をみせて、變轉きはまりない世界の動きに一筋の光明を示しつゝある。われわれ感奮せざらんとしてあたはずである。

この感奮のまにまに、あへて非才をかへりみず、若干の感想、覺書をあつめてこゝにさゝやかな「戰爭と建設」の書をつくる。

もとく、論說とも隨筆ともつかず何といふことなしに、書きしるしたものなのでいたつてまとまりのないものであるが、手にされた讀者にして（ことに若い人々が）このうちから、何かしら共感していたゞけるものをひろはれたならば、著者としては、もうそれだけで、望外の喜びに堪えない次第である。

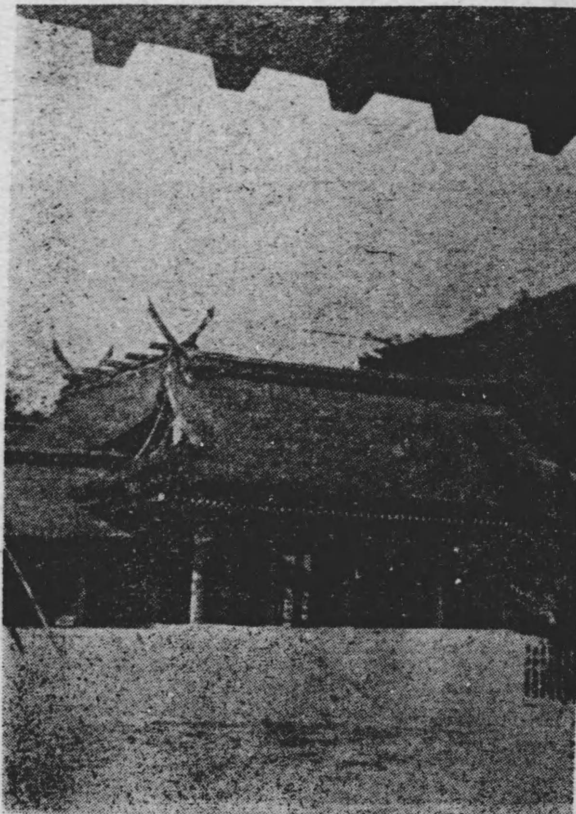
因みに、本書の構成は、十餘篇の單文の集まりになつて居るが、かならずしも

一篇一篇を一頁から、系統だてゝ讀まれる必要なく、それ〳〵どの篇でも、どの篇からでも隨意に繙讀されたい。

大詔奉戴一週年を迎へんとして誓ひ新たなるの日、

昭和十七年十二月三日

著者しるす



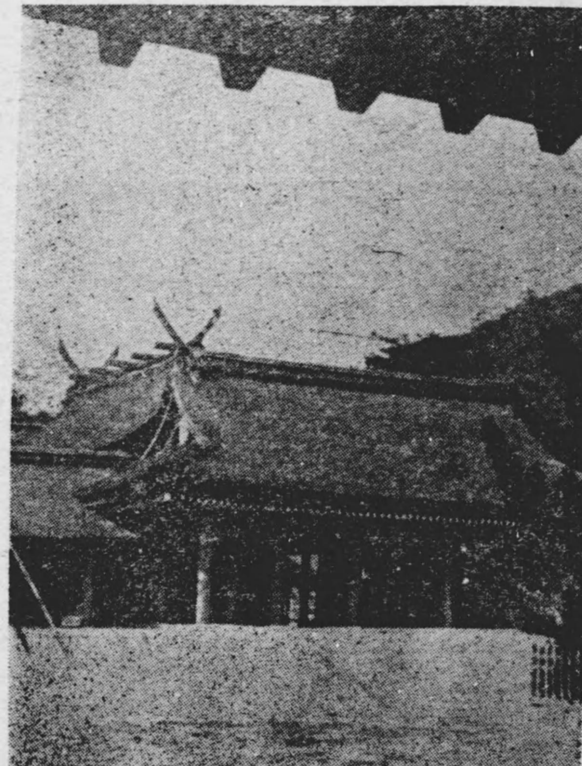
（寫眞は陸軍省檢閲濟）

一篇一篇を一頁から、系統だてゝ讀まれる必要なく、それ〳〵どの篇でも、どの篇からでも隨意に繙讀されたい。

大詔奉戴一週年を迎へんとして誓ひ新たなるの日、

昭和十七年十二月三日

著者しるす



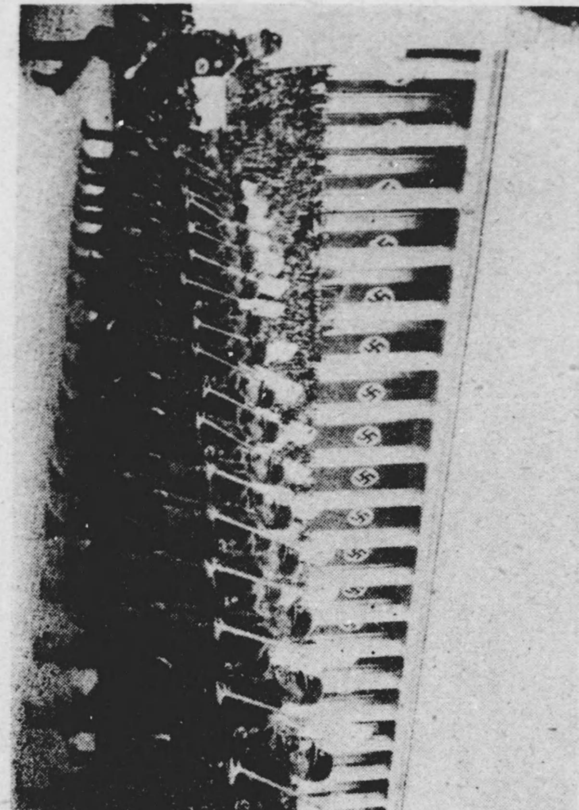
（寫眞は陸軍省檢閲濟）

櫃原神宮

英國東亞侵略の牙城シンガポールを攻擊するわが砲兵隊

新しき香港建設に協力する印度人

ソ聯の要衝
スターリングラード
ドに向つて猛撃中
のドイツ軍



ナチス黨大會において
ヒトラー總統の前を行
進するドイツ・アルバ
イッデイーンスト
（勞働奉仕團）

生産戰爭の第一線にて健闘する日本女性

戰爭と建設

目次

戰爭と建設

戰爭と建設

戰爭と建設！

まことに、世界の動きは、つきつめれば、簡潔なこの一句で表現しつくせるやうに思ふ。

東の日本は、いまや、大東亞戰爭と大東亞建設のために、總力を擧げつゝある。

西のドイツは、いまや、歐洲建設のために、全力を振ひつゝある。

そして、この東と西の二つの國の營みは、決してなんらのつながりなしになさ

れてゐるのではない。

東と西とに隔つて行はれつゝあるこの戰爭と建設の營みは、いはゞ世界戰爭と世界新秩序建設といふ大きな楕圓形の二つの焦點をなしてゐるのである。

「戰爭と建設」といふ言葉ぐらゐ、新しい世界を標徴するに適した合言葉は、あまりないやうに思ふ。

大東亞戰爭は、すぐそのまゝ大東亞建設である。歐洲戰爭は、すぐそのまゝ新歐洲建設である。そして、世界戰爭は、すぐそのまゝ世界新秩序建設である。

戰爭が、そのまゝ建設である、といふとき、正直のところ、われわれの「戰爭」といふ言葉からうける感じには、なにかしら、胸のおどるやうな新鮮なものあるを否みえない。

われわれのなかには、戰爭といへば、すぐ、「破壞」といふことを聯想する人

がないであらうか。

事實、われわれも、戰爭といへばそのまゝ破壞と敎へられなかつたであらうか。戰爭は、文化の破壞である、などといふことが、とくに、大きな聲で、叫ばれはしなかつたであらうか。

しかし、いま、われわれは、あげて、「戰爭と建設」といふ一聯の表現に、大きな時代の息吹きを感じとつてゐるのである。

われわれには、どうしても、「戰爭」といふ言葉の意味が、大きく變つたのだ、としか考へられないのである。さうでなければ、「戰爭と破壞」といふ言葉を、そのまゝ「戰爭と建設」といふ言葉のパラドックス的な表現にすりかへて、平氣でゐるはづはないからである。

さうだ、「戰爭」といふ言葉のもつ意味合ひが、大きな時代の歷史の流れで、

見事に、脱皮したのだ。――つまり、われわれは、戰爭觀に大きな革新を經驗してゐるのである。

× ×

われわれは、われわれの現に戰ひつゝある大東亞戰爭が、大東亞建設のための、大試練である、といふことを考へると同時に、大東亞建設といふこと自體が、はたして、大東亞戰爭後の、いはゆる戰後經營のやうなものと考へられていいかどうかをまじめに反省する必要がある。反省してみれば、大東亞建設といふことも、また、廣い大きな意味での大東亞戰爭のなかの一形相であることに、すぐ氣づくはづである。

同じことは、歐洲戰爭と歐洲新秩序建設といふことにもいへるであらう。そし

てまた、世界戰爭と世界新秩序建設といふことについても、むろん、考へられることである。

新しい言葉としての「戰爭と建設」の意味は、われわれとしては、戰爭より建設へ、といふ推移的意味としてでなく、戰爭しつゝ建設しつゝ、といふ併時的意味として、理解さるべきではないだらうか。

いひかへれば、「建設戰」といふ言葉のまゝに、建設の一面にも戰爭がある、といふことである。

戰爭しつゝ建設しつゝ!!

建設しつゝ戰爭しつゝ!!

新しい世界が生れてゆくのである。舊い秩序に永年とぢこめられた大東亞と、歐洲と、そして世界が新しい大東亞と新しい歐洲と、そして新しい世界に生れか

はるのである。

× × ×

東の皇國も、西のナチスも、いまや、戰爭しつゝ建設しつゝある。いや、世界全體が、大きな表情をうちひろげて、まさに戰爭しつゝ建設しつゝある。そして、新しい世界秩序の誕生を前に、産みの惱みをつゞけつゝあるのである。

しかし、われわれは、この戰爭しつゝ建設しつゝある今日の段階が、その前に、戰爭のための建設をひかへてゐたことを忘れるわけにはいかない。そして、さらにまたその前に、建設のための戰爭が行はれたことを忘れてはならないのである。なぜなら、同じことは、今後といへども、繰り返へされるだらうからである。

戰爭のための建設を怠り、建設のための戰爭を回避する國家は衰へ、戰爭と建

設とによつて、まことの平和を望む國家のみ榮える。世界史における國家興亡の跡をかへりみるものは、この「戰爭のための建設」と「建設のための戰爭」といふ二つの契機によつてあやなされてきた大いなる歴史的事實に目を蔽ふわけには行かないのである。

戰爭のための建設が、一九三三年（昭和八年）以來のナチス・ドイツにおいて、最も理想にちかい形をとつて、營まれたことは、あまねく、人の知るところである。

第一次世界戰爭のために、その政治も、その社會も、その思想も、その經濟も、その文化も、ほとんどありとあらゆるものが、荒廢にさらされて、戰後の十五ケ年間を苦惱のうちに過ごしたドイツが、この年の一月に、ヒトラーを首班としたナチス政府を戴いてからといふものは、月を逐ひ、年を重ねるごとに、みちがへる

ばかりの甦生を示した。そして、まことに、世界人から、ひとしく驚異として、目をみはられた。しかし、その驚異的甦生の實體の底をうちわつてみれば、その施策の一つ一つに、戰爭のための建設といふ目標が理念化されてゐたことが、われわれとしては、より以上の驚異とされねばならないのである。

新歐洲戰爭開始以來のドイツの强みが、すべて、この戰爭のための建設の成功に因るものであることは、あまりにも、判りきつた事實である。

ナチス治下七ケ年、めざす戰爭に突入するまでのドイツは、その政治においても、その社會においても、その思想においても、その經濟においても、その文化においても、およそありとあらゆる國家生活の分野において、ことごとく、戰爭のための建設といふ觀點から、物を考へ、事を處理してきた。

戰爭のための建設——これを、われわれは、國防國家の建設といふ言葉で現し

てもいい。

われわれは、ナチス國防國家の建設のあとをふりかへつてみて、そこに、幾年かの間、力づよい世界甦生の一翼が溫められつゝあつたことを、ハッキリとみとめることができるのである。

溫められた翼は、いまこそ時を得て、歐洲の新秩序を生み落すべく、いとも雄大な羽搏きをなしつゝあり、そしてそれは世界新秩序建設といふ楕圓形の一つの焦點をなしてゐるのである。

× × × ×

そして、わが皇國日本の、大東亞戰爭突入にいたるまでの步みは、どうであつたか。

大東亞戰爭に入るまでに、われわれは、支那事變を體驗し、そして、さらに、その前には、滿洲事變を經驗してゐる。

昭和六年（一九三一年）九月十八日支那正規兵による柳條溝の不法の爆破を契機として勃發した滿洲事變、昭和十二年（一九三七年）七月七日の蘆溝橋畔の銃聲を發端とする支那事變、いづれも、名は「事變」で「戰爭」といはれなかつたが、實體は、大陸の曠野を戰場とせる戰爭にほかならなかつた。しかも、滿洲事變とともに、新しき滿洲の秩序の建設が行はれ、支那事變とともに、新しき支那の秩序の建設が營まれ、かつ現に營まれつゝあることは、われわれの、いまのあたりみるとほりである。

だから、外面的にみれば、皇國日本は、昭和六年（一九三一年）このかた、戰爭と建設の營みにひたむきな努力を重ねてきてゐるともいへる。

そして、われわれは、名にとらわれて、大東亞戰爭の勃發で、はじめて大東亞建設が營まれつゝあるのだ、と早合點してはならないのである。

いや〱、われわれの父祖が、明治の御一新をなしとげて、いよ〱東亞の安定勢力たるべき自覺をあきらかにしはじめた頃の日清日露の二つの戰爭にまでさかのぼつて、想ひを致すべきである。すくなくも、皇國の大東亞建設の大業がすでに、明治大帝の御宇におけるこの二つの戰爭このかた、わが皇國の、眞劍に考へかつ實踐し來つたところであることを考へねばならない。

× × × × ×

さて、戰爭とは何か？

と開きなほられて、すぐ答への出來る人は、少いのではなからうか。

實にわかりきつたことだが、さて、「戰爭」とはなにか、ハッキリといふ段になるとかならずしも簡單ではない。

國際法學者ならば、戰爭とは、兵力による國家間の爭闘なり、とか、國際法の禁ぜざる範圍においてあらゆる力を用ひ得る國家間の關係なり、とか定義するところであらうが、われわれは、こゝで、戰爭の國際法などを考へるつもりはない。

世界的な戰爭の理論家としては、世人は、おほむね、ドイツのクラブゼウイッツとルーデンドルフ二人の名前をあげる。この二人は世界でも著名な戰爭論理家であるから、どんな戰爭論にでも、一應は、かならず引合ひにだされるのである。そして、この二人の戰爭論は、一應對立的に考へられるのであるが、世界の現實の動きは、クラウゼヴイッツからルーデンドルフへと進みつゝあるので、對立とい

ふよりは、むしろ、發展とみるべきところであらう。

× × × × × ×

「總力戰」といふ言葉は、いまでは、國民學校の兒童でも、心得てゐる。日本で、いつのころから、誰が最初にこの言葉を使ひだしたかしらないが、新しい戰爭觀にふさわしい用語であるやうに思ふ。

ドイツのルーデンドルフといふ將軍が、第一次世界大戰の實地體驗にもとづいて、全體戰爭（トターレル・クリーク）といふことをいひだしたことは、誰でも知つてゐることである。

將軍の有名な「全體戰爭論」といふ本は、ドイツが「武力戰では勝つたが、全體戰に敗北した」ことを、いろ〳〵の事實を例證して、書いたものである。將軍

の「大戰回顧錄」といふ本にも、この戰爭論が熱心に展開されてゐる。

ルーデンドルフ將軍は、第一次世界大戰の實地體驗上、今後の戰爭は、ひとり軍事戰、武力戰、兵器戰だけで終るものではない、その外、經濟戰と思想戰、といふものがある。經濟と思想といふことになれば、軍隊の兵站と、軍隊の精神といふことが問題にもなるが、同時に、銃後國民の食糧と戰爭意力といふことが、絶對の問題となる。第一線の武力戰に勝つても、銃後の經濟戰と思想戰に敗れたら、結局、最後は敗北の外ない。經濟と思想といふ二大支柱に加ふるに、國家のあらゆる分野の力が、武力戰の完遂に集中されねばいかぬ、こゝに「全體戰」のもつ眞の意味があるのであると、ルーデンドルフ將軍は、聲を大にもして、説いてゐるのである。

つまり、第一次世界大戰を、ドイツは、全驗戰として把捉せず、武力戰のみに

力を注いで、他の經濟戰や思想戰といふことをおろそかにしたから敗れたのだ、しかるに、聯合國側としてイギリスは、武力戰に旗色のわるいのをカバーすべく、思想戰とくに宣傳戰と、經濟戰とくに食糧戰に力をいれたから、武力戰につよいドイツを負かし得たのだ、といふのがルーデンドルフ將軍の議論である。

戰爭が武力と武力との間で行はれる武力戰だけであるかぎりは、戰爭の終始は、武力戰の終始できまる。武力戰が終ればそれで戰爭は終りである。そもそも武力戰が始まつたときに戰爭がはじまつたのだからである。

戰爭が武力戰だけで終始する間は、戰爭の期間といふものは、さう長からうはづはない。なぜなら武力戰鬪のエネルギーには限度があり、主力敗退によつて大勢が決せられてしまひ、休戰、講和、そして平和といふ順序に、すぐになつてしまふからである。

戰爭が武力戰だけだつたら、われわれには長期戰といふことは、おほむねないはづである。敵味方双方が、ある特定の戰場に出陣して、バラ〳〵撃ち合ひ、突き合つて、勝敗が決するかぎり、さう長期にわたつて、兩國が睨み合ふ必要がないからである。すぐ、休戰から講和條約となつて、ケリがつくはづである。

世界の戰爭史をみると、前の第一次大戰以前の戰爭方式は、大體に於てさうであつた。

西洋の普佛戰爭とか、東洋の日清、日露兩戰爭など、すべてさうである。ところが、前歐洲大戰の事例は、われわれにむかつて、戰爭といふものが、もはや武力戰の勝敗だけで、勝敗を決し得られぬものだといふことを教へた。あれだけ武力戰で優勢を持つてゐたドイツが、結局、敗戰國となつた、といふ事實が、雄辯にこれを物語つたからである。ドイツの武力戰を指導した將軍がさういふの

だから、間違ひないことである。

前大戰でドイツが敗れたのは、英佛軍の武力で、ドイツ軍が大敗を喫し、英佛軍の前に全面的降服をした、といふわけでない。

有能な將兵が、戰場で、決死の奮戰をして戰果をあげてゐる留守の間に、銃後の國民の方が、軍隊より先に白旗をかゝげ、戰場の軍隊に白旗掲揚方を勸奬したのである。

銃後の國民は、戰爭を遂行しつゝある政府を、暴動を起して、轉覆せしめ、「自國の運命のためと稱して」一刻もはやい戰爭終結を望んだのである。

なぜか。

この事實は、あきらかに、戰爭の勝敗は、かならずしも、武力戰の勝敗のみによつてきまらぬ、といふ新例を世界戰爭史の上に示したのである。

武力戰の勝敗によつて、勝敗のきまらぬ戰爭に、勝敗をきめさしたのは、何であらうか。

說明するまでもないことである。

銃後國民が、敵の思想宣傳のため戰意を喪失したといふことである。銃後國民が、國民生活上の困苦に耐へかねて、戰意を喪失したといふことである。時の政府がかうした敵の思想宣傳戰術に應戰の準備なく、國民生活の安定といふ政策の考慮がなかつたいふことである。時の國民に、戰爭意力といふものの錬成が足りなかつたといふことである。

つまり前大戰のドイツは、第一線の武力戰で勝つたが、銃後の思想戰、宣傳戰、經濟戰、生活戰で負けたために、全體の勝利に見放されたといふことになる。

この一大事例を、一番よく、身をもつて體驗したドイツのルーデンドルフ將軍

は、この第一次大戰において、世界は、はじめて、國家總力戰といふものを知つたにもかゝはらず、ドイツはいちはやく、大戰の總力戰的性格を察知できず、これに對處しなかつたために、敗れたのだ、と喝破したのである。

まことに、戰爭であるかぎり、武力で敵を壓倒せねばならぬことは、どつちみち大鐵則に變りはないけれども、軍隊の背後に、これを支援する國民が、敵の宣傳に負けて戰意を喪失した揚句、國論分裂、革命を起したりするやうでは、軍隊が軍事的に勝つて見たところでどうにもならぬ。それこそ、海戰で大勝利を得ながら、敵のために、港灣の全部を占領されてしまつて、寄るべなき海に漂ふ艦隊のやうなことになるからである。

それから又、第一線の軍隊のために、兵糧彈藥が山と積んであつても、肝腎の國民——の多くは、兵隊の親子兄弟である——が餓ゑて居るやうでもいかぬが、

さればといつて、銃後の國民が、ビジネス・アズ・ユージャルどころか、贅澤三昧で、生産に努めなかつたら、尨大な軍隊消費のための補給がつゞかぬ。

話が、こゝまでくると、戰爭が武力戰だけで勝敗つかぬ大きい原因の一つは、兵器の進化といふことであらう。航空兵器の發達と潜水艦の發達が、代表的なものである。航空兵器は空襲空爆によつて、敵國本土を戰場化し、銃後國民の有形無形の生活力を脅やかし、生産工場の補給妨碍を遂行する。潜水艦は、海上封鎖によつて、敵國の海上通商を破壞し、食糧や工業原料の國内移入を妨碍する、といつたわけで、戰場は、單に第一線だけでなしに、銃後の本土でさへ戰場化する。軍隊だけが戰士でなしに、銃後の國民全體が戰士でなければならなくなる。

前大戰で、航空機や潜水艦が脅威をふるひはじめたのは、おほむねその後期においてであるけれども、大戰全體としてみれば、とにかく、かうした戰爭形態が、

はつきりみられたのである。

ルーデンドルフ將軍は、かうした戰爭形態こそは、今後、世界に起ることあるべきあらゆる戰爭の不可避の形態だといふことをいちはやく喝破し、聲を大にして提唱したのである。

ルーデンドルフ將軍の全體戰理論が現はれるまでの戰爭理論の通說は、これもドイツの有名な戰略家クラウゼヴィッツ將軍の戰爭理論であるが、世界大戰以後、總力戰理論が行はれて以來といふものクラウゼヴィッツ將軍の理論は、通らなくなつた、といふのは、普佛戰爭やナポレオン戰爭しかしらぬ將軍の理論が、いはゆる時代遲れの理論となつたからである。どういふ主張が時代遲れとなつたのかは、詳論するとキリがないが、要するに、クラウゼヴィッツ將軍の戰爭理論がもつとも端的に表現された「戰爭は、他の手段をもつてする政治の延長である」といふ言

葉に問題のすべてが存するのである。さらにまた「戰爭は決鬪の進化したもので、敵を屈從せしめてわが意思を貫徹せんがための暴力行爲である」といふやうな主張の要點にも問題があるのである。

だが、しかし、あらためて説明するまでもなく、現實の世界の進展は、戰爭をもつて、單なる政治の延長とみることを許さなくなつた。主として軍隊を通じて實施される武力行爲のみが戰爭の手段とみられなくなつた。戰爭そのものは、國家および民族の存立を賭けた國家および民族の間の自衞鬪爭であり、單なる政治の延長でなしに、國家および民族の一切の生活が戰爭行爲の一部として構成されるにいたつてゐるのである。こゝに、クラウゼヴィッツ將軍の戰爭理論の非時代性があり、ルーデンドルフ將軍の總體戰理論の時代性があるわけである。

×　×　×　×　×　×

「總力戰」といふものが、近代戰爭の一大性格であることは、かくして、いま、世界人の常識となつてゐるが、その總力戰の意味合ひについては、われわれの間にかならずしも、正しい認識あり、とのみいへないやうに思ふ。

「總力戰」といふと、人によつては、武力や思想戰や經濟戰や政治戰やを一切平等視し、思想も經濟も政治も、すべて、武力と同等もしくは同等以上の戰力あるものと誤解してゐる向きもないでない。

しかし、ゆめ忘れてはならぬ、總力戰は、讀んで字のごとく、國家の總力をあげての戰爭であるけれども、戰爭の本質たる武力戰が、その他の要素戰と平等の立場で考へられるわけにはいかない。思想戰も大切であるが、武力戰以上に考へ

るわけにいかぬ。經濟戰またしかり。食糧戰またしかり。

一切の國家要素を、あげて、武力戰遂行に奉仕せしめるのが、總力戰の變らざる本體でなければならない。武力以外の國家要素は、いづれも、武力戰遂行への奉仕といふ形で、それぞれの戰爭形態を形成する、といふことでなければならない。武力以外の政治・思想・經濟・交通その他一切の國家要素を總動員して武力戰の完遂を容易ならしめることが、總力戰第一の性格であることを、われわれは絕對に忘るべきでないのである。

われわれは、われわれの現に當面してをる世界秩序の轉換戰が、われわれのもつ一切を戰爭目的に合つたやうに轉換するのでなければは、完全に遂行できるものでないことを、よく反省せねばならぬやうに思ふ。いひかへれば、世界秩序の轉換戰は、あきらかに、總力戰の性格をもつて行はれてゐるのであるから、われわれ

のもつ一切を總力戰體制に整備せねば、この戰爭の勝利者となりえないといふことである。

總力戰とは、武力戰の完遂といふことを中心とし、政治・經濟・思想・文化・教育などのあらゆる分野の力その他一切の生活力を總動員して、そのもろ〳〵の力をして國防目的上、長期にわたつて最高度の能力を發揮せしめるのでなければ、勝利者たりえぬやうな形態をとつて行はれる戰爭をいふのであるから、いはゞ總力戰のなかには、武力戰・政治戰・經濟戰・文化戰・生活戰などの諸方式がふくまれてゐるわけである。そして、この總力戰に對處するための總力國防といふなかには、軍事國防・政治國防・思想國防・經濟國防・文化國防・生活國防などがふくまれるわけである。これらのもろ〳〵の部分は、けつして、同列に並ぶべきものでなく、武力戰と軍事國防とを中核とし、頂點として、他はこれに即應した

努力を要請されるのである。これは、前言のごとく、きはめて重要なことである。武力戰の勝利を忘れた總力戰や、軍事國防の完璧を忘れた國防國家といふことは、ナンセンスにすぎないのである。

× × × × × × ×

かういふ總力戰の意義・性格・内容にかんがみて、總力戰完遂を容易ならしめる最上の國家形態を世界で最初に考へだしたのが、誰も知つてる通り、ナチス、ドイツである。ナチスは、ルーデンドルフ將軍の國家總力戰の研究が示すやうに、前大戰のことは、一から十まで、研究に研究をかさねた。單に、政府確立後のみでなく、在野の時代から、總力戰完遂の理想體制について研究を怠らなかつた。

ルーデンドルフ將軍は、名だたるナチス黨員で、ヒトラーとともに、暴動一撥

にまで參加した經歷さへある人である。

ローマは一日にして成らぬ、ナチス・ドイツ建設も、ナチス黨多年にわたる研究の成果なのであつて、ナチス政府確立と同時に、これを果敢に斷行したまでのことである。

しかも、政府確立後でさへ、果斷、斷行もさることながら、愼重なる調査研究にも、徹底を欠なかつたのである。

ナチスは、新ドイツの建設にあたつて、總力戰完遂のために、最も合目的々な體制を考へた。かいつまんでいへば、人・思想・教育・土地・原料・運輸など、一切の國家要素を、國防の一點に集中し、國防力の增强といふことを主眼として、萬事を規定したのである。國家の總力を國防目的のために最高度に發揮しうるやうな國家體制をナチスは『國防國家體制』と稱し、この體制の整備にむかつて、遮

二無二突進したのである。

今次第二次大戰當初、ドイツの壓倒的優勢を前にして、世界の人は、ドイツはなぜかうも強いのか、と考へた結果、いろ〳〵理由もあらうが、この國防國家體制の整備をいちはやく完成してゐたことがその最大理由だ、といふことに意見の一致をみたやうである。

それほど、ナチス・ドイツ八ヶ年の政治は、國家のあらゆる要素を「國防」の一點に集中し、それ全體として、總力の最高度の發揮ができるやうな體制を確立整備することに、懸命の努力をなし、かつ、それにほゞ成功、完璧に近い成果をあげたのである。

しかも、單に體制の確立・整備だけにとゞまらず、その確立・整備によつて得た實力を適當な對外政治力で押すことによつて、着々國威の發揚をやつてのけた

のである。國際聯盟脫退（一九三三年一〇月一四日）、ザール歸屬（一九三五年一月一三日）、ラインランド進駐（一九三六年三月七日）、アンシルス（一九三八年三月一三日）、ズデーテン地方合併（一九三八年九月二九日）、チエッコの無血合併、スロバキヤの保護領化（一九三九年三月一四日）、メーメル回復（一九三九年三月二一日）など、かぞへあげてみただけでも相當なものである。

× × × × × × ×

「國防國家」とか「高度國防國家」といふ言葉も、「總力戰」といふ言葉と同樣、いまや世界人の常識用語となつてゐる。

國家總力戰といふことが將來戰、いな現に行はれつゝある近代戰爭の一大性格であるかぎり、これに戰ひぬくためには、それだけの國家體制ができてなければ

ならぬ。國家の總力をあげて國防目的に集中し、國家總力の最高度發揮を可能ならしめるやうになつてゐる國家といふのが、國防國家のもつ一應の意義内容である。いはば總力國防を整備・確立せる國家のことである。

しかし、これだけでは、一應の表面的說明にすぎないのであつて、實は、國防國家といふ觀念には、新しい戰爭觀のほかその基調をなす新しい國家觀、新しい世界觀といふものゝ生成が重要な役割をもつてゐるのである。一言でいへば、新しい世界觀、新しい國家觀は、古い自由主義的・個人主義的なものゝ代りに、新しい統制主義的・全體主義的なものをみとめるのである。

要するに、われわれは、かうした新しい世界觀、新しい國家觀、新しい戰爭觀にめざめない國家に、新しい國防國家體制は起り得ないのみならず、かうした國防國家體制の確立こそが國家總力戰爭のためのいいいい建設の目標であり、理念でもある

ことを十分に味はねばならないのである。

×

ドイツを主體とする歐洲戰爭と日本を主體とする大東亞戰爭とは、いまわれわれの目の前で、完全に一つの世界戰爭として營まれるにいたつて居る。

歐洲のドイツも東亞の日本も、その戰場と戰略こそ異つてゐるもの丶、「戰爭目的」は、二つながらひとしく、米英その他の民主々義國家群を打倒し、民主々義英米主義を主軸として發展してきた近世の世界秩序、とくに前大戰後における世界のアングロサクソン化を打破するところに置いてゐるのである。

ドイツは、前大戰の結果、英米佛の策動によつて、完膚なきまでの屈辱講和の條約の下に喘ぐことになつて、いづれの日にか再起、復仇せんものと機會を狙つてゐたのであり、日本は、つとに久しく、東洋の永遠なる平和を確立すべく、國力增强の段階毎に、直接間接、妨碍をなす西歐諸勢力の東亞よりの驅逐に努めてきたのである。そして、兩者ひとしく、自國を中核とした新秩序の形成、そして、さらにその新秩序を主軸とした世界新體制の建設といふことを指導理念として考へてゐるのである。

しかも、この東西二つの新秩序建設國が、つとに、固く盟約を結ぶことによつて、その共同目的を達すべきことを誓つて居ることは、われ〳〵のつねに胸に置くべき事柄である。

まづ、昭和五年（一九四〇年）九月二七日、ベルリンにおいて正式調印締結さ

大日本帝國政府、ドイツ國政府およびイタリヤ國政府は、萬邦をして各々その所を得しむるをもつて恒久平和の先決要件なりとみとめたるにより、大東亞および歐洲の地域において、各々その地域における當該民族の共存共榮の實をあぐるに足るべき新秩序を建設し、かつこれを維持せんことを根本義となし、右地域において、この趣旨によれる努力につき相互に提携しかつ協力することに決意せり。

而して三國政府は、さらに、世界いたる所において、同樣の努力をなさんとする諸國に對し、協力を吝まざるものにして、かくして世界平和に對する三國終局の抱負を實現せんことを欲す。よつて日本國政府、ドイツ國政府およびイタリヤ國政府は、左の通り協定せり。

れた日獨伊三國同盟の條約要旨をみやう。

第一條

日本國は、ドイツ國およびイタリヤ國の歐洲における新秩序建設に關し指導的地位をみとめかつこれを尊重す

第二條

ドイツ國およびイタリヤ國は、日本國の大東亞における新秩序建設に關し、指導的地位をみとめかつこれを尊重す

第三條

日本國、ドイツ國およびイタリヤ國は、前記の方針に基く努力につき相互に協力すべきことを約す。さらに三締約國中いづれかの一國が、すでに歐洲戰爭又は日支紛爭に參加し居らざる一國によつて攻撃せられたるときは、三國は、あらゆる政治的、經濟的および軍事的方法により相互に援助すべきことを約す

この條約締結にあたり、畏くも、大詔を煥發遊ばされたのであるが、あきらかに、かう仰せられてゐる。

大義を八紘に宣揚し、坤輿を一宇たらしむるは實に皇祖皇宗の大訓にして朕が夙夜眷々措かざる所なり而して今や政局は其の騒亂底止する所を知らず人類の蒙るべき禍患亦將に測るべからざるものあらんとす朕は禍亂の戡定平和の克復の一日も速ならんことに軫念極めて切なり乃ち政府に命じて帝國と其の意圖を同じくする獨伊兩國との提携協力を議せしめ茲に三國間に於ける條約の成立を見たるは朕の深く懌ぶ所なり

惟ふに萬邦をして各々其の所を得しめ兆民をして悉く其の堵に安んぜしむるは、曠古の大業にして前途甚だ遼遠なり爾臣民益々國體の觀念を明徴にし深く謀り遠く慮り協心戮力非常の時局を克服し以て天壤無窮の皇運を扶翼せよ

日獨伊三國は、昭和一六年（一九四一年）一二月一日、日本の對米英宣戰に即應して、さらに、緊密なる協定、すなはち對米英戰共同遂行・單獨不講和・新秩序建設協力の三大原則を内容とする新協定を結んだのである。

第一條

日本國、ドイツ國およびイタリヤ國は、アメリカ合衆國およびイギリス國により强制せられたる戰爭をその執りうる一切の强力手段をもつて勝利に終るまで遂行すべし

第二條

日本國、ドイツ國およびイタリヤ國は、相互の完全なる了解によるにあらざれば、アメリカ合衆國およびイギリス國のいづれとも休戰または講和をなさゞるべきことを約す

第三條

日本國、ドイツ國およびイタリヤ國は、戰爭を勝利をもつて終結したる後においても亦一九四〇年九月二七日その締結したる三國條約の意義における公正なる新秩序招來のため最も密接に協力すべし

かやうに、日本とドイツとは、それ〴〵東と西とに分れて世界新秩序建設のため、さしあたつては世界戰爭完勝のために、緊密な提携協力をもつて努力しつつあることは、單に、政治的・軍事的意義のものたるにとゞまらないのであつて、われわれは、その深い世界史的意義の上から、精神的・思想的・世界觀的轉換のもつ意味をよく味はねばならぬと思ふ。

世界に新舊二つの世界觀が行はれて、對立抗爭し、あげくの果てが、世界觀的な世界戰爭まで、惹きおこすやうになつた、そのそもそもの動因をなしたのは、これまた、前大戰以後の世界情勢そのものであつた。

× ×

第一次歐洲大戰は、その規模こそ、世界史はじめての世界的規模をとつた大戰爭であつたかもしれないが、いはゆる世界觀といふものゝ上からながめれば、內面的には、さう大した深刻さをもつた戰爭ではなかつた。もともと、產業革命による近代國家へのいちはやい脫皮を武器にして、世界侵略の爪牙をふりまはしつゝあつた同じ立場の西歐諸國の勢力爭ひが、その大きな原因だつたのであるから、戰爭自體は、單なる西歐諸國同志の關ヶ原の一戰ぐらゐの意味しかなく、勝

つた英米佛側が德川幕府となり、敗れたドイツその他が石田三成となつただけの話である。

だが、その戰爭後の世界の動きが、戰爭そのものよりも、深刻な情勢を示すことになつたのである。いままでみられなかつた世界觀の對立が、世界に芽を出しはじめたからである。

大戰に勝つて國際聯盟と稱する「幕府」をスイスのジュネーブに開設したアングロ・サクソンは、氣おごつてその善後經營を誤り、かへつて、世界の世界觀的動搖を激化した傾きさへあつたのである。

しかし、また端的にいへば、ながらく世界に君臨した英米佛のもつ世界觀――自由主義・個人主義・機械主義の世界觀――の壽命が、そろ〳〵盡きはじめて、大戰の勝利を置き土産に歿落しかけたのだ、とみる方があたつてゐたのである。

古いのれんに物をいはして、多くの味方を引きつけて、喧嘩に勝つてはみたものゝ、すでに、多くの徳性を失ひかけ、精力衰へかけてゐた古いのれんの主は、喧嘩終結後の善後措置を完全にやつてのけるだけの腕と力をなくしてゐたのである。

そこで、アングロ・サクソンの世界觀であるが、一言で申せば、やはり、自由主義・個人主義的世界觀といふことになるであらう。

英米佛の建國精神が、自由主義・個人主義世界觀を基調としたものであつたから、彼等の支配せる世界も、また、滔々として、自由主義・個人主義世界觀が、ゆきわたつたことは、あたりまへのことであつて、しかも、きはめてながい間、世界を支配し、大戰に勝利さへ獲得したので、英米佛の自由主義・個人主義世界觀は、もはや、世界人類社會の考へおよぶ絶對の原理であり、到達し得るかぎりの最高の攝理であるやうに思惟もされ、教育もされた。國際生活においても、國

家生活においても、社會生活においても、個人生活においても、ことごとく、自由主義・個人主義世界觀が、哲學者のいはゆるア・プリオリな、普遍絶對の生活原理であるやうに考へられた。この原理、この世界觀に反する一切の世界觀、一切の原理は、誤謬であり、犯罪であり、冒瀆であり、反文化的であり、野蠻であると、考へられた。

いままでの長い年月の間、英米佛の思想戰は、完全な勝利に終つてゐたのである。彼等の建設精神たる自由主義・個人主義世界觀が、世界を支配し風靡したことは、いひかへれば、思想の面から、彼等の世界支配が完遂されてゐたことを意味するからである。

むろん、英米佛の近代先進諸國が、世界における一切の文化をば、その自由主義・個人主義世界觀の徹底によつて、つよく推進し、たかく昂揚したことについ

ては、世界史の上で、一應大きな價値があたへられねばならぬ。この世界觀が、いちはやく、世界に徹底し、普及しなかつたならば、中世から近世への動きにおいて、世界は、封建主義からの脱皮を完全に遂行しえなかつたであらうからである。まことに、「近代は、自由主義とともに生れ、それとともに榮えた。科學はこれによつて發達し、技術は飛躍的な進歩を遂げ、物質の山は積まれ、世界は擴大され、人間の視野は全地平線へとひろげられ、燦然たる高度の文明が、この地上に築きあげられた。」自由主義の歷史的功績の絶大なことは十分にみとめねばならぬ。

個人主義もさうである。個人主義もまた一つの役割をもつた。これも一つの覺醒である。カント的人格自律の觀念は、人間を奴隷から解放し、またこれによつて人間の尊嚴さを繰り返し教へてゐる。……都市の商人たちが、つくりだした社

會はその基礎において利己的な社會・物質的社會である。フランスの革命も個人の財産の基礎のうへに建てられた。アメリカの實狀は、個人の財産、財産を獲得する能力、その能力の相違、その相違から來る財産の諸階級を擁護するために組み立てられたのである。

かうした自由主義・個人主義世界觀に、それに相應した國家觀がうまれたことは、當然のことである。

英米流の自由主義・個人主義の世界觀によれば、國家とか民族とかは、個人の利益を保護し、個人の幸福を增進するための手段としての集合體でしかない。このやうな國家や民族は、必然の勢ひとして、他の國家や民族と利害關係上の對立を惹きおこすことになる。つまり、ある國家・民族の存立と、他の國家・民族の存立とは、たがひに、相容れないものであつて、自らの存立・發展をはかるため

には、他の國家や民族を征服しなければならないのである。といふことは、いひかへれば、世界は、西洋人の國家と民族のために存在する世界として、支配されねばならぬ、といふことである。

しかして、かういふ世界觀に基く多數の國家同志の間で、互ひの世界支配を完成しようとして、勢力爭ひが行はれるやうになるのは、あたりまへの話である。前大戰がすなはちその勢力爭ひであつて、それは、いはば、かうした世界觀の發展の生んだ必然的な、大きなカタストローフであると同時に、そのカタストローフの打擊の大きかつたために、硝煙の間から、徐々に、かうした世界觀に對する懷疑・反潑・訂正・否定といつた標徵をもつたもろもろの現象があらはれはじめたことでも明かなやうに、それは、自由主義・個人主義世界觀に終止符をうち、新らしい世界觀による攻勢の契機をつくつたものとなつたのである。

古い自由主義・個人主義世界觀に對して、世界で、一番早く、懷疑し反撥した國は、ほかならぬ大戰における戰敗國ドイツと戰勝國イタリヤであつた。

戰敗國ドイツの政府と國民が、戰後の尨大なる負擔に四苦八苦してる間に、國民の一部から、徐々に古い世界觀の打破こそ唯一の國難打解策だ、といふ聲が叫ばれ、政治的に動き出し、思想的に國民をとらへ出した。そのうちの一つの動きこそ、ヒトラー一派のナチス國粹運動であつたのである。

戰勝國イタリヤも、その政府と國民が、戰爭によつて得た獲物が、戰爭によつてあたへられた犧牲にくらべてあまりにも貧弱な現實に苛まれて、これまた四苦八苦してる間に、國民の一部から、舊い世界觀の克服によつて窮境を突破し、國力を再建設しやう、といふ强い動きが、國家の政治と化し、國民の思想と化した。ムツソリーニ一派のファッショ國粹運動が、それであつたのである。

戰勝國日本は、その要求の全部が通つたわけではなかつたが、とも角、戰場から遠く離れれ極東において、各國の經濟機能の停止してゐる隙に、非常な經濟國力の伸張ぶりをしめしたゝめに、政府も國民も、大に氣をよくし、英米佛世界觀と世界支配を擁護するための國際機關たるにすぎない國際聯盟の重要な一員として、戰後の世界經營に參劃した。英米佛は、英米佛で、日本の東亞における勢力が、みづからの世界支配に對する大きな妨害であることをいつも念頭に置いで、着々世界經營をしてゐたのだが、殘念ながら、當時の日本の爲政者は、かうした動向には、大した懸念もみせなかつた。だから、大戰後の日本は、國際協調、英米追隨が對外政策の要諦となり、英米佛のデモクラシーが對內政策の基調となつてしまつたのである。日英同盟を破毀されても、ワシントン、ロンドンの軍縮條約を押しつけられても、迷へる日本の朝野は、おほむね、これを歡迎した

道と考へ、天皇機關説を日本憲法解釋のための最も「科學的」な、合理的な、權威ある最高學説と考へたり、その他、文化・敎育・社會・經濟のあらゆる分野の世界觀的基調を自由主義・個人主義に置いたりで、甚だしいことには、大正末期昭和初期にかけて、猛烈な勢で、共產主義唯物主義的世界觀の侵入さへあり、政治・思想・敎育・文化あらゆる分野における多數の有能有爲の人物が自由主義・個人主義世界觀を溫床とし、これにあきたらずして、左翼思想に走り、唯物主義的世界觀のとりことさへなつてしまつたのである。いひかへれば、前大戰後の日本は、完全に、英米佛の平和戰略、思想作戰にひつかゝり、對外的にも、對內的にも、危うく、無力無爲の惰弱國家になりかけてゐた。——それをたまりかねて起ち上つたのが滿洲建設の大仕事であつたのである。昭和六年(一九三一年)九月の滿

洲事變勃發は、いはば、英米佛の自由主義・個人主義世界觀による世界支配、その國內への侵入に對して、一大鐵鎚を下し、猛烈に反潑し、かうした世界觀による混沌にいたらぬ前に、日本固有の新しき世界觀による興國を志したものにほかならない。

昭和六年といふと西洋歷で、一九三一年、ヒットラーが政權をとつて、本格的な國家經營として、古い自由主義・個人主義の世界觀の打破に着手したのが一九三三年であり、ムッソリーニが、ローマへ進軍し、强力內閣を組織して、組合國家建設に乘出し、古い世界觀の打破を絕叫したのが、一九二二年（大正一一年）であつた。イタリヤの動きは、一九三五年（昭和一〇年）の伊エ紛爭、エチオピア併合にいたつて、はじめて、その對外政策における世界觀的基調を明かにしたやうなものであるから、ふりかへつてみれば、日本の滿洲事變による動きこそは、

世界における舊秩序打破への原動力だつたわけであり、しかも、その後の日本の一擧手一投足、ことごとく、その感があるのである。

× × ×

だが、さらにふりかへりみれば、滿洲事變が英米佛の古い世界觀による世界秩序に對する大きな打擊をあたへ、これを克服することによつて、新しい世界觀による世界秩序を建設すべき日本の大きな營みの口火をきつたものであることは間違ひなしとして、今次の大東亞戰爭——本格的な英米世界秩序打破のための戰爭——開始にいたるまでに、日本の國內體制は、はたして、十分な世界觀的脫皮、積極的再建設を遂げてゐたであらうか。新しい世界秩序の建設に乘出さんとするものが、否々、すでに、敢然と乘出したものが、自己の國內秩序の建設をすでに

果したか、果たしつゝあるのか、われ〳〵は、大いに反省してみなければならぬ。

なるほど、ドイツの再建設着手は、日本の滿洲事變突發より二年おくれた。しかし、一たび、再建設に着手したドイツは、一九三三年以來、わづか七ヶ年位で、世界新秩序建設のための準備體制を完全に近くなしとげてゐた。しかも、國内における一切の古い世界觀に基く秩序を打破して、新しいナチス世界觀に基く秩序に切換へ、これを基調として、さらに、新しい戰爭觀と新しい國家觀の下に、新しい世界秩序建設實行のための國防國家體制を建設してゐた。古い世界觀の打破、古い世界秩序の變更によつて、世界に理想の平和をうちたてるためには、差當り、大規模な世界戰爭の到來は必然である。しかも、世界史上稀にみる大規模な世界觀的轉換のための大規模な戰爭は、あらゆる分野を總動員してかゝらねば、勝ち

抜くわけには行かぬ總力戰爭なのだ。總力戰爭に勝ち抜くための準備は、總力國防でなければならぬ、國防國家の體制こそはこの大掛りな世界觀的戰爭に對處する絕對不敗の國家體制なのだ、といふのが、一九三三年（昭和八年）以後のナチス・ドイツのかたい信條であり、施政施策の根本基調であつたのである。

問題は、こゝである。

われわれナチス・ドイツにもとめる他山の石は、この點にもあるとおもふ。

だが、われわれが、こゝでよく〳〵頭においておかねばならぬことがある。古い英米流の自由主義・個人主義世界觀を打破して、これに代る新しい世界觀として、ドイツはナチス的全體主義世界觀を高らかにかゝげたのであるが、日本にも、日本獨自の皇國世界觀があり、從來、やゝもすれば自由主義・個人主義世界觀の壓力のために、うちかくされてゐた立派な世界觀があり、この世界觀を明徵し、

徹底し、施政施策の基調とさへすれば、古い自由主義・個人主義世界觀は、立派に打破できるといふことである。しかし、ナチス的全體主義的世界觀のごときは日本的世界觀の實體のうちに醇平として包容されて、しかも、それ以上の內容と力とをもつてゐるのである。

要は、この日本的世界觀によつて、滿洲事變以來の對外、對內政策の一切をリードしさへすれば、よかつたのであるが、現實は、かならずしも、さうは行かなかつただけの話である。しかし、いまや、滿洲事變以來の、否、明治維新以來の日本的興亞政策、日本的世界政策の總決算をなすべき大東亞戰爭が開始されてゐるのである。

過去は過去として、われわれは、戰爭に勝ち拔くためには、それだけの準備建設を必要とする。ドイツは、戰爭に入るまへに、戰爭のための建設をした。日本

とても、滿洲事變乃至支那事變このかた大東亞戰爭に入るまへに、立派な「戰爭のための建設」をしてきたのである。滿洲事變や支那事變も、名こそ事變だが、やはり「戰爭」に違ひない、日本は、まさしく、戰爭しつゝ建設してきた上に、さらに、より大いなる建設のために、戰爭をなしつゝあるのである、何といふ雄渾な歩みであらう。繰りかへしていふ。

戰爭しつゝ、建設しつゝ!!

建設しつゝ、戰爭しつゝ!!

われわれは、刻一刻、新しい世界秩序へと脱皮してゆくのである。世界觀の戰爭と世界觀の建設によつて、われわれは、あくまで、勝利への進軍をつゞけねばならないのである。

日本的世界觀とナチス的世界觀

×

大東亞戰爭と大東亞建設の根本理念は一言でいへば、八紘一宇（または八紘爲宇）といふことに盡きることは、いまや、皇國民一億のかたい信念となつてゐる。

およそ、大東亞の戰爭と建設とについて語らんとするもの、考へんとするものは、ひとしく、この八紘一宇の肇國精神を片ときといへども、肝に銘じ、腦裡に刻みつけておかねばならぬ。これなくしては、皇國のまさしくとりかゝつてゐる

大東亜建設の大業が、米英の大東亜侵略や、ひいては、ドイツの歐洲新秩序建設の根本理念やと、いかに異るものであり、どれほど尊いものであるかをみのがしてしまふことになる。

「八紘爲宇」、すなはち、八紘を掩ひて宇と爲す、とは、申すまでもなく、神武天皇が、大和の橿原に天下の中心となるべき都をお奠めになつたときの詔の中に、仰せられてある御言葉である。

「日本書記」の「神武天皇紀」における御奠都の詔には、かう仰せられてゐるのである。

我東に征きしより玆に六年になりぬ。皇天の威を頼りて凶徒就戮されぬ。邊土未だ淸まらず餘奸尚梗しと雖も、中洲之地復風塵なし。誠に宜しく皇都を恢廓め大壯を規摹るべし。而るに、今運屯蒙に屬ひ、民の心朴素なり。

巢に棲み、穴に住む習俗惟れ常となれり、夫れ大人の制を立つる、理必ず時に隨ふ。苟も民に利有らば、何ぞ聖造に妨はむ。且當に山林を披拂ひ、宮室を經營りて、恭みて寶位に臨み、以て天々を鎭むべし。上は則ち朝靈の國を授けたまふ德に答へ、下は則ち皇孫の正を養ひたまひし心を弘めむ。然して後に、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや。夫の畝傍山の東南橿原の地を觀れば、蓋し國の墺區、治るべし。

まことに、詔のうちに拜する皇謨の廣大なる、億兆一たび拜承して、おのづから、心あらたまり、身ふるひたつ思ひがするのである。

こゝに、肇國の基は、磐石のごとくに、さだまり、爾來連綿たる皇統、御歷代養正に大御心を弘められてゐる。

明治天皇の御製に、

橿原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

と仰せられてあるやうに、皇祖天照大神の大御心に基かせられた　神武天皇のこの肇國の御精神は、ながく〳〵御歴代の天皇によりうけつがれて、國の礎はうごかず、今日にいたつてゐるのである。

そして、この御精神がまた、すなはち、われわれ臣民の翼賛したてまつる大東亞建設の天業の御精神でなければならないのである。

八紘、すなはち「あめのした」は、多くの異るものゝ存在を意味し、爲宇、すなはち「いへとす」とは、その異立を統合するの意味である。異立は、榮えを意味し、統合は、すなはち、まつらふことである。大東亞の諸國家・諸民族をして、おの〳〵そのところを得しめ、その特性を發揮せしめつゝ、大東亞全體の發展隆

昌を圖る、――これが、大東亞建設における八紘爲宇の御精神の要點にほかならないのである。

あらゆる對立・相剋・摩擦・爭闘を止揚して、むしろ萬物を包容するといふ八紘爲宇の大精神は、このやうに、わが皇國の世界に比類なき世界觀として、いまや、大東亞建設の大業に、くまなく、滲透されて行かねばならぬ。

あらゆる民族は、日本に敵するときにのみ日本の敵として、征討されるのであつて、一たび、われに順へるものは、すべて、日本國民たる大家族の一人に加へられるといふ廣大無邊の皇德、包容性豐かなる國性こそ、大東亞建設の前途をして、洋々大海のごとからしめるのである。

一億中一人といへども、そのところを得ざるものなき樣しろしめし給ふ大御心は、大東亞の圈内に於けるあらゆる國家、あらゆる民族をも、それぞれの地位と

特性において、そのところを得しめる樣しろしめし、かくして、この大精神を人類世界におよぼさしめんとするのである。

それは、たゞ單にわが日本のみの生きかつ富むの道にあらずして、大東亞乃至世界全體のあらゆる國家あらゆる民族が生きかつ富むの道である。相倚り相扶けて自他ともに、眞に生きかつ富むの道を現實の世界に具現せんとするのである。端的にいへば「征服」とか「支配」とかいふことは、わが八紘爲宇の大精神に悖るものである。

このやうな日本世界觀、このやうな根本理念をわすれて、大東亞の建設はないはづであつて、そこに、ナチスといへども、絕對に、模倣しえざる日本の特性が存するのである。

×　　×

「世界觀」といふ言葉は、ナチスにおいて、とくに愛用される言葉である。原語で、ヴェルトアンシヤウウンクといふ。ヴェルトといふのが「世界」といふ意味の語で、アンシヤウウンクといふのが、「觀察」とか「見解」とかいふ意味の語である。世界に對する觀察、世界に對する物の見方、さういつた意味の言葉である。これをむづかしくいふと、世界觀とは、世界との關聯における人類の生活の意義の全體と、人類がその生活をなして行く上において宇宙のあらゆるものに對してもつ所の價値の全體との、二つの全體を綜合して得られるところの總體的な考へ方の構成をいふのださうである。しかし、こんなむづかしい定義はどうでもよい。要は、それによつて所期される內容であり、それによつて意圖される目標で

ある。

ナチスが「世界觀」といふことを八釜しくいひだしたのは、新國家建設の精神的・思想的基調の上に、强力な根本的な統一を期したからである。いひかへれば、一九三三年（昭和八年）からナチス政府の手によつて建設活動にはいることになつたドイツは、かうした根本的な精神的思想的基調から叩き直さねば、十分な建設工作をなし得なかつたといふことである。

ドイツ民族六千萬をナチス世界觀で、心底から叩き直し、鍊へ直すことが、ナチスの戰爭のための建設にとつて、第一の要件だつたのである。

だから、ヒトラー政府は、その新ドイツ建設にあたつて、國民の精神的團結の强化のために、ナチス的世界觀の普及徹底、この世界觀を基調とした施策といふことに全力を集中した。單なる國民の道德的精神的緊張統一といふことではなく

して、もつと突き進んで、ものゝ考へ方の根本的革新、英國流デモクラシー的考へ方に對する世界觀的革新といふことを要請したのである。

ナチス的世界觀――これが、新ドイツ國建設、ドイツ總力國戰家體制、高度國防國家の體制の確立における一切の精神的基調とされたのである。一九三三年一月のヒトラー政府成立以來、庶政一新の一切の理念的基調が、このナチス的世界觀であつた。

しからば、このナチス的世界觀とは、そもそも。どんな内容をもつた世界觀なのであるか。

ナチスといふのが、ナチオナルゾチアリスムス（民族社會主義）もしくは、ナチオナルゾチアリスチツシエ・ドイチエ・アルバイター・パルタイ（民族社會主義ドイツ勞働黨）の略稱であることは、とくに說明するまでもないことであるが、

その呼稱がしめすやうに、ナチス根本理念は、民族主義、いはゆる民族協同體の思想である。

民族協同體（フォルクス・ゲマインシャフト）といふ觀念は、ナチス思想において とくに重要視される核心であるが、ナチスによれば、民族協同體とは「血と土」を基調としてできたものである。したがつて、民族協同體は、血族協同體でもあり、土地協同體でもある。民族協同體にあつては、民族同體が、血と土とのつながりにおいて、職業的身分によつて、社會を構成する。そして、職業的身分によつて構成された民族協同體社會は、いはゆる指導者原理によつて運營される。「職業的身分」の觀念によつて、ナチスは、民族構成員を自由主義的營利勞働の擔當者に墮落せしめることなく、むしろ、かうした中世的宗敎的理念を復活せしむることによつて、職業觀念を營利思想から勤勞思想へと切りかへた。

ナチスによれば、民族構成員は、職業によつて、勞働協同體を構成し、社會的地位身分を獲得するのであるから、そこでは、もはや、各個人の自由な民族的意思決定はゆるされないはづである。民族全體が、意思を共にし、行動を共にし、鬪爭を共にし、困窮を共にし、要するに運命を共にするところの、意思協同體であり行動協同體であり、鬪爭協同體であり、困窮協同體であり、要するに運命協同體であるのである。

そして、かうし協同體の意思・感情・行動・鬪爭・困窮・運命といふものをよく熟知し、よく體得せるところの協同體人格の所有者が、この協同體の指導者となつて、指導者原理に則つて、民族全體の意思・感情・行動・鬪爭・困窮・運命を指導するのである。かうした指導者は、もはや、單なる獨裁者といふ以上のものであつて、民族そのものと本質的一體をなす最高至上の絕對者である。

だから、ナチス世界觀による國家論においては、最高の政治價値を有するものは、民族である。國家そのものは、民族の單なる手段で、何らの價値を有するものではない。いひかへれば、國民は、民族意思の單なる執行者であり、國家は民族あつての國家である。民族は、國家より優位にある、といふのである。

このことは、ヒトラーの「わが鬪爭」のなかに、ハツキリと書いてある。すこしばかり、讀んでみよう。——

ユダヤ人カール・マルクスは、民族國家の思想からブルジョア階級を追ひだすことによつて、國家そのものを否定する彼の怖るべき教義の道が開かれたといふことを知つた。かやうにして、一たび、國際主義者の奸計の犠牲となると、ブルジョア階級は、もはや彼らの民族を維持することができなくなる。そして、彼等が覺醒しないかぎり、彼らの世界は死の運命につながれる。

この理由によつて、民族的人生觀に基づいた新運動の第一の義務は國家が民族の保護者であるといふことが、明白に理解されねばならないといふことである。國家は、文化を創造することができない——國家は、單に、文化を創造する民族に役立ち、これを保護し得るに過ぎない。

かくて、つねに昻揚されつゝある人類の成功はいかなる國家にも依存せずして、文化を創造し得る民族の生存、ならびに、その民族の開花的な生活に依存する。

國家は、一つの目標への手段である。

國家の唯一の目的は、肉體的にも精神的にも同等な人間の協同體を維持し、向上させることである。この目的に役立たない國家は畸形物である。……

國家は、一民族によつて生命のための永遠の戰ひに使用すべき偉大にして强力な武器である——それは、また、共同の意思を表現するが故に、あらゆる者がそ

れに服從せねばならぬ武器である。……

かういつたナチス世界觀、ナチス國家觀であるかぎり、それが皇國世界觀と根本的に異ることは、いふまでもないであらう。

× × ×

大東亞新秩序の建設は、ひとり、皇國日本のための建設にとゞまらず、大東亞の諸地域、諸民族をして、それ〴〵そのところを得しめ、特性を發揮して、共存共榮の實をあげしめるための建設でもある。しかるに、ナチス・ドイツの新歐洲秩序の建設は、要するところ、ドイツ民族の血族及土地協同體を確保し、全歐洲をドイツ民族の能力の發揮、繁榮といふことのために、新たな觀點から、建て直さうといふのである。いはば日本は、八紘爲宇といふ大精神でもつて、「權威によ

建設」をなさう、といふのであるが、ドイツは、民族社會主義といふ根本理念でもつて、「權力による建設」をなさう、といふのである。權威は、德による心服を要請し、權力は、力による壓服を要請する。權威は大和による支配をもとめ、權力は、征服による支配をもとめる。

大東亞の建設と新歐洲の建設とは、その根本理念において、かうした差異がある。しかし、これは、もとより、日本とドイツの歷史。國柄から來る必然的の歸結であるのであつて、ヒトラーがドイツ國再建の大業を、完遂し、再建ドイツ國を中核體として、アングロ・サクソンの束縛を脫した新しい歐洲體制をうち立てようといふときにあたつて、その遠大なる計畫にふさはしい深遠な指導理念をもとめても、ドイツとしては、所詮、かうしたナチス精神以上にでることを得なかつたまでのことである。しかし、それにしても、ヒトラーの指導下に、ドイツ民族うつ

て一丸となり、忠勇にして果敢なる將兵が喜んで祖國の難に赴く現在の姿といふものは、ドイツとしては、一應理想の極致に達してゐるとみるべきであらう。

しかも、その努力は、着々效を奏して、一九三三年（昭和八年）のヒトラー政府成立このかた、實に、數へきれないほどの國力の伸張をみせ、ことに、一九三九年（昭和一四年）の對波戰勃發以來の三年間において、歐洲大陸の勢力は、おほむね、ドイツの力の前に、慴伏し、歐洲新秩序の地盤をおほむね確保して居るのであり、これは、丁度、滿洲事變、支那事變このかた滿洲國建設蒙疆建設新支那建設が着々姿を整へ、大東亞戰爭勃發によつて、はじめて、天地豁然、南方諸地域を一擧に、わが手に收めて、こゝに、一應の大東亞建設の地盤を確保しえてゐるのと、歩調をおなじうする。しかも、この歩調は、一九三九年（昭和一四年）の三國防共協定、一九四一年（昭和一六年）の三國軍事同盟といふかたい結

びによつて、ますく拍車をかけられつゝあるのである。

基調たる根本理念もさることながら、現實の目標が、究極においておなじ姿をもとめつゝある以上、これまた當然の歸趨でなければならないことである。

× × × ×

たゞ、こゝで、ナチス・ドイツの企圖しつゝある歐洲新秩序について考へておかねばならぬことがある。

それは、ナチスのいはゆる民族社會主義、民族國家主義、一民族一國家主義による全體主義理念が、現在および將來の歐洲新秩序の建設にあたつて、いかやうに扱はれつゝあるか、扱はるべきか、といふ問題である。

すでに、東歐および北歐を席卷し、西部戰線も、バルカン戰線も、思ひのまゝ

に懾伏せしめ、遠く北阿戰線にまでも、その手をのばしつゝあるドイツは、いまや、その廣大な新歐洲圈内に、數多くの民族を包含してをる狀態であり、このもろ〳〵の國家、民族を、ドイツ民族のナチス國家との關係で、いかやうな取扱ひをなすかは、ドイツとしては、まことに重大な問題なのである。

しかも、ドイツには、歷史的にも、國柄としても、日本におけるやうな八紘一宇の根本理念がない。ヴエルサイユ體制の打破、大ドイツ國の再建までは、指導理念として、民族社會主義の强力なる實踐のほか、なにも考へる必要なく、それで十分な效果をさへあげてきたのであるが、第二次歐洲戰爭勃發以後の新情勢に對處せんとするドイツとしては、いまゝでの民族主義的全體主義の理念のなかに、歐洲新秩序建設への指導性がはたして、十分にありうるかどうか反省せねばならぬ立場にあるのである。

おそらく、歐洲戰爭も對ソ戰爭の結末、いまだつかず、いづれドイツを中心にして考へらるべき歐洲新秩序は、現段階としては差當り緊要な經濟建設に主眼が置かれてゐる程度で、その根本的な政治體制、その指導理念といふことになれば、ドイツとしては、まだ〳〵構想を練り、工夫を凝らさねばならぬ餘地が大にあるのではないか。

たゞ、こゝで、興味ふかく想起されるのは、ナチス・ドイツの新國家理念、新秩序理念が、最近次第に、わが國體の本義をならひつゝある、といふことであることである。これは、戰時下のナチス・ドイツに親しく足を運んで、各分野をつぶさに觀察し、研究して歸朝された藤澤親雄氏などのつよく指摘されるところである。

氏によれば、ゲルマン古代の民族的世界觀を再興したナチスが、政權を掌握して以來、いまゝでの大學などで講ぜられてきた自由主義的國家學における國家三

要素說（國家を主權・人民・土地の三要素から成立する支配機構であると說明する）が、根本から動搖し、ドイツ語のいはゆるシユタートの意味の國家觀念が權威を失つて、これに代つて、フオルクスゲマインシヤフト（民族協同體）が新興國家學の中核的な生命理念となり、主權・人民・領土の舊國家秩序が崩壞して、これに代つて、指導・民族・生命圈の新國家秩序が建設され、新しいドイツの國家はその本質において、シユタートでなくして、ライヒであり、生命なき權力機構でなくして、つねに生成發展してやまぬ民族協同體であり、支配さるべきものでなくして、指導せらるべきものであり、かゝる生命的國家における有機的成員は、相互に何の緣もない自由平等のいはゆる個人ではなくして、一つの民族生命の多元的顯現として同じ血に結ばれてゐる民族同胞である、といふやうな考へ方に進んでゐる。これは、まさしく、わが邦における「くに」の觀念に近いものである、

といふのである。

また、ナチスの考へる歐洲新秩序といふものゝ構想についても、氏によれば、そこでは、「一即多、多即一」といふ東洋哲學の原理が追求されてをる。すなはち獨伊は、軍事的にも、政治的にも、經濟的にも、文化的にも、全歐洲を指導するが、自國の利益だけを考へて行動するものではない。「公益は私益に優先す」といふ全體主義の根本原理にしたがつて、大乘的に、歐洲のすべての國をして、みなそのところを得せしめ、共存共榮し得るように心懸けねばならぬ、第二次歐洲戰爭は、この意味での道義性をふくむ。單に、英佛に代つて獨伊が歐洲のヘゲモニーを握るといつたやうな淺はかなものでない。新歐洲秩序における各國は、歐洲全體の防衛と發展とに牴觸しないかぎり、自由に、自國の政策を究め得る。歐洲共榮圈全體の將來の運命決をするやうな重大な政治・經濟・外交・軍事・財政・

交通などの問題は、指導國家たるドイツに委せ、この大方針に矛盾せぬかぎりにおいて廣汎な自由が、各國にあたへられる、といふのが、歐洲の政治的新體制の構想理念のやうである。

かうなると、たしかに、ナチスとファッシズムの全體主義的理念と日本の皇國的理念とは、その世界新秩序の建設の營みにおいて、近似せる關係をもつにいたつてゐる。すくなくも、これらの建設理念は、明瞭に英米の自由主義・個人主義的理念と相對立する立場にあるわけである。

× × × × ×

とまれ、皇國の世界政策は、肇國以來、萬邦萬民をしてそのところを得しむるの八紘爲宇の大義を基調としてゐるのであるから、そこに、まさしく、世界無比

の國體のありがたさがあるわけである。皇國政治は、單なる獨裁にあらず、デモクラシーにあらず、されぱといつて、單なる全體主義にあらず、個人主義にあらず、八紘爲宇の大義による融通無礙なるもろ〳〵の主義の綜合政治であるともいへやうか。かやうな政治理念あればこそ、數多くの國家や民族を包容しつゝ、しかも、その間、なんらの矛盾もなく、摩擦もなく、渾然一體たる皇德精神の和の姿あるのみである。肇國このかた、かゝる皇道政治の根本理念がみな失はれずに、悠久三千年の建設道を歩みきたつたのである。いまこそ、この光輝ある皇道政治理念を昂揚し、廣大無邊なる皇謨を顯現して、大東亞乃至世界の誤れる英米體制を排撃して、一大新體制を戰爭と建設によつて、展開し擴充すべきときであるのだ。

から考へてくると、こゝで、さらに、大きな課題が、われ〳〵にあたへられるわけである。ほかでもない、大東亞戰爭への突入によつて、いや應なしに、皇道精神による大東亞の新建設を遂行し、新しい世界秩序の再建設に乘出し着手せねばならなくなつたわが國が、わが國みづからの國內體制をこのまゝにして置いてやつてゆけるのか、といふことである。わが國みづからの體制が肇國以來の國體に合致した政治・經濟・文化・教育・思想その他もろ〳〵の皇道體制になつてゐるならば、またなにをかいはんやであるが、明治維新このかた、急激な西歐物質文明の輸入による國家體制整備に沒頭してきたわが國として、一應已むを得ない事情にあるとして、はたして、西歐式英米思想、米英的心情にこびりついた部面はな

× × × × × ×

いか。政治・經濟・思想・教育・文化・社會その他ありとあらゆる部面において、明治維新以來の日本の姿を、こゝで、眞劍に考へ直す必要はないのか。米英と戰爭をなし、米英の勢力を大東亞から驅逐し、米英式の自由主義・個人主義による大東亞秩序や世界秩序を覆へして、新たなる正義にもとづく秩序をうち立てようといふ乾坤一擲、民族興亡を賭けたるの瀨戸際において、まだ、各個人が、各分野が、米英式に恍める自由主義・個人主義思想に未練を感じ、しかも、それを絕對の眞理・正義と感違ひをしてゐる徒輩は、ゐないか。ゐるとすれば、この際、徹底的に、精神的・思想的・文化的對米英戰を戰ひぬかねばならぬ。

大東亞戰爭の總力戰的意義は、この意味でも、大きく考へ究められねばならないのである。

大東亞戰爭の目標は、いまゝで世界を支配してゐた米英勢力を、武力的に、徹

底的に叩くことに在るのみでなく、同時に、われ〳〵の間に執拗に巣喰ふ米英式の思想形態・文化形態を、一つ強力に、へし曲げて、世界の姿を八紘爲宇の大義によつて、清淨化するに在るのである。

かくして、大東亞戰爭および、これとつながりをもつ歐洲戰爭は、大世界戰爭の形において、今後、久しきにわたつて行はるべき人類間の偉大なる建設戰爭であるといふことになる。

われわれは、こゝで、大いなる人類の世紀の曙を期待すべきである。將に明けゆく人類の新世紀の曙は、われわれ人類の、かねてひさしく待ち詫びた新世界體制への眞近い序曲を奏づる妙なる建設譜なのである。

まことに、思ひみるだに、血湧き肉躍り、心ゆたかなる心地のすることである。

われわれ皇國民一億が、この大東亞戰爭の開始にあたつて、かの昭和十六年十二

月八日（一九四一年）朝にみられたるごとき、民族的緊張と感激を體驗したといふことは、まことに、それだけでも、世界史的意義大なりといふべきである。

大東亞の戰爭と建設への歩み

その一、皇國史上の對外戰爭

×

「戰爭と建設」といふあたまで、皇國日本が、肇國以來經驗してきた對外戰爭のかづ〳〵について考へてみると、歷史は、あきらかに、對外戰爭の後には、かならず、建設が行はれたことを示して居り、その戰爭も、おほむね、皇國々力の發展の前途に、已むに已まれずして、挑まれた戰爭であつたことを示して居る。

これは、われわれのとくに意をとゞめねばならぬことだと思ふ。

×　　　×

日本が歷史上、大東亞戰爭までに經驗した對外戰爭は、といへば、國民學校の兒童でも、ハッキリ答へるであらうやうに、遠い古代の神功皇后新羅御親征がその一つ、元寇に對する抗戰がその二つ、文祿慶長の豊太閤の朝鮮遠征がその三つ、日清戰爭がその四つ、日露戰爭がその五つ、第一次世界大戰の對獨戰爭がその六つ、そして、滿洲事變・支那事變がその七つである。

大東亞戰爭にいたるまでの以上七つの戰爭には、それぞれの目的・意義・經緯があり、かならずしも、一樣でないのであるが、しかも、そのいづれの戰爭をみても、歐米諸國の植民地奪略のやうな慘虐の事例もなければ、アヘン戰爭のやうな不義の戰の跡もないばかりでなく、つねに、日本をめぐる世界と時代の動向に

敏感だつたそのときどきの指導者が、眞正なる平和を確立するといふ深遠な道義的動機から、より大いなる秩序の建設をめざして戰爭した事實のみである。

× × ×

神功皇后の御親征は、いふまでもなく、今日の米英の援蔣のやうに、九州熊襲を背後から支援・使嗾しつゝあつた新羅を征することが目的であつたのであるが、征戰は、双に血ぬらさずして、新羅王の降服といふことで終結したばかりでなく、皇后の御親征の御意圖は、史家の論證によれば、あきらかに、當時の朝鮮海峽と對馬海峽を內海とする古代文化圈を復舊し、皇國みづからその主體となつて、さらに一段と進步發展せしめんとされるにあつたもののごとくである。しかりとせば、御親征は、まさしく、日本における最初の「建設のための戰爭」であつたとみるべき

である。事實、御親征によつて營まれた建設は、新羅・百濟・高句麗による大陸文化の對日移入といふ具體的內容をもつて現れ、わが文化の進展がこれによつて一段と推進されたことは、疑ない。蠶業その他の產業技術や財政運用上の進步あり、學術宗教その他の精神文化上の刺戟あり。これらは、ひいては、大化の改新の鴻業、飛鳥時代の文化の實現に對しても、大きな促進的役割を營んだのであるから、皇后の御親征は日本における戰爭と建設の現段階を考へるわれわれに無限の示唆をあたへざるを得ないのである。

× × × ×

元寇による抗戰は、日本の對外戰爭中唯一の防禦戰であつた。文永年間と弘安年間と二度の來寇も、ありがたき伊勢の神風と、相模太郎時宗の斷乎たる勇斷と、

國民の血管に流るゝ神秘なる愛國の至情とによつて、つひに、見事に、これを擊退し去り、わが神州は、成吉思汗の馬蹄下より免れ事無きをえたのであるが、元來が守勢の戰であつたから、容易ららぬ戰ではあつた。さすがの幕府も、守勢の戰の不利を覺り、むしろ、斷乎蒙古征討の水軍をいだすべし、と決定、諸國の勇敢なる武士ども、續々この擧に勇み加はらんとしたほどであつたが、この攻勢が、まだ本格化しないうちに、敵の第二回の來寇に遭つたのだといはれる。從つて、戰爭と建設といふ面から、この對外戰爭には、表面は、格別の成果もなかつたのであるが、しかし、國家の總力を國防に集中した日本精神の昂揚といふ一點からかへりみるときは、いかなる國難に直面しても、いかなる屈辱に遭遇しても、斷乎として、これに反撥し、これを克服せずんば已まぬ、たけき日本の國民精神の姿をハツキリさした一事は、日本國史上においても、稀にみる光輝ある思想建設

とみるべきものであらう。この時代の國の上下擧げての國防態勢は、消極的ながらも、日本國威の發揚、皇國理想への邁進を、一段と推進したもので、後代の眞の日本再建設に對する一の動因となつたことを想起すべきである。

× × × × ×

秀吉の試みた文祿慶長の兩役の主目的が、征明にあつたことは、史家のひとしくみとめるところであるが、しかし、その征明の目的いかんといふことになると、諸説行はれて、かならずしも、明かでないといはれる。

當時のわが國をめぐる東亞の情勢は、たとへば明の國勢漸く傾いて、國家的權威を失ひつゝあり、朝鮮王室の力も衰へつゝあり、わが日本も、時まさに群雄割據の戰國時代で、いまだ國内統一もみられぬ時代であるなど、はなはだ紛糾をき

はめてゐた反面において、歐洲諸國は、宗敎と貿易と武力でもつて、東洋侵略を着々と遂行しつゝある時代であつたから、かうした世界の大勢が、ポツ〱情報として秀吉の耳にも入り、つひに東洋の平和確立のための大明征伐の斷行を決意したのである、といふ考へ方に、われわれは、大きな示唆をあたへられるものである。滿洲事變、支那事變を通じてのわが日本の對支征戰の意圖が領土的野心に基くものでなく、支那の背後にかくれて、東洋侵略の野望を遂げんとしつゝある英米西歐諸勢力を驅逐し、もつて、アジア人のためのアジア、東亞の新秩序を確立するにあるといふ現代皇國戰爭理念は、遠く秀吉の頃においても、形は領土擴大の形であつても、その眞意において、東洋平和の確立、理想的日本の確立、擴張、いはゆる「まつらはぬものに對する荒魂の發現」といふ遠大な皇國理想主義が懷かれてゐたものと解する史家があるが、かう考へ得てこそ、秀吉の擧も、無名の戰の謗

から免かれ、皇國における戰爭と建設の歷史における大きな意味をもつことになるわけであると思ふ。

× × × × ×

日清戰爭は、いろ〳〵の經緯はあつたものの、要するに、明治維新後、急速な勢で近代國家としての成長を遂げ、東亞に迫り來る西歐勢力に對して、東亞の安定勢力たる地位を自覺した日本が、その目標の下に大陸政策を遂行してゆく第一階梯として、朝鮮問題をとりあげ、朝鮮の事大主義の因をなす背後の諸勢力の禍根を絕たんとした戰爭にほかならないのである。

明治二十七年（一八九四年）八月二日明治天皇の下し給ふた對清宣戰の大詔には、つぎのやうに仰せられてあつた。

朝鮮ハ帝國カ其ノ始ニ啓誘シテ列國ノ伍伴ニ就カシメタル獨立ノ一國タリ而シテ清國ハ毎ニ自ラ朝鮮ヲ以テ屬邦ト稱シ陰ニ陽ニ其ノ內政ニ干渉シ其ノ內亂アルニ於テ國ヲ屬邦ノ拯難ニ籍キ兵ヲ朝鮮ニ出シタリ朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ兵ヲ出シテ變ニ備ヘシメ更ニ朝鮮ヲシテ禍亂ヲ永遠ニ免レ治安ヲ將來ニ保タシメ以テ東洋全局ノ平和ヲ維新セムント欲シ先ツ清國ニ告クルニ協同事ニ從ハムコトヲ以テシタルニ清國ハ飜テ種々ノ辭柄ヲ設ケ之ヲ拒ミタリ帝國ハ是ニ於テ朝鮮ニ勸ムルニ其ノ秕政ヲ釐革シ內ハ治安ノ基ヲ堅クシ外ハ獨立國ノ權義ヲ全クセムコトヲ以テシタルニ朝鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタルモ清國ハ終始陰ニ居テ百方其ノ目的ヲ妨碍シ剰ヘ辭ヲ左右ニ托シ時機ヲ緩ニシ以テ其ノ水陸ノ兵備ヲ整ヘ一旦成ルヲ告クルヤ直ニ其ノ兵力ヲ以テ其ノ欲望ヲ達セムトシ更ニ大兵ヲ韓土ニ派シ我艦ヲ韓海ニ要撃シ殆ト亡狀ヲ極メタリ

當時の淸國も、まさしく現在の支那政府を援護する米英の立場にあつたので、韓國の安泰を確保し、東洋平和の安定を確立するには、皇國として、どうしても、背後の淸國を討たねばならぬ絶對の立場にあつた。これも、東亞秩序の建設をめざす日本の歷史的主體的地位がさうさせたのであつたのであつて、歐米の東亞支配を拒む實力を日本は年每に强めて行くことになつたのである。

× × × × × ×

そして、明治三十七年（一九〇四年）、對露戰爭にいたつては、あきらかに、日本のこの理想、東亞永遠の平和確立といふ大理想實現のために、支那及び韓國の背後にあつて侵略の爪牙を磨きつゝあつた當時の西歐屈指の强國露國を相手とした一大戰爭にほかならなかつた。同年二月十日煥發し給ふた宣戰の大詔には、

から仰せられた。

帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繋ル所タレハナリ然ルニ露國ハ其ノ清國トノ盟約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ハラス依然滿洲ニ占據シ益々其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併呑セムトス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸センカ韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此ノ機ニ際シテ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維新セムコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歳ノ久シキニ亘リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス

この當時の露國もまた、あたかも現在の米英の立場にあつたのであり、この野

望を叩かずして、東亞の平和得て望むべくもなかつたのである。

日露戰爭の終了後數年を經て、日本は、つひに、東洋平和安定の第一礎石として、韓國併合を斷行した。すでに、日本の前に敗退した支那と露國とは、日本の道義的な自衛手段のまへに手も足も出しえなかつたのである。

× × × × × × ×

そして、つひに、第一次歐洲大戰における日獨戰爭であるが、この戰爭は、いはゆる戰爭と建設といふ見地からみて、先の戰爭ほどの意義はない。日本の參戰は、たゞ、日英同盟の國際友誼によつたゞけで、大した道義的理想はみとめえられなかつた。しかも、參戰に對する報謝は、單に南洋群島の委任統治など二三のものにすぎなかつた。元來この大戰は「世界戰爭」と稱するに値しないのにもか

かはらず、あへてさう稱するのは、歐米をもつて世界となす思想に外ならないのである。

大戰の結果は、英米等アングロサクソンの世界制覇の野望は、益々達し易い情勢になつた。敗戰のロシアは、もと〳〵革命で瓦壞したのでそのまゝ大した手配も要らぬと考へられ(これは今日からかへりみれば、ドイツの場合と同様の手拔かりであつた)、ドイツは今後何百年經つても再起できぬことを目標に酷遇され、戰勝國イタリヤなどの分け前はホンの輕くあしらはれ、日本その他の有色人種國も、戰勝の曉になつてみれば、劍もホロ〳〵の扱ひ方であつたばかりでなく、いまや、歐洲を牛耳つた英米は、公然と、東亞にも野望を露骨にしはじめ、東亞の中核日本を、事毎に、邪魔扱ひにし、弱體化工作を弄しはじめた。

滿洲事變、支那事變といふ、日本第七番目の對外戰爭は、かうした揚句の果て

の結果であることは、いはずとしれたことである。したがつて、この兩事變は、いまさらいふまでもなく、滿蒙より、支那より、英米西歐勢力を驅逐して、こゝに立派な自主的の東亞圈を建設することを主眼としてゐた。名を「事變」といつて「戰爭」といはぬのは、當然である。支那の反省を促して、相共に、東亞の平和を確立するのが目的なので、しひて戰爭といへば、「聖戰」といふほかないのである。

支那事變に際し召集せられた第七十二回帝國議會開院式(昭和十二年九月四日)の勅語には、つぎのやうに、仰せられてゐる。

帝國ト中華民國トノ提携協力ニ依リ東亞ノ安定ヲ確保シ以テ共榮ノ實ヲ擧クルハ是レ朕カ夙夜軫念措カサル所ナリ中華民國深ク帝國ノ眞意ヲ解セス濫リニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事變ヲ見ルニ至ル朕之ヲ憾トス今ヤ朕カ軍人ハ百難ヲ排シ

テ其ノ忠勇ヲ致シツヽアリ是レ一ニ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞ノ平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス

朕ハ帝國臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニシ贊襄(さんじょう)以テ所期ノ目的ヲ達成セムコトヲ望ム

この勅語に仰せらるるごとく、日本の大陸政策、その非常手段としての武力行使は、いづれも、明治以降今日にいたるまでの一貫した東亞の平和確立、すなはち興亞政策の連續であるといふことを、われわれは、よく銘記せねばならぬのである。

その二、英米の東亞侵略

×

東洋の歴史をひもどくものが、誰でも氣づくやうに、近世の東洋史は、いはゞ西歐勢力東漸の歴史であつた。

こゝろみに、近代歐米諸國の東亞侵略の跡を素描してみよう。

十五、六世紀のころ、いちはやく、近代的殖民活動を口火を切つた國の名は、ポルトガルとスペインであつた。

ローマ法王によつて東へ！といはれたポルトガルは、一路東へ向つた。西へ！

といはれたスペインは、一路西を目指した。

東方へ向つたポルトガルのヴアスコ・ダ・ガマがアフリカの南端、希望峰を廻航して印度へ向つたのが一四九九年であつたし、西方を目指したスペインのクリストフア・コロンブスが世界球形説を實證したのが一四九二年、コロンブスの西航による東洋への航路發見は、やがて、アメリゴ・ベスプッチによるアメリカ大陸の發見となつた。そして、バスコ・ヌニエス・デ・バルボアが、パナマ地峽に上陸したのが一五一三年、マゼランが、南米大陸南端の海峽を通過して、はじめて洋々たる太平洋に出たのが、一五一九年であつた。

十五、六世紀の交、世界は、ポルトガルとスペインとの往年の二大先進國によつて、はじめての植民地的分割を經驗したのであつた。これは、いはゞ近代世界における殖民地的活動の第一期をなすものである。

かくて、その第二期は、十六世紀の後半、フランス、オランダ、イギリスの三大先進國の活動を中心として、展開された。

一五八八年スペインの無敵艦隊を撃滅したイギリスが、まづ、スペイン海洋國家に代る地歩を獲得した。イギリスの東印度會社設立は、一六〇〇年、つゞいてオランダ(一六〇二年)、フランス(一六〇四年)、デンマーク(一六一一年)の東亞侵蝕のための殖民會社も、つぎ〳〵と、設立された。

しかし、わけても、活潑な侵略活動の展開者は、イギリスであつた。スペインの無敵艦隊撃滅以來の世界に誇る强大海軍力と、世界最初の產業革命の經驗による經濟的發展とが、イギリス殖民帝國の存立を、きはめて堅固なものにしたのである。

しかも、イギリスの殖民政策は、東亞の天地において、およそ考へられるかぎ

りの猛威をふるつた。

大體、近代的西歐殖民活動の特質は、俗にいふ弱肉强食、適者生存、優勝劣敗といふことを根本の基調とし、政治經濟的方法として、帝國主義をとつたといはれるところであるが、とくに、きはだつた代表的近代的殖民活動は、ほかならぬイギリスによつて營まれたのである。

インドも、ビルマも、マレーも、そしてオーストラリヤも、目星しい東亞資源地域は、そのほとんど大部分が、十九世紀にいたるまでに、すでにイギリスの老巧な手管で料理されてゐた。

かつて世界屈指の農業國であつたインドは、イギリスの手がのびてからは、年毎に、痩せ犬のやうに衰へて行つた。農產物は思ひきり安價でそつくりさらはれ、住民は、いや應なしに、イギリスの高い商品を賣りつけられ、苦境から逃れやう

として工面にあせるものは、高利の貸金で身動きもならぬ金縛りの痛苦を嘗める外ない、といふ狀態となつた。

わが日本の二十倍もある廣大なオーストラリヤも、住民は、次第に、うち滅されて、わづかのイギリス人による獨占的支配の下に立たされた。ビルマ、マレーすべてしかり。

一八三九年の有名なアヘン戰爭によつて、支那貿易の確保に成功したイギリスは、香港、廣東と、支那の要所々々をうちかためて、徐々に東亞全域支配の野望を果たすべく、虎視のやうに耽々たるものがあつたのである。

アメリカの東亞侵略は、イギリスよりはずつと遲れてはじめられた。米使のわが浦賀に來り通商を求めたのが一八四六年、しかも、日本領土併呑の野望を遂げかねた後、一八九八年(明治三十一年)ハワイに革命を起させ、その騷ぎにつ

けこんで、これを占領し、同年さらに、スペインに戰爭をうりつけて、フイリッピン、グアムを獲得した。わが國に二十倍もする廣大な國土を有しながら、なほこれにあきたらず、太平洋を越へて東亞にまで手をのばし、豚のごとき物質繁榮を基礎づけるための殖民地獲得に狂奔してゐたのである。

× ×

大體、かういつた西歐の東亞侵略の模樣であつたのであるから、皇國日本にして、よく幕府三百年の夢をうち破らず、うやむやのうちに、萬事これら海賊的侵略國のなすがまゝに狂奔したのであつたならば、今頃は、どうなつてゐたことであらう。まことに、危い話であつた。おそらく、インドや支那と同じやうな苦汁を吸はされてゐたかもしれぬ。

神靈上に在り、皇國・皇民の自覺は、かうした魔の觸手が近づくにしたがつて、ハツキリと把握された。そして、光輝ある國體の精華、皇國本然の姿が、立派に確立されて、明治の御一新となつた。東亞侵略を逞うせんとする西歐、（とくに）英米の野望は、この皇國の完全なる再建設の前に、一應、うち拒まれた形どなつた。しかも、明治維新による皇國の毅然たる立直りによつて、もろくも當面の侵略活動をなす餘地を喪失したにも拘らず、英米その他の西歐諸國は、しかもなほ、東亞侵略の野望を捨てず、東亞における日本の立直り、興隆を喜ばず、事あるごとに、朝鮮、滿洲、支那、ロシヤなどの周邊諸國の裏面に廻つて、日本の國力消耗を企圖した。

明治維新以來の皇國は、急激なる文化的切換へに直面し、數十年も數百年ものハンデイキヤツプに苦しみつゝも、とにかく、日清戰爭、日露戰爭と戰ひぬいて

きた。表面の敵は、清國であり、露國であつても、裏面は、これらの背後に、侵略の機會を狙ふ貪慾な豺狼どもであつたことを知らねばならぬ。

しかも、皇國は、御稜威の下、淸國にも露國にも、決定的な勝利を獲得し、着々、東亞安定のための皇國のもつ指導的地位を確保することができた。一方また、西歐のあらゆる文化を輸入し、消化し、活用して、政治・經濟・教育・文化のあらゆる體制において、西歐に比肩するまでの發展ぶりを、短年月の間に、なしとげることができたのである。

× × ×

世界の大半を植民地とし、東亞の諸資源をも獨占せんとする英米西歐諸國にとつて、日本の興隆は、大きな障碍となつた。何とかしてこれをうちひしぎ、東亞

乃至世界をことごとく、自己の支配下におくのが、英米年來の野望であつたからである。

しかし、歷史は、さう英米の都合のいいやうにばかりは動くものではないとみえる。時あたかも一八七〇年（明治三年）の普佛戰爭におけるプロシヤの勝利、プロシヤによるドイツ統一の實現以來、急速に勃興し來つたドイツが、必然的に、イギリスとの衝突を免れないことになつた。

一八三〇年の產業革命以來八〇年ばかりの短年月の間に、ヨーロッパ隨一の產業國家に發展したドイツは、その國內工業の原料資源獲得のために、遲ればせながら、海外植民地の獲得を企圖せねばならなかつたのである。地球上重要な領域を、すでに、大半、イギリス・フランス・オランダなどに占められてゐたので、差當りは、その殘餘の太平洋上の諸島とアフリカ內部の諸地域のみで滿足せねば

ならなかつたが、とめどなき經濟發展のためには、こんな小範圍の殖民地で足るわけがなかつた。そこで、手をのばして、ドイツのバルカン政策、アフリカ政策が、眞劍に遂行された。しかし、結果は、先進の英・佛・露・その他との衝突以外になかつたのである。

一九一四年（大正三年）の七月、かうした揚句の果て開始された第一次歐洲大戰は、結局のところ、これら貪慾な侵略國群の間に展開された醜惡な鬪爭以上の何ものでもなかつたのである。

しかし、國際道義を貴ぶ皇國日本は、日英同盟の誼を重んじて、イギリス側に立つてこの戰爭に參加した。日本の海軍は、太平洋におけるイギリス側の絕大なる保障となり、とくに、イギリス本國と殖民地との交通連絡の確保に努力し、地中海まで出動して、その任務を全うした。

なんといふ崇高な國際道義感であらう。

しかも、大戰の結果は、もちろん、聯合國側に勝利が訪れた。皇國の參加がなかつたならば、はたしてどういふことになつてゐたかは、しれたものでない。

大戰の勝利は、イギリスとアメリカとフランスの壓倒的興隆を齎らすことになつた。その他の國は、敗北國はいふまでもなく、勝利國といへども、大した利益もうけなかつた。まことに奇怪な話であるが、事實はさうだつたのであるから、仕方がない。

第一次世界戰爭は、要するに、イギリスとドイツが世界制覇を爭つた一戰であつたのであるから、大戰後の世界は、勢ひ、イギリス、そしてアメリカの支配下に置かれさうな氣配をしめすことになつた。政治的には、英佛中心の國際聯盟の造成による世界各國の統御が行はれ、經濟的には、ユダヤ的金權主義による米英

獨占資本の形成が行はれ、そして思想的には、英米的デモクラシー思想の傳播が行はれ、いまや、自由主義的米英思想による世界秩序こそが、神の地上に命じ給ふた絶大無二の秩序であるかのごとき氣配を示した。

自己の覇望を遂げるために惹き起した大戰爭の勝利を、あたかも、自國一個の力で獲得したかのごとく、イギリスの大戰後の世界政策は、運ばれた。國內革命で、いち早く陣營から姿を消したロシアのごときは別として、國內政治の腐敗と共產主義思想の侵略のために敗れたドイツのごときは、將來二度と起ち得ない狙ひの下に、天文學的賠償金を課され殖民地を奪取されたし、戰勝國イタリヤのごときは、あたかも戰敗國のごとき扱ひで、聯合國側に參戰の際約束された英伊密約も弊履のごとく棄て去られた。そして、大戰後の世界におけるアングロサクソン跋扈の唯一最大の障碍は、東亞における皇國日本のみといふことになつた。

同盟の國際信誼を重しとしてイギリス側に參戰した日本を、イギリスとしては、要するに、大戰が勝利を以て終結するまでの御用提灯ぐらゐにしか考へてゐなかつたのである。戰爭後、西歐諸國の疲弊に乘じて、いちじるしく國力を增大しつゝあつた東亞日本の擡頭は、戰が濟んでみれば、イギリスやアメリカやフランスにとつては、ドイツ以上の新しい脅威となつたのである。

だから、大戰後のイギリス、アメリカの日本に對する仕打ちは、一から一まで日本の東亞安定勢力としての地位から、何とかして、引きずり降さう、何とかして國力を弱體化せしめようといふことでしかなかつた。

念のために、その主要なものだけあげると、四つある。

第一に、ヴェルサイユ媾和會議に、日本から提出された人種平等案は、すげなく、否決され、參戰にあたつて英佛との間にできてゐた山東の特殊權益は、ひど

い壓迫をうけた。

第二に、大正十年（一九二一年）のワシントン會議において、英・米・日の海軍勢力を五・五・三の比率と定めて强行し、太平洋における日本の海上勢力の抑壓を企てた。

第三に、翌十一年（一九二二年）の支那に關する九箇國條約で、支那の領土保全の美名のもとに、日本の東亞における地理上、歷史上、人種上もつ多くの政治經濟的特殊權益を否認し、日本を大陸から〆め出すことを企てた。

第四に、昭和五年（一九三〇年）のロンドン軍縮會議では、補助艦協定を根幹として、アメリカに對し、總計七割にちかい程度に、日本海軍力制限を强行した。

×　×　×　×

しかし、考へてみれば、英米のかうした惡どい日本壓迫も、日本自體がしつかりしてゐれば、ある程度まで、反撥し得たのであつたかもしれないのであるが、いかんせん、世界大戰後十餘年間の日本といふものは、あたかも魔がさしたかのごとく、政治・經濟・思想・文化アらゆる分野にわたつて、墮落し沈替し腐敗してゐた。政治の面では、デモクラシーの中毒で、政黨政治の腐敗がみられ、その外交部面では、英米追隨の國際協調主義が横行し、思想の面では、自由主義・個人主義の滲透に加ふるに共產主義の侵入さへ見られ、その經濟の面では、基礎產業の原料を外國に仰ぐ貿易國家の成立、英米ユダヤ金融資本への無我奉仕がみられ、その他、敎育・文化・社會の各部面に滔々として米英思想の洗禮が行はれ、そこ

に、肇國以來の皇國精神・國體の精華のごときは、日本人の腦裡から、物の考へ方から、危うく消え去りかけてゐた。

言葉をかへていへば、前にかゝげた政治外交上の日本壓迫は表面の手で、裏面には、かうした思想上、經濟上、文化上の日本弱化の手が執拗にさし伸べられてゐたとみるべきである。

東亞の中核、その安定勢力として、東亞諸國を率ゐて起つべきはづの日本は、大正から昭和の初期にかけて、かうしたアングロサクソンの毒手によつて、危うく、全身痲痺の危地に陷れられ、もはや大陸の同胞が大陸からさへ手を引いて日本にかへらねばならぬほどの逆境に追ひつめられたのである。

しかし、神國日本が、いつまでも、かうした痲痺のために、むざ〳〵米英の爪牙にかゝつて、あへない最後を遂げるはづはない。肇國二千六百年の光輝ある皇

國、日本にあたへられた天の使命が、無になつてしまうはづはない。

十有餘年の逆境期においてさへ、皇國の一部には、なほ、頑强なる英米の魔手をもつてしてもつひにいかんともなし得なかつた尊い日本的存在が儼としてみられたのである。

そして、まづ、最初の反潑が、滿洲事變となつて現はれた。昭和六年（一九三一年）九月十八日、柳條溝邊の一爆發は、つひに、東亞の一角滿洲の曠野に、革新日本の烽火となつて轟いたのである。滿洲事變は、けつして、一部支那兵との單なる衝突ではない。英米を背景とした排日侮日に狂奔する支那に對する皇國の一大鐵槌であり、いひ換へれば、東亞より英米の勢力を追ひ拂つて、眞のアジア人のアジアを、眞の大東亞を建設するための、そも〳〵の第一擊であつたのである。この點は、われわれの十分に注意すべき點であると思ふ。

要するに、日清、日露の兩戰爭によつて、現實の方向をあたへられた東亞建設は、久しき年を隔て丶、この滿洲事變により、ハッキリと日本の歷史的動向のなかに刻みこまれたのである。日本自體も隣邦支那も大東亞地域も、そのすべてが、アングロアクソンの侵略の前に危うく屈服し去らうとしたその瞬間に、神國日本の猛烈な起ち直り、反擊が行はれたのであるが、これは、別にドイツの動向をのべる際にもふれるやうに、アングロサクソンによる利益的世界秩序が、新しい道義的世界秩序に生れかはる世界の大きな歷史的轉換に第一石を投じたものとして、その意義をくみとらねばならぬのである。

ヴエルサイユ條約と國際聯盟とによつてデッチあげた得手勝手な世界秩序をそのま丶何百年何千年と維持してゆくことは、大戰後の英米佛の信條であつたのであるから、現狀維持に反するいかなる世界の動きにも、眞向から、反擊を加へるこ

とが、英米の唯一かつ重要な世界政策であつた。したがつて、日本が大陸の一角で猛烈な動きをみせたときの英米舊勢力の驚愕もさることながら、はたして、世界の與國四十何國かを誘つて日本攻擊に出たことは彼等として當然のことであつた。

そして、かゝる世界維新の第一步をふみ出した日本が、國際聯盟にいつまでも停ることのナンセンスたることも、また當然のことであつた。昭和八年（一九三三年）三月二十七日、國際聯盟脫退の詔書は煥發あらせられた。一億國民感激を新たにして、いまこそ、アングロサクソンの尻馬乘りを止めた。そして皇國獨自の國際道濶步をなすべき決意を固めたのであつた。

滿洲事變の結果、日本の一體不可分の國として、滿洲に獨立國が建設された。滿洲國の建設こそは、まことの大東亞建設の第一着手にほかならなかつたのである。

×　×　×　×　×

滿洲の一角において敗退した英米は、さらに、支那の蔣介石を使嗾して、着々對日戰備を整へさした。そして、その結果は、いや應なしに、支那事變の勃發を誘引するにいたつたのである。直接表面の相手が、支那であるから、「支那事變」といふが、間接裏面の相手からすれば、對米英事變であり、いはゞ大東亞戰爭そのものにほかならないものであつた。アメリカの飛行機を用ひ、イギリスの機關銃をもつた支那兵を相手の戰爭が、どうして單なる「支那」事變でありえやうか。

支那事變は、ついに、執拗なる背後の援助勢力のために、本尊の蔣介石は、重慶山麓の山賊的存在に隨しながらも、なほ數ヶ年の抗戰を絕叫し、日本の國力消耗を待ちつゝゲリラ戰で生きのびてゐるのであるから、所詮、支那事變の徹底的

處理方法としては、その背後の英米勢力の撃滅、その東亞よりの驅逐、つまり、大東亞戰の開始以外になかつたといふべきである。支那大陸からも、南方の諸島からも、ことごとく英米等西歐諸國の舊勢力を排除して、新しい東亞の秩序を確立し、あらゆる分野において自存自立の體制をとつて、世界平和の確立に邁進することは、どつちみち、皇國のいづれの日にか、とらねばならぬ方策であつたのである。

しかし、昭和十六年（一九四一年）十二月八日、宣戰の大詔を拜して、いよいよ大東亞戰爭に突入してみれば、わが大東亞建設戰爭の目標は、單に、米英の勢力を東亞の天地から追拂ひ大東亞諸民族を解放するばかりでは足りぬ、長らく猛威をふるつたアングロサクソン世界舊秩序を打破して、根本的に革新せられた世界新秩序を建設すること、從つて、この世界から、英米兩勢力を徹底的に粉碎し

てしまふことにあることが判つたのである。

そこに、われわれは、大東亞戰爭と大東亞建設の世界史的意義をみとめうるとともに、この現前の戰爭と建設の大業が、いかに困難な、皇國の國運を賭しての大事業であるかを知らねばならぬのである。

ときあたかも、わが滿洲事變直後より、つひにナチス政府の手によつて、見事な復興建設を完成したドイツが、まさに、わが國の大東亞建設と相呼應するかのごとく、歐洲新秩序の建設に、絕大の努力を傾注しつゝある。しかも、目標を同じうする兩國は、その共同の敵に對して、力を合せ氣を共にして、當ることができる立場に立つてゐる。

この東西二つの新努力が、舊勢力を徹底的に擊滅して、新しい世界秩序を建設するところに、われわれは第二次世界戰爭の大きな歷史的意義をみとめねばなら

ぬのである。

いひかへれば、大東亞戰爭は、日本的にいふと、明治維新このかたつゞけられてきた興亞政策の總決算をなすべき一戰であり、ひいて世界的にいふと、ドイツの新歐洲建設と相まつて、新しい世界秩序を生みだすべき一戰でもある。

この一戰が、日本としても、世界としても、どうしても戰はれねばならなかつた一戰であることは、上にのべたやうに日本自體の歷史、世界のもつ歷史の上からして、明かなことであるのである。

×

日本において、總力戰體制、國防國家體制といふことが、世間に力づよく提唱されはじめたのは、滿洲事變二、三年の後のことであつたやうに思ふ。

むろん、事變の勃發といふことが、世界革新の烽火、昭和維新の口火であるといふ認識は、國内一部のものにはよく判つてゐたことであつたかもしれないが、なに分にも、政界、財界、經濟界、學界、新聞、民間各方面、いづれも思想混沌として、これぞといふ叡智もなく、能力もなく、たゞ、一部の國民が日本本然の

國體を求め、現實の腐敗を悲しむのみであつたのである。

そのうち、滿洲事變の處理に直接の責任をもちかつこれを深く自覺した軍部がらで、漸く、指導的方向づけが行はれだし、昭和九年(一九三四年)すなはちドイツでは、ヒトラー政府成立の翌年の秋、陸軍省新聞班の手によつて、「國防の本義とその强化の提唱」といふことが勇敢に提唱され、惰眠をむさぼつてゐた日本各界に大きな衝動をあたへた。それは、あたかも、嵐の夜舵を失つて彷徨する船舶に行くべき方向を指示するといふ歷史的重要性をもつたものであつたが、何分にも、自らの理性を失ひ、健全な自己判斷の能力を欠いてゐた當時の政界・學界・經濟界その他から、猛烈な反撃をうけ、軍部も、よくこれに耐へて、なほも、眞摯な研究をおこたらず、着々、皇國政治への指導力の培養に努めたのである。

この「國防の本義とその强化の提唱」といふのは、形はさゝやかなパンフレッ

トであつたが、内容は、單なる市井の研究論文などにみられない迫力・情熱・確信・指導性・理想に充ちた歴史的な一大文献として、わが國の國防國家發展史上、絕對の價値をもつものであると思ふ。

このパンフレットは、國防の本義をば國家生成發展の基本的活用の作用であるとなして、國防國家の觀念を定立し、その觀點から、當時の國防政策や、經濟政策・社會政策にいたるまで、その欠陷と對策とを展開し、「たゝかひは創造の父、文化の母」といふ有名な文句を提唱したのであるが、まことに、ドイツのルーデンドルフ將軍の「全體戰爭論」や、さては、ナチス黨のフエーダー綱領などにも匹敵(ひってき)し、むしろ、その雄大なる建設的・實際的構想において、それら以上のものであるとの評價さへあたへられた。このことは、日本の國防國家建設をかんがへるにあたつて、われわれの是非銘記しておかねばならぬ一事だらうと思ふ。

この國防國家の提唱以來、歴代の内閣の施政施策の指導原理も、おほむねこゝに置かれたのであるが、なにぶんにも長い年月、英米流の自由主義・個人主義國家として成長してきた國として、とくに、政治の自由主義、經濟の個人主義は、事毎に猛烈な現狀維持の反撥を試み、きはめて、ジグザグな歩みをしてきた。しかし、大東亞戰爭に入るまでに、一應の綱領が國民の前に提示され、すこしづゝでも實施に移されるにいたつてゐたことは、われわれの大きな喜びであり、强みであつたといはねばならぬ。

それは、第二次近衞内閣が、昭和十五年（一九四〇年）八月一日に發表した基本國策要綱とこの要綱にもとづいて、その後着々設定した各種政策確立の要綱である。これこそは、日本が、支那事變以來三年、滿洲事變以來九年を經て、はじめて、世界に誇示しうる日本的國防國家體制、日本的總力戰體制の建設綱領を設定

したものとして、はなはだ意義深いものであり、けつして、一近衞內閣の設定せる政策要綱たるにとどまることなく、爾後の日本の步むべき國防國家體制への道を闡明したものと考ふべきである。

もつとも、この國防國家建設要綱は、大東亞戰爭一、二年前の設定にかゝり、その全部の實施遂行をみぬうちに、國防國家の地域的範圍が、確定的に、大東亞諸地域に擴大された。そして、大東亞「戰爭」を遂行しつゝ、大東亞國防國家の「建設」を遂行せねばならぬことになり、さきの基本國策要綱は、あらたに、大東亞建設要綱と相補完して、もつて、今後の大東亞日本、世界日本の「戰爭と建設」の基準となり、指導方針となることになつてゐるわけである。

われわれは、まづ、基本國策要綱を大略眺めて、皇國の國防國家建設體制をあきらかにし、つぎに、大東亞建設審議會の答申になる各種政策要綱を眺めて、

日本の大東亞國防國家建設の體制をあきらかにしたいと思ふ。

×　　×

支那事變後三ヶ年を經た昭和十五年（一九四〇年）八月一日、前言のごとく、時の近衞内閣は、「基本國策要綱」なる日本國防國家建設の基本綱領を閣議で決定し、發表した。

要するに、世界史的一大轉換期に際し、同じ世界史的目標の下に努力しつゝある盟邦ドイツ及イタリヤとの協力をいよ〳〵緊密にしつゝ、支那事變まで戰ひぬき、すゝんで世界の新秩序創造を積極的に指導するためには、日本みづからが強靱にして進歩的な高度國防國家を建設しなければならぬ、といふつよい國家的要請にもとづいて、わが國はじめての國防國家建設の指針を公權的にきめた

國防國家とはなにか、日本のそれは、いかなる精神いかなる内容をもつべきものか、といふことについて、ハツキリした指針をあたへたもので、その指針は、大東亞戰爭下の大東亞建設についても、おほむね格別の變更を要しない原則である。

書いてあることは、きはめてむづかしい表現をして居るのであるが、國防國家とはなにか、日本のそれは、いかなる精神いかなる内容をもつべきものか、といふことについて、

ものであつた。

世界は、いまや歴史的一大轉機に際會し、數個の國家群の生成發展を基調とする新なる政治經濟文化の創成を見んとし、皇國亦有史以來の大試練に直面す。この秋に當り、眞に肇國の大精神に基く皇國の國是を完遂せんとせば、右世界史的發展の必然的動向を把握して、庶政百般に亘り、速に基本的刷新を加へ、萬難を排して、國防國家體制の完成に邁進することを以て刻下喫緊の要務とす――といふ書き出しで、「根本方針」と「國防及外交」と「國内態勢の刷新」とを展示し

たのである。

×　×　×

日本國防國家の根本方針としてかゝげられたことは、「皇國の國是は、八紘を一宇とする肇國の大精神に基き、世界平和の確立を招來することを以て根本とし、まづ皇國を核心とし、日滿支の强固なる結合を根幹とする大東亞の新秩序を建設するに在り」といふことであつて、「之が爲皇國自ら速に新事態に即應する不抜の國家態勢を確立し、國家の總力を擧げて右國是の具現に邁進す」るといふことであつた。

このわづか數行の根本方針によつてもわかるやうに、およそ國防國家體制の根本といふものは、わが皇國の肇國當時の眞の姿に目覺めさへすれば、日本の脚下

に横つてゐるのである。燈臺下暗しの譬へのやうに、遠くナチスの空にばかり氣をうばはれてるが、よく注意して照せば、無限の光りを發する皇國の三千年の姿こそ、その精神において、まことの國防國家なることをしるのである。

たとへば、國防國家たるの要諦は、第一に、全體的國防國家觀の確立といふことがいはれ、第二に、政治の經濟に對する優位といふことがいはれ、第三に、統帥と國防との完全協調といふことがいはれてゐるのであるけれども、これら三つは、いづれも、その理念としての日本的世界觀の上から考へれば、まさに日本こそ、世界にも稀な模範的な「國防國家」であるはづなのである。たゞ、近世開國以來の政治情勢が、しばし自由主義・個人主義の洗禮による國勢伸張を已む得ぬことゝしてやつてきてる間に、この肇國以來の偉大なるべき國體が見失はれかけ、近代的國防國家體制の整備において、やゝ後れかけてゐた事實は、爭はれないの

である。支那事變までに五年も經過した昭和十五年（一九四〇年）夏ごろになつて、ともかくも、國防國家建設といふことが、當面の最緊急課題としてとりあげられたのは、支那の背後の英米等自由主義陣營を敵とする戰ひを意識するとき、現實の日本の國家體制は、總力戰を遂行する國家として、あまりにも整備されてゐなかつたからである。いまやその背後の敵を正面の敵とする大東亞戰爭に入るにいたつて、まだ〳〵つよく、ふかく、ひろく、うちたてねばならぬ不敗の態勢が要望されるのである。

× × × ×

かうした根本方針をもつて、日本國防國家の國防および外交はどうあるべきかといふに、「内外の新情勢に鑑み、國家總力發揮の國防國家體制を基底とし、國

是遂行に遺憾なき軍備を充實する」ことが、その國防原則である。軍備が、國防國家確立のための最大かつ絕對の根本條件であることは、說明するまでもない、當然のことである。總力戰といふ言葉にごまかされて、軍備を他の諸要素と並列視すべきでない。「フランス敗れたり」の著者アンドレ・モーロアが、端的にいつてゐる――戰爭は、フランスに關するかぎり、開戰と同時に敗戰であつたといふことができる。何故に、フランスは敗れたか、といふに、十分なる飛行機、十分なる戰車、十分なる高射砲をもつてゐなかつたからである。またさうした不足を補ふべき十分なる工場をもつてゐなかつたからである。さらに、また、英佛は、陸軍が貧弱であり、かつ巨大なる人的並びに物的資源を急速に活用すべき何らの機構をもつてゐなかつたからである。」――まことに、思想も、經濟も、文化も、あらゆるものが强靱であることは、總力戰に對處すべき國防國家の要素でなけれ

ばならないのであるが、軍備の强靱がなかつたならば、結局、なんにもならぬのである。軍備の遺憾なき充實こそは、國防國家の第一の絕對要件である。

日本國防國家の外交は「大東亞の新秩序建設を根幹とし、まづその重心を支那事變の完遂に置き、國際的大變局を達觀し、建設的にして、かつ彈力性に富む施策を講じ、もつて國運の進展を期する」ことにあると斷ぜられた。いまや、大東亞戰開始とともに、ドイツ及びイタリヤとの同盟ますますかたく、この國防國家外交によつて、相ともに世界秩序建設に乘出しつゝある。

かうした國防と外交を整へるための國內態勢の刷新こそは、日本國防國家建設の重要なプログラムである。內政の急務は、國體の本義にもとづき、庶政を一新し、國防國家體制の基礎を確立するにあり、として、もろもろの要件の實現が要請された。

第一は、道義的要件として、わが國體の本義に透徹する教學の刷新と相まつて、己れひとりの利益に汲々たる自我巧利の思想を排斥し、國家奉仕を第一義とする國民道德を確立することが要請された。かやうな革新的な國家觀、世界觀、人世觀を基調とするのでなければ、國防國家はナンセンスである。國防國家は、立派な道義國家として立つところに、無限の力を發揮できるものである。

第二に、政治的要件として、强力なる新政治體制を確立し、國政の綜合統一を圖ることが要請された。國防國家における政治は、その力もつとも大である。國防國家においては、戰爭でさへもが、政治そのものと考へられる。强い政治力、これは、國防國家體制の核心でもある。そのために、まづ、官民協力一致各々その職域職分に應じて國家に奉公すること、すなはち「臣道實踐」といふことを基調とする新國民組織を確立することがあげられ、この歷史的任務を擔ふものとして、

大政翼賛會が設立されてゐるわけである。つぎに、新政治體制に即應し得るやうな議會翼賛體制を確立することがあげられ、さらに、行政の運用に根本的刷新を加へ、その統一と敏活とを目標とした官界新態勢を確立することがあげられた。これらは、いづれも、困難な問題であるが、時局の進展とともに、少しづゝではあるが、實現をみつゝある。たとへば、もろ〳〵の政黨は、すでに自發的に解消して、翼賛議會態勢の完成に一致協力してきてゐるし、官界新態勢も官廳事務再編成とか行政簡素化とかの形で、具體化されつゝある。大東亞戰爭への突入をみたる以上、もつとテンポを早めて、實現しなければならぬ問題がまだ〳〵澤山あるはづである。

第三は、經濟的要件として、皇國を中心とする日滿支三國經濟の自主的建設を基調とする國家經濟の根基を確立することが要請された。大東亞戰爭と大東亞建

設の新情勢は、日滿支の外に、南方經濟圈をもふくめた雄大な構成をもつた大東亞自主的國防經濟の確立といふ課題を提起したわけである。この大東亞國防經濟の確立のためには、皇國みづからが、官民協力による皇道經濟の遂行、とくに主要物資の生産・配給・消費を貫く一元的統制機構を整備し、これを基軸として、綜合經濟力の發展を目標とする財政計畫や金融統制やの確立强化をはかり、世界新情勢に對應する貿易政策の轉換につとめねばならぬ。これとともに、國民生活必需物資、とくに主要食糧の自給方策の確立、重要産業、とくに重工業・化學工業・機械工業などの劃期的發展、科學の劃期的振興ならびに生産の合理化、内外の新情勢に對應する交通運輸施設の整備擴充などに努力せねばならぬ。かくてこそ、綜合國力の發展を目標とする國土開發計畫の確立、日滿支を一環とし大東亞を包容する協同經濟圈の確立といふことも、着々と具體化されることになるので

ある。

第四は、人口政策的要件として、强力なる國防經濟の根基を確立し、國防そのものの量的および質的强化を目標として、國是遂行の原動力たる國民の資質・體力の向上、ならびに人口增加に關する恒久方策、とくに農業および農家の安定・發展に關する根本方策を樹立することが、要請された。

第五は、社會政策的條件として、國策の遂行にともなふ國民犧牲の不均衡の是正を斷行し、厚生的諸施策の徹底を期するとともに、國民生活を刷新し、眞に忍苦十年、時艱克服に適應する質實剛建な國民生活の水準を確保することが要請された。

× × × × ×

右にのべたことが、日本の國國防家建設の綱領のあらましのところである。か

うした根本國策の總論にもとづいて、その他のもろ〱の各論、經濟新體制確立要綱も、財政金融基本方策要綱も、日滿支經濟建設要綱も、國土計畫設定要綱も、科學技術新體制確立要綱も、勤勞新體制確立要綱も、人口政策確立要綱も、戰時貿易對策も、交通政策要綱も、ほとんど全部の具體的方策が大體決定されてゐた。大東亞戰爭にいたるまでに、日本の國防國家建設の根本方針が、かうして、あらまし、決定されてゐたことだけでも、われわれとしては、大に意をつよくするに足るともいへるであらう。

いはんや、たとへば、新政治體制としての大政翼賛會の組織や、經濟新體制確立要綱にもとづく重要産業統制會の組織や、勤勞新體制確立要綱にもとづく大日本産業報國會の組織や、科學技術新體制確立要綱にもとづく技術院の設置などのごとく、あげれば、數多くの發足活動が、あらゆる分野に、あらゆる姿で活潑に行

はれつゝあることは、はなはだ心强いものがあるのであるが、諸般の情勢をみるとき、組織ができただけで、魂の入つてゐないものもすくなくない。「戰爭と建設」を完遂しようといふのには、その組織そのものが活き〳〵と動かねばだめである。組織は、要するに手段である。統制會の組織は、生産增强のための手段にすぎないし、技術院の設置は、科學技術の劃期的の躍進のための手段にすぎないし、大政翼賛會の組織は、國民各自の職域における臣道實踐によつて國政の圓滑なる遂行を確保するための手段にすぎない。われわれの脚下には、まだ〳〵解決せねばならぬ多くの國防國家的要請が、ころがつてゐるはづである。

總力戰は、いままさに、目の前に行はれつゝある。われわれは、この總力戰を遂行しつゝ、大東亞國防國家の建設を遂行しつゝあるのであるから、まことに、世界史上、いままでかつてない大事業にとりかゝつてゐるわけである。

大東亞建設の綱領

×

大東亞の建設方針は、大東亞戰爭がはじまると、いちはやく、さだめられた。

大東亞建設方策を確立するために、昭和十七年（一九四二年）の二月、はやくも、大東亞建設審議會といふ官民協力の國策審議機關が政府內に設けられた。そして、日本の大東亞建設計畫に對する雄大な構想が練られたのである。

大東亞建設審議會といふのは、內閣總理大臣を總裁とし、企畫院總裁を幹事長として、委員に、民間各方面の權威者三十名を網羅し、その後五十名に增員し、

「世界的變革に處する帝國百年の長計の確立およびこれと密接不可分なる大東亞共榮圏建設に關する重要事項の調査審議」にあたることになつた、稀にみる大がかりな審議機關である。本年二月はじめに設置すると、間髪をいれず、月末には、第一回總會を開いて、スタートした、內閣總理大臣からは四つの諮問――大東亞建設に關する基礎要件はどうか、文教政策はどうか、人口政策はどうか、そして、經濟建設の基本方策はどうか、といふ四つの大問題が諮問され、審議會から、それ〴〵の答申が行はれた。そして、引きつゞき、さらに、經濟建設基本方策にもとづいた鑛工業電力建設方策と農林水畜產業方策と金融財政交易基本方策と交通基本方策の四つの問題も、追加諮問され、これに對しても、それ〴〵の答申がなされ、結局、これら八つの答申の中に、日本の今後すゝむべき大東亞建設への途は、まづ日本官民の總智慧をしぼつて結論づけられてゐるものとみることができ

るのである。

ことに、これらの答申案をつくるときは、審議會の中に、第一部會から第八部會まで、問題毎に部會が構成され、部會長には、それ〳〵所管の大臣が指命されて、官民一糸みだれぬ審議方法をとつたことは、はなはだ當を得た進み方で、喜ぶべきことでなければならぬ。これらの答申案は、大部分、單に一審議機關の答申たるにとゞまり、政府の國策としては確立されるにいたつてゐないけれども、その審議方針、審議機關の構成からみて、今後の大東亞建設國策の一大基準であり、指針となることは、疑ひないばかりでなく、かうした國策を中心にして、政府部内はもちろん、官民ともに、心を一にし、考へを一にして、頭を練つたといふことと、そのことだけで、すぐに、大きな政治的意義があるといふものである。

大東亞建設審議會の答申を通じて、大東亞建設の構想をうかがうと、二大別して、一般方策と經濟方策とに分けることができる。

× ×

一般方策は、建設基礎要件と文教政策と人口政策の三つであり、經濟方策は、その他の、經濟建設基本方策と鑛工業電力建設方策と農林水畜產業方策と金融財政交易基本方策と交通基本方策との五つである。

まづ、大東亞建設の基礎要件としては、「大東亞建設の基本理念は、わが國體の本義に則り、八紘爲宇の大義を、あまねく大東亞に顯現するに在り、これがため、各國および各住民をして、その分に應じ、各々その所を得せしめ、道義に立脚する新秩序を確立するをもつて要となす」といふことが明示されたのである。

わづかこの數行の言葉であるが、その意味するところは、深くかつ大である。

大東亞新秩序の建設の端緒は、一言にしてつくせば、眞に大東亞的なるものの發見であり、眞に日本的なるものの展開であるといふことができる。そして、この發見し展開せるものを維持育成し、確立することでなければならぬ。米英蘭の搾取地帶たる舊秩序の中から、大東亞人の大東亞、アジア人のアジアといふ新秩序を建設するためには、かれらの舊統治體制を完全に拭ひ去り、これに代るべき建設の基本理念をしみこませ、米英の壓迫から解放された原住民の自覺を基調とした新秩序が確立するのでなければならぬ。

中心基調となるものは、いふまでもなく、八紘爲宇のわが肇國の精神である。肇國の大精神たる八紘をもつて宇と爲す本義を、大東亞全域に顯現することが、道義にもとづく大東亞運命共同體建設の礎石にほかならないのである。

しかも、大東亞建設は、ひとりわが皇國のみの責任といふべきではない。大東亞全域の原住民もまた、皇國を中核體とし、指導標として、それぞれの分に應じ、力に應じてこの大業にいそしまねばならぬ立場に立つ。だから、日本の大東亞建設といふことも、前に一言したやうに、それが、大東亞各地住民の共同目的たる事實を、各住民の自覺にもとづく信念として、確立せしめ、その共同目的達成のため、つよくしてかたい民族協力態勢を完成し、ともに苦しみ、ともに樂しむ精神のもとに大東亞各地各住民が、その總力を集中し、共同戰線たる建設工作によろこんで積極的に參加してくるやう、一切の施策を實行するのでなければならない。

それがためには、大東亞民族啓蒙運動といふことが强力に推進される必要もあるであらう。

だが、われわれのとくに注意せねばならないのは、大東亞總力戰態勢の確立と

いふことである。大東亞新秩序の建設が、成功するも失敗するも、一に係つて、大東亞總力戰勢態の確立、大東亞國防態勢の確立といふことにある。

大東亞建設は、同時に、大東亞戰爭であることを忘るべきでない。

大東亞全域の人的要素と物的要素を綜合的集中的に動員活用し、その總力を發揮せしめることは、大東亞戰爭遂行力を增强する最大の方途である。戰力の强化以外に戰爭に、勝つ方法はない。戰爭に勝つ以外に、建設を遂げる方法はないのである。

× × ×

大東亞建設に關する文敎政策も人口政策も、要は、かうした大東亞建設の基本理念につゞくものでなければならぬ。

大東亞建設審議會の答申した文教政策は、その構想において二つの面をもつ。一面は、皇國民みづからに對する文教政策であり、一面は、大東亞各地各民族に對する文教政策である。

長年月の間、英米思想の文教政策によつて發展してきた日本が、この舊態勢から脱却して、みづからの能力とみづからの思惟とによつて、大東亞全體の甦生、建て直しにとりかゝつたのであるから、皇國民みづからの文教的再錬成は、絶對の要件であり、これなくしては、到底、大東亞の指導的地位に立ち得ないはづである。

だから、大東亞建設に關する文教政策の要點は、皇國民に對し、大東亞建設の道義的使命を體得せしめ、大東亞における指導的國民たるの資質を錬成するとともに、これに應じて、大東亞各地各民族に對し、かれらをして、各々その分に應

じ、その所を得しむるを本旨とし、それ〴〵の姿に即した教育・言語・宗教・文化の方策を確立するといふことにもとめられたのである。

具體的にいへば、わが國民の一人一人に、大東亞建設の國家的・歷史的必然性を自覺せしめ、大東亞の中心指導國民たるの資質を體得せしめることを中心目的とし、これがために、文武一如の精神を基とし、剛健高邁なる精神力を昂揚し、歷史教育の刷新、日本諸學に基礎を置く大學制度の再確立を圖り、大東亞的人材の育成に全力を集中する、といふのである。

この方針で、たとへば、國家計畫にもとづいた教育の運營、修業年限の短縮、文軍教育の統一、私立學校制度の改革、學校教育偏重の是正などから、當面の施策として、南方派遣要員に對する特別の錬成方策など、いろ〳〵の革新教育的な文教政策がまじめにとりあげられることになつてゐるのである。

さらに、大東亞建設に關する人口政策いかん、といふ政府の諮問に對する審議會の答申の內容が、例の基本國策要綱にもとづく人口政策確立要綱の趣旨を、さらに一歩前進したものとなつたことは、當然のことでなければならぬ。

その根本本針は、要するに、大東亞戰爭をあくまで遂行し、大東亞建設を完全に遂行すべき重大任務をもつわが皇國民を、量的に增加せしめるのみでなく質的にも向上せしめることを第一義とし、さらに、南方進出者の配置計畫やその資質の向上をはかり、また、大東亞全體の人口增强ねらふことにある。

わが皇國民の人口增强がなんといつても、大東亞建設の基軸でなければならないわけであるが、このためには、すでに政府として決定して、國民に發表濟みの、人口政策確立要綱の中にかゝげてある諸方策を、一段と强力に、實施しさへすればよいわけである。

大東亞の新天地を背負ふて立つ皇國民の量質兩面の增强向上は、絕對の要請なわけであるが、とくに、具體策として考へられてゐるのは、

農村人口として總人口の四割だけを確實に保有すること。

大都市への人口集中を防止し、むしろ積極的に疎開するやうにすること。

勤勞態勢を刷新し、とくに勞務者の保健施設を改善すること。

結婚と出生を大々的に奬勵すること。

生活必需物資の生產配給を改善すること。

結核の豫防・撲滅を本格的に實施すること。

母性および乳幼兒の保護を强化すること。

大體、かうした具體策がとりあげられたのであるが、これらは、すでに着々實施に移されつゝあることは、われわれのよく知る通りである。

大體、大東亞共榮圈は、人口的にみると、大雜把な數字であるが、

支那	四億人
印度	三億人
日本	一億人
滿洲	四二〇〇萬人
佛印	二三〇〇萬人
ビルマ	一五〇〇萬人
泰	一四〇〇萬人
フイリッピン	一三〇〇萬人
マレー	四〇〇萬人

といつた順序で、總計九億餘に上るのであるが、一億の日本人が、他の八億の大

東亞民族をリードしようといふのであるから、まことに、われわれとしては、責任の重大なことを思ふと同時に、やはり、量的に人口を增すことと質的に民族性を向上せしめることによつて、人口的にも、これら八億に對する大きな威力とならねばいかぬといふことになる。

ことに、數的には、わが大和民族に四倍もあり、質的にもわが民族に次ぐ優秀民族たるところの支那民族の存在が、大東亞建設上永久に大きな問題としてのことを考へるときは、われわれとしても、ますます、大きな覺悟が要るわけである。

× × × ×

さて、最後に、大東亞經濟建設基本方策であるが、これは、ある意味で、大東

亞建設の最大課題であるといはねばならぬ。なぜなら、大東亞戰爭の直接の動因は、米英兩國がわが大東亞における皇國の發展を阻止し、とくに、經濟的壓迫を加へんとしたところにあつたからである。

日本が大東亞戰爭を遂行しつゝとくに南方經濟力を完全に把捉し吸收し消化して、大東亞國防經濟態勢を確立してしまふことが、大東亞戰爭に最後の勝利を得る所以であるのは、このためである。

大東亞戰爭は、大東亞建設のために遂行されつゝあるのであるが、大東亞建設は、この大東亞戰爭を勝利にみちびく唯一の途であるところに、わが皇國の當面する「戰爭と建設」の難關があるのであり、容易に突破しがたき難關であるだけ、これをわれわれの總力をあげて何年何十年の年月がかゝり、孫子の代までかゝるやうなことが豫測されやうと屁古垂れずあくまで突破することは、八紘爲宇の天

業をわれわれみづからの手によつて翼贊し奉ることになるのであつて、おもふだに、血湧き肉躍る心ひきしまることであるといはざるを得ぬ。

すなはち、大東亞經濟建設の目標は、大東亞建設の根本理念を、そのまゝ經濟面にしみこませ、八紘爲宇の大義を大東亞各地域に顯現し、道義にもとづく大東亞の經濟新秩序を確立し併せて新世界經濟の建設に積極的に貢献するにあるのである。

だから、この大目標を達成するためには、なんといつても、大東亞の綜合經濟力を發揮し、大東亞防衞に必要なる自主的國防經濟を完成することが、絶對に必要となる。そして、この「絶對の必要」を可能ならしめ、大東亞の綜合經濟力を完全に發揮せしめるためには、さきにのべた文教政策や人口政策とおなじやうに、中心責任者たる皇國みづからが、いつまでも、ユダヤ式利潤追求主義、自由主義

の經濟觀念で物をいぢつてゐるやうなことでは、絕對にいかぬ。國體觀念を明徵にし、積極剛健なる民族意志を昂揚し、直接開發に必要なる科學技術水準の劃期的向上をはからねばならぬ。しかも、皇國の指導下に立ち上つた大東亞各地各住民をして、大東亞新秩序の建設の成る成らないが、直接、自己の運命に大きな影響をあたへる大事實を自覺せしめ、この共同目的達成のために、ともに苦しみともに樂しむ心構へをもち、積極的にわが皇國の指導に協力挺身するやうにせねばならぬことが、とくに、經濟の上において、絕對に必要であることをよく〳〵認識させねばならないのである。

大東亞經濟建設のためには、その具體策として、農業や林業や水產や畜產をどうするか、鑛業や工業や電力やをどうもつてゆくか、大東亞の交通はどうか、そして、金融や財政や交易やをいかやうにとりあつかふかゞ、大きな問題と

なるわけであるが、その根本基調としては、まづ、右にのべたことで盡きるのである。

× × × × ×

皇國百年の長計としての大東亞經濟建設方策を考へるにあたつて、われわれは、現實に大東亞戰爭を遂行しつゝあるといふ當面の時局に照らして、こゝに南方經濟建設をどう考へねばならぬかといふ緊急焦眉の課題に思ひ至るのである。

南方の資源は、端的にいへば、大東亞戰爭の一面を資源作戰にもつていつた重大な契機となつてゐる。この南方資源、この南方經濟をいかに把握すべきか、といふことが、大東亞戰爭の完遂に、もつとも重要な關係をもつのである。

南方經濟をどうするか、の前には南方統治をどうするか、の問題がある。

これについては、第七十九帝國議會（昭和十七年一月二十一日）における東條首相の施政方針演説のなかで、いちはやく明かにされた方針がある。記憶されてゐる人もあらう。

香港と、マレーとは、帝國の大東亞防衛の據點として、直接統治下に置く。

フイリッピンは、大東亞建設に協力するならば、獨立の榮譽をあたへる。

ビルマは、ビルマ人のビルマ建設に協力する。

インドは、インド人のインド建設に協力する。

蘭印は、インドネシア民族をオランダの壓制より解放し、同地域をインドネシア民族安住の地とする。

濠洲・ニュージーランドは、帝國に對し抗戰を繼續するならば、これを擊碎し、住民協力し來るならば、その福祉と發展に協力する。

大體、かういつた方針であつた。

南方統治の方針は、その後、この大原則にしたがつて、着々進捗しつゝある。フイリッピンもビルマも、漸次、大東亞建設の一翼をになふにふさはしい姿を整へてきたやうである。

インドと濠洲およびニユージーランドだけは、いまだ、海のものとも山のものとも判然しないが、大勢は、すでに、その方向を決してゐるのである。

南方統治の方式として、皇國は、占領地域に軍政を施行し、廣大なる新國土における施政の統一保持につとめつゝある。軍の强力なる力で、「戰爭と建設」が推進されつゝあるわけである。

南方占領地の軍政は、地域的に陸海で分擔し、現地には、それぞれの軍司令官の監督以外に、格別の統督機關も置いてないが、「軍」政とはいへ、むろん、行

政の主體には、各省または民間から簡拔された優秀なる文官が、司政官として活躍するのである。かうした地方現地の軍政は、中央で統括する問題もあれば、地方かぎりで、現地軍間で協定してきめる問題もあり得るわけである。南方經營の基本事項は、いふまでもなく、中央において、民意をも徵した上で、きめるのであつて、この十一月一日から新設された大東亞省がさうした重要な役割にあたるのであるが、軍官民の連絡事項は、ます〱多くなるわけである。

さて、南方占領地の統治上の基本方針としては、當局の示したつぎの十大原則がはつきりしてゐる。

1、現地の事情に即するやうに行政を行ふこと

2、つとめて現地人を利用し日本人は樞要な地位にのみとゞまること

3、原住民の宗敎を尊重すること

4、原住民に對しては恩威併用、いやしくも小乘的愛撫に隨しないやうにすること
5、敵國人に對しては、假借なき態度でのぞむこと
6、樞軸國人に對しては友好的態度でのぞむこと
7、華僑は十分に利用すること
8、現地住民に對しても相當の負擔を負はせること
9、進出邦人を嚴選、國策に反する行動をさせないこと
10、現地住民に對し、日本語の普及につとめること

以上は、昭和十七年（一九四二年）四月十一日陸軍省軍務局加藤中佐談として發表された「南方建設の大構想」のなかに示されたものであるが、その大部分はいはゞ常識的な原則で、今後とも、かうした心構へは、保持されねばならないと

ところであらう。

× × × × × ×

南方資源政策といふものを、「戰爭と建設」といふ觀點から考へることは、われわれのとくに心すべきことである。

大東亞資源政策の重要な一環としてみた南方資源も、現實には、戰爭しつゝ開發し、開發しつゝ戰爭せねばならぬ姿なのであるから、これを平時的な頭で考へたら大間違ひである。

南方資源に對する根本施策方針として、當局のまづ明示したのは、

第一、資源の確保、とくに戰爭遂行上絕對必要なる資源を積極的に確保することで、大東亞戰爭の資源作戰的一面である。たとへば、石油・ゴム・銅・錫・

鉛・亞鉛・クローム・マンガン・ボーキ・サイド・ニッケル鑛・鐵鑛石・麻・キナなど、これである。

第二は、南方資源の敵側への流出阻止で、これは、戰爭前の敵側が、南方資源に對しては、わが國と同樣の依存關係にあつた事實に即應し、敵側を資源的に封鎖、壓迫しやうといふのである。これは、大東亞戰爭の重要な一性格といふべきで、かつて、日本を經濟的に壓服しようとかゝつた米英は、逆に、日本によつて經濟的壓服されるかどうかといふ重要な點である。

第三は、作戰軍の現地自活の確保といふことで、遠い海洋に散在する多數の島嶼に據る現地軍が、さらでだに逼迫するところの船舶によつて運ばれる物資に期待しなくなるだけでも、一つの大きな利點となるわけである。

第四に、現在存立する現地の企業をわが方に對して協力するやう誘導すること

で、これに成功するかどうかは、南方經濟建設の成否に關係する。ことに、「南方に支那あり」といはれる華僑の企業をうまく活用するだけでも、大きなプラスである。

大體、かうした四つの基本方針がとられたのであるが、南方資源の開發にあたつては、これもあれもの慾得式開發によらず、「戰爭と建設」の根本方針に則つた順位をさだめ、第一に、戰爭遂行に直接必要なる重工業資源、たとへば、石油・鐵・銅・錫などが、眞先に開發さるべく、ついで、わが國の需要に應じ漸進的に開發さるべきである、とされてゐるのである。

こゝで、とくに重要なのは、南方に存する過剩資源をどうするか、といふことである。これを一トン一リットルといへども、敵側に流出させぬやうにすることは、前言のやうに重要なこととして、さて、わが國の立場から、大東亞全體とし

て、これを、どういふ形で處理するか、といふ問題がある。

たとへば、砂糖・ゴム・錫・米などの過剩物資の處理については、さしあたり、つぎのやうな途が考へられ、あるものは、すでに、着々、實行されてゐるもののやうである。

1、貯藏して、有事に備へることは、なんといつても重要なことで、ストックのきくゴムとか錫とかについて考へられねばならぬ。

2、船腹次第で、他の大東亞地域たとへば滿洲支那方面に廻すことは、ある程度まで、砂糖などについて考へられる。

3、同じやうに、盟邦ドイツ・イタリヤに廻してやれる物資も考へられる。

4、用途の轉換で、たとへば、科學技術の動員によつて、砂糖のアルコール化、ゴムの高級潤潤油化、マニラ麻のインド産ジュート代用、コプラの燃料化な

ど澤山ある。砂糖のアルコール化などが本格化すれば、現在日本で行はれてゐる馬鈴薯・甘藷のアルコール化の代用ともなり、馬鈴薯・甘藷をそれだけ餘計食糧に廻すことができることになる。

5、砂糖などについて、作付轉換といふことが考へられる。砂糖畠を棉花畠に轉換するなどである。これは、むろん、從來砂糖畠に、土着生活してゐた原住民の生活産業に影響する大問題であることなどについて、愼重な取扱は要いるであらう。

大東亞全體にまたがる産業立地の計畫については、大東亞建設審議會の前途の答申案においても、ある程度考へられ、また、基本國策要綱にもとづく日滿支經濟建設要綱においても、考へられたことであるが、大東亞建設の産業立地的狙ひとしては、大體、そんなところで盡きてゐるのではないかと思はれる。滿洲國に

ついては、鑛業および電力事業の劃期的振興、これを基礎とした適地の重工業および化學工業が考へられ、支那では、鑛業および鹽業の振興が重點で、棉花その他の特產物が重視される。南方に資源が豐富だからといつて、製鐵業・アルミ工業などの重要產業を南方諸域に起させることはいろ〳〵問題があるであらうが、さればといつて日本を第二の英帝國として、「世界の工場」化することも皇國百年の大計としては、考へものであらう。

なほ、こゝでとくに注意せねばならぬことは、從來、資源的考慮にもとづいて重視された國內の人造工業、たとへば人造石油、人造ゴムなど、アルミナ工業、貧鑛處理などの立場である。これらは、一寸考へると、南方資源の日本歸屬で、もう力をいれなくともいいやうに考へられさうであるが、なか〳〵さうはいかない。南方鑛物資源の確保が現實化するのには、「戰爭と建設」の今日、なほまだ

〳〵先のことであること、海上輸送といふことが大きな問題であること、供給は増大したかもしれぬが、需要もまた、戰域擴大で大いに增大したこと、人造物には、性能上天然物より優秀なものがあること（たとへば、人造揮發油は航空機油として、天然揮發油以上である、人造ゴムも同様）などの理由があるからである。

なほ、その外、大東亞建設、南方建設には、具體的問題が、無數にあるのであるが、あらましの輪廓をしめせば、以上のやうなことであらうと思ふ。

× × × × × × ×

因みに、大東亞建設審議會は、その後、本年十一月一日大東亞省新設と同時に、同省に移管され、今後は、もつぱら、大東亞經濟建設の具體的な綜合方策の審議にあたることとなつてゐる。

ナチスにおける「戰爭のための建設」

×

およそ世界いづれの國でも「强い國」にならうと願はぬ國はなく、いづれの國でも「自由な國」にならうと望まぬ國はないであらう。

しかし、もと〳〵「强い國」、「自由な國」であつたのが、なんらかの事情で、不自由な國、强くない國にうらぶれた國なら、さうした願望はとくに熾烈なはづである。

その一番いい例を、われわれは、一九三三年（昭和八年）にナチスの國となつ

たドイツにみることができるのである。

ナチス・ドイツの指導者となつた當初のヒトラーの念頭には、一日も早く、一年でも早く、祖國ドイツをもとのように、「强い國」、「自由な國」としようといふことしかなかつた。彼みづから青春の命をかけて護らうとした祖國は、一たび戰敗國となるや、底知れぬまでのうらぶれ方を示し、情けないほどに「强さ」と「自由さ」をなくしてしまつたからである。

ヒトラーが、ナチス第七人目の黨員となつて、政治家たらんことを志したのは、母の死に際しても落さなかつた涙を祖國の沒落ぶりにはとめどなく落したといふ事實でもわかるやうに、祖國にもとのやうな「强さ」と「自由さ」とをとり戻したい一念からであつたとは、マイン・カンプフといふ自叙傳で、ヒトラーみづからハッキリいつてゐるのである。だから、この間のながい年月、苦しい茨の道を歩

んで、とう〳〵政府の首班にまでたどりついたヒトラーに、いまこそ、その渾身の力をふるつて、ドイツに「强さ」と「自由さ」とをとりもどさねばならぬといふ勇猛心が、ウッ然として、もりあがつたことは、十分想像のつくことである。

そして、ヒトラーが祖國に「强さ」と「自由さ」をとりもどす最善の道は、たゞ一つ、「戰爭のための建設」といふこと以外になかつたのである。

ナチス・ドイツは、ヒトラーの指導下に、ひたむきな精進をつゞけることになつた。その目標は、一切が、「戰爭のための建設」におかれてゐたのである。

しからば、ヒトラーは「戰爭のための建設」といふことをどういふ風に考へたのか。どうして、これを絕對唯一のドイツ復興策と考へたのか。

それは、說明するまでもないことである。

ヒトラーは、前の第一次世界戰爭で、ドイツがどういふ戰爭の仕方をしたか、

なぜ敗戰の憂目をみねばならなかつたか、その後の世界、とくに歐洲の情勢はどうか、といつた點を精細に反省し、研究した結果、結局、さういふ結論に達したまでのことであつたのである。

前の第一次世界戰爭は、ナチスにとつては、建設の絶好の活資料であつたわけである。

× ×

一九一四年（大正三年）八月に勃發した戰爭は、四年過ぎても、なほ勝敗が決しなかつたが、陸上におけるドイツ軍は、大體において各戰線とも終始有利な戰闘をしてゐた。とりわけ、一九一八年（大正七年）三月に西部戰線においてこゝろみられたドイツ軍最後の總攻撃のごときは、まことに、はなばなしいものがあつ

た。攻撃また攻撃、突進につぐに突進をもつてせるドイツ軍は、またたく間に、英佛聯合軍の聯絡を遮斷し、アミアン近くまで迫つた。英軍は、はやくも、本國めざして退却の準備をはじめ、佛軍は、首都パリー防禦のために集結をはじめつゝあつた。ドイツ得意の長距離砲陣がパリーの表玄關をねらつて、一切の準備を完了さへしてゐたのである。

ドイツ軍の決定的な勝利は、もはや疑ふべからざることのやうにおもはれた。その上、ドイツ本國内は、事實上、敵軍の一兵の侵入に對してさへ、完全に防護されてゐた。全世界戰雲漠々と稱されながらも、四ケ年善戰のドイツに、やうやくにして勝利の女神が微笑みかけてゐたかのやうに、すくなくも戰線の表面はなつてゐたのである。

しかるにもかゝはらず、ドイツは、結局、あのやうな慘ましい敗戰國となつて

しまつたのである。

戰爭の四ケ年間、終始、勇敢な一歩兵として、第一線に活躍した若き戰士アドルフ・ヒトラーにとつて、勝ちつゝ敗れた自己の祖國の姿は、いひしれぬ悲しみであつた。鋭敏多感な彼の胸奥深く、この慘ましい事實のよつてきたれる原因の一つ一つが、いとも克明にきざみつけられたことは想像に難くないのである。

ヒトラーが、まもなく、苦難な政治生活への徹底的活動を決意したのも、要するに、この祖國の慘ましい沒落の姿を眼のあたりまざまざとみせられるとともに、そのよつてきたれる原因の實相がつぶさに、鋭い眼でみとゞけられ、敏い耳できゝとゞけられたからにほかならない。

一擧にしてネグロ國なみに沒落してしまつたドイツ帝國、祖國をもとのやうに雄々しく起ちあがらせよう、もう一度もとのやうに強い、自由な國にしよう。それ

には、自分自らの一生を、全身全魂をうちこんで、政治建設への難行に挺身するほかにみちはない。――

ナチス・ドイツの「戰爭のための建設」は、かうして、ヒトラーが二十幾歳にして、政治的活動を決意した一九一九年（大正八年）からはじまつたともいへるのである。一わたり建設を終つて、戰爭にとりかゝつた一九三九年（昭和十四年）から勘定すると、丁度二〇年前にあたることになる。

×　　×　　×

第一次大戰にひきつゞいた十幾年のドイツ沒落期は、ナチス史的もしくは民族發展史的にふりかへつてみれば、いはば、つぎにつゞくべき「戰爭のための建設」準備期であつたともいへるであらう。

端的にいへば、ヒトラーがドイツの政權を一手に委ねられるにいたつた一九三三年（昭和八年）といふ年からが、眞の建設期であつたのであるけれども、ナチス建設は、あくまでも、ヒトラーのこの第一次大戰に對する挺身的體驗が根本の基調をなしてゐたばかりでなく、戰爭終結と同時に開始されたヒトラーの眞劍な政治活動なくして一九三三年（昭和八年）の政治的榮冠と建設への間髮をいれざるスタートのあらうはづもなかつたからである。

そもそも、前の大戰に敗れたドイツは、一體どういふ國になつたのか、一わたり想ひだしておく必要がある。まづ、なによりも第一に、軍事的無能力國になつたことは、いふまでもない。

「北フランス、ベルギー、アルサスローレンより十五日間に撤退すべし。その後の十日間にラインランドより撤退すべし。聯合軍はライン左岸を占領し、ケルン、

コブレンツ及びマインツの橋梁を占領す。ライン右岸にては十キロの中立地帶を設け、ドイツ軍の立入りを禁止す。東方にては、一九一四年當時の國境にまで後退すべし。五〇〇〇門の大砲、二五五〇〇挺の機關銃、一七〇〇臺の飛行機は聯合軍に引渡すべし。機關車五〇〇〇臺、貨車一五〇〇〇輛、自動車五〇〇〇臺、全部の潛水艦、戰艦一〇隻、裝甲巡洋艦六隻、巡洋艦八隻、驅逐艦五〇隻も、聯合軍に引渡すべし。ドイツ國に對する封鎖は依然繼續す。」

これが、一九一八年（大正七年）一月一〇日ドイツ軍側に呈示された休戰條件であつた。さすがの軍國ドイツも、これで、完全な丸腰にされてしまつたのであるが、その上に封鎖戰、飢餓戰をも續行するといふ徹底した要求がなされたのである。そして、さらに、この一時的丸腰に對して、恒久的丸裸を要求したのが、ヴエルサイユ條約であり、そのうちのとくに軍備禁止條項であつた。

「陸軍の常備軍は一〇萬を限度とし、將校の數は四〇〇〇を超ゆるべからず。參謀本部及び軍事行政機關は最少限度に之を縮少すべし。兵器、軍用材料、軍需工場の施設は之を禁止する。とくに戰車のやうな攻擊的武器の製造裝備は絕對に之を禁止する。義務徵兵制度を廢止し、志願兵制度となすべし。海軍においては、沿海防禦用の軍艦のみ之を許し、潜水艦の所有を許さず。なほ陸海軍とも軍用機は絕對に之を保有すべからず。飛行機の製作も之を禁止する。要塞の大半、沿岸防備施設は、すべて之を破毀すべし。」

これが、世界最强の陸軍、英國につぐ大海軍を誇つてゐたドイツに負はされた屈辱條項の內容であつた。むろん、あらゆる分野で力盡きて講和の已むなきにいたつたドイツとしては、どんな內容の條約でも拒むわけには行かなかつたのである。ドイツ全權も、ヴェルサイユに出かけたことは出かけたのであつたが、單に

講和條約書をうけ取るために出かけたので、條約會議のために可否を論ずるためにでかけたのではなかつた。即時調印しなければ、聯合軍の即時侵入、ベルリンの即時爆撃あるのみ、とフランスの新聞はさかんに威嚇してゐたのである。ナチスが、事ある每に、ヴエルサイユ條約を目して「强制條約」だといひ、こんなバカげた講和條約などあるものじやないといつて罵倒してきたのは、おもふに、あの當時の悲憤を絕えず想起したためであらう。

とにかく、完全な武裝解除をうけた大戰直後のドイツが、一時黑人國にもひとしいものになり下つたことを知る者、今日の强大ドイツ國への建設ぶりの偉大さを世紀の驚異だ、と讃へるのもまことに無理ならぬ話である。

そして、大戰の結果、ドイツは、さらに、經濟的無能力の國となつたのである。ヴエルサイユ講和條約締結の翌日、ドイツ政府は、國民に對して、「吾人の損失

……生産地域の二割、國民の一割、石炭産額の三分の一、パン粉及馬鈴薯の全生産額の四分の一、鐵鑛の五分の四、殖民地と商船との全部、」といふ發表をしたさうであるが、とくに、ドイツが一八七一年（明治四年）の普佛戰爭によつて得たアルサスローレンを再びフランスの手に奪ひかへされ、ザール炭田地方が十五ヶ年間フランスの委任統治に附された後、その歸屬を一般投票できめることになつたことは、ドイツ資源の一大損失で、ローレンの鐵、ザールの石炭を喪つたことは、ドイツ將來の經濟復興が完封されることを意味したのである。その外、海外植民地の全部が沒收されて、しまつたばかりでなく、一切の侵略地における一切の損害賠償として、まづ二ヶ年內に、現金、物品、船舶で二〇〇億マルクの支拂を要求され、ついで、一九二一年（大正一〇年）五月、國際賠償委員會から一三二〇萬億マルクといふ天文學的數字の賠償金額が、その嚴格な支出方法の條件附で通告

されて、ドイツ財政經濟は、まるつきり底なしの惡化ぶりを示すにいたつた。その後、この天文學的數字もドーズ案やヤング案といふもので、漸次に、緩和されて行つたものの、この過度の賠償金支拂は、必然の勢として外資の輸入インフレーション政策の遂行、財政歳入の不足、公債濫發といふ一聯の破綻を誘發し、ついにドイツの紙幣は紙屑として賣拂つた方が金目になり、さらに燃料としてストーブに用ひた方が價値があるとまでいはれた前古未曾有の惡性インフレーション時代を現出し、對內的にも、對外的にもドイツ經濟の完全な無能力を招來するにいたつたのである。

だが、敗戰したドイツのより重大な様相は、第三に、思想的無能力の國となつたことである。もと〳〵、ドイツの敗戰自體が、當時の左翼過激思想の國內潜入に原因したといつてもいいのであるから、戰後の思想的無能力はむしろ當然の結

果であつた。もと〳〵、共産主義者による勞兵委員會などいふものが現はれて、危くロシヤのやうな赤色政權ができかけたところ、ドイツの傳統が物をいつて、結局社會民主々義政權に落ちついた、といふ經緯があるので、戰後ドイツの國內には、デモクラシーの思想活動がことさらに强大な力をもち、政治・社會・文化・經濟など國內のあらゆる分野を支配したのである。思想自體なんらの解決力、實踐力を政治的にも社會的にも經濟的にももたぬデモクラシーに支配された戰後ドイツの思想界の混迷は、はなはだ徹底したものであつたが、その混迷につけこんで地盤をかため、ドイツ國家社會を蝕んでゐたのが、ほかならぬユダヤ人及びユダヤ思想で、大戰後のドイツは、かうして、まるつきり、ドイツ固有の思想も世界觀も哲學も喪失してしまつた精神的無能力の國となつたのである。

だが、吉凶禍福は塞翁が馬とやら、大戰後のかうした慘憺たる無能力ぶりこそ

は、偉傑ヒトラーをして、今日の大ドイツに甦生せしめるにいたつた一大教訓にほかならなかつたのである。このことは、ナチスの發展史を繙くものの誰しも疑はぬところである。艱難汝を玉にす、苦しみに苦しみ、惱みに惱んだドイツ民族は、ドイツ民族自らと艱難を共にし、ドイツ民族自らの苦惱を最もよく感得したヒトラーを指導者に戴いて、見事な、玉となつて、起ち上つたのである。

私どもは、第一次大戰から第二次大戰にいたる二〇年間のヒトラーの歩み來つた道程を、かゝる廣い意味で、ドイツの建設期といへるのではないかと思ふ。すなはち、一九三三年（昭和八年）以後の本格的なナチス建設期に對し、ナチス以前の十五ヶ年間はドイツ建設準備期といふべきものと思ふのである。ヴエルサイユ條約は、俗にいふ泣寢入りにおさまりはしたものの、不當不屆の頑張りで聞ゆるゲルマン民族が、心中ひそかに、他日の復興を希ひ、後日の復興を誓つた、その熱

烈なる民族精神が、十五ヶ年間の試練に耐へて、つひに、再び起ち上つた姿がナチス・ドイツなのだ、とすれば、まこと、志あるものの一念ほど恐しいものはないわけで、世界史上、「戰爭のための建設」を志すものと怠るものとでは、所詮、勝敗の歸趨、自ら、判然たるものがある道理である。

× × × ×

ヒトラーがナチス建設を開始するにあたつて、最も意を用ひたのは、とりもなほさず、前大戰のもたらした教訓の反省といふことであつた。「戰爭のための建設」にとりかゝるのには、まづ「戰爭」といふものの本體をつかまへることからしてかゝらねばならぬ。つぎに來るべき戰爭は、どういふ形をとるのか、これにのぞむ國家は、勝利國たらんがためには、いかやうなる準備が要るのか、といふ

問題の解答は、ほかでもない、前大戰の示した實物教訓に對する反省によつてあたへられたのである。かうして、ナチス・ドイツの「戰爭のための建設」に對する第一歩が、第一次大戰の研究にはじまつたといふことは、ナチス建設を理解するのに、きはめて重要なことであると思ふ。ナチスが、第一次大戰から學びとつた第一の教訓は、一言にしていへば、將來戰が、いはゆる「總力戰」の形をとるといふことであつた。ドイツ語のトターレル・クリーク（全體戰爭）といふのがそれであるが、ドイツで、この觀念を、最も早く、最もまとまつたものとして世に示したのは、前の機會にもしるしたように有名なルーデンドルフ將軍である、同將軍が一九三五年（昭和十年）に書いた「全體戰爭論」といふ本は、近代戰爭論をやるものの必ず引合ひにださねばならぬ名著で、初版十數萬部が、またゝく間に出て讀まれ、洛陽の紙價を高めるとともに、その論旨內外の反響をよび起した劃

期的な著書である。

もと〳〵エリッヒ・ルーデンドルフといふ將軍は、周知のごとく、第一次大戰當時は參謀次長の要職にあつて、ヒンデンブルグ參謀總長を輔佐して、縱橫に作戰の腕をふるつた名だたる戰略家である。彼が最高統帥府に入つてこの重任に就いたのは、一九一六年（大正五年）八月、大戰長期化して、ドイツ國内に各方面に漸く弛緩のきざしかけた頃であつたが、それから二ケ年、大戰終結にいたるまで、國家の總力を戰爭遂行に集中して、ドイツ國民を鼓舞し、ドイツの武威伸張のため懸命に努力した。その結果は、結局なんら酬いられることはなかつたのであるけれども、とにかく、大戰を通じて、さらに大戰後も、ルーデンドルフの名は、ドイツ國内政治と軍事との兩面を知悉せる偉傑として、内外に聲譽をほしいまゝにしたものである。

その後ヒトラーのナチス黨勃興するや、愛國の情禁じ難く、ナチス黨の一員となり、一九二三年（大正十一年）十一月の有名なナチス・プッチ（フランスの第二次ルール占領に反對して、ミュンヘンに突發したヒトラー一派の示威運動に基因する政府側との衝突事件て、この事件のためヒトラーは、一九二四年（大正十二年）二月判決以後翌年二月末までの一ヶ年を獄中ですごした。有名な自叙傳マイン・カンプフは、この獄中作だつたのである）に參加し、ヒトラーと危險を共にし、ナチス政府成立後は、もつぱらナチス國防軍の再建に盡力し、とくに、國防思想の鼓吹に畢生の努力を傾けて來たのであるが、一九三七年（昭和十二年）十二月、大ドイツ國發展途上で、ついに永眠したのである。

ルーデンドルフの著書には、この「全體戰爭論」のほかに、「戰爭遂行ど政治」（一九二一年）とか「余の大戰回顧錄」（一九一九年）とか數種あるのであるが、

なんといつても、「全體戰爭論」が、ナチス建設の一つの大きな理念的基調であり、その一大典據として最も注目すべき論著であることは、疑をいれないところである。

ルーデンドルフが提唱した「全體戰爭」どいふのは、要するに、彼が世界大戰の體驗を基礎として構想した新しい戰爭哲學にほかならないのである。

ルーデンドルフの說いた全體戰爭の本質といふのは、大體いふとかういつたことである、すなはち、全體戰爭とは、ひとり軍隊の仕事たるのみならず、參戰國民の一人一人の生活と精神とに直接影響するところのものであつて、要するに政治の變化と人口の膨張とに伴ふ一般兵役法の採用とますく殲滅的威力を增してきた兵器の採用とによつて生じたものである。近代戰における戰場は、文字通り、交戰國民の全範圍にわたるのである。ひとり軍隊のみでなく、一般の國民も、部

分的相違はあれ、直接に敵の戰鬪行爲の對象となり、間接に食糧封鎖や宣傳などによつて、ともに戰禍に苦しむことになる。全體戰爭は、その本質上、國民全體がその生存を脅かされ、かゝる戰爭を自ら引きうけて立つ覺悟をきめた場合にのみ起るものである。それは、一國民の總力を要求すると、

そして、さらに、また、述べてゐる、かやうな戰爭の本質の變相にともなつて、政治の任務の範圍がひろがり、政治それ自體も、變へられねばならなくなつてきた。政治も、全體戰爭とおなじやうに、全體的性格をもち、「全體政治」(トターレ・ポリチーク)でなければならなくなつたのである。政治は、全體戰爭において、國民をしてその最大能率を發揮せしめるやうに考へ、その目標に合致した國民生活維持の理論を實現し、かつ精神的領域はもとよりのこと、あらゆる領域において、國民生存確保上必要なる事項に十分の考慮を拂はねばならない。そもそも一國民

がその生存維持のために行ふ至高の至大緊張が戰爭であるからには、全體政治もまたすでに平時から戰時の國民生存闘爭の準備に即し、かつこの生存闘爭のための基礎を確立し、それが戰時の重大危局に遲滯や齟齬を來したり、敵の破壞に葬り去られたりすることのないやうにしなければならぬわけである。

ルーデンドルフは、かういつた觀點から、戰爭を語り、政治をながめたのであるが、さらに、これを全體戰爭の基礎としての國民の精神的團結、經濟と全體戰爭、國防軍の編制と用法といつた諸點から、論證したのである。

× × × × ×

なほルーデンドルフ將軍の「全體戰爭論」において、國民の精神的團結をも國家總力戰の基礎なりとして、第一にかゝげてあることに、われわれとしては、と

軍の砲撃に對抗することができなかつたからではない。ドイツ國内に散在してゐた外來移住者と過激思想の持主が、聯合軍の魅惑的宣傳のために、容易に誘惑され、戰線の背後で、國家が崩壞したからである」といふ言葉があるやうに、當時のドイツは、たしかに、聯合國側の巧妙な宣傳作戰によつて致命傷をあたへられたのであり、宣傳戰に敗れた反面に、國民の精神的團結、思想的確立がなかつたといふ事實を指摘することができるのである。

ルーデンドルフの全體戰爭をよんでみると、ナチス・ドイツの國防國家建設、將來の全體戰爭に對處すべき全體國防の一環としての精神的團結といふことがとくに眞劍に說かれてゐる。たとへば、かういつた言葉がある。――

軍隊は、國民の中にその根をもつ。要するに、國民を形作る一部である。從つ

て、全體戰爭、即ち總力戰における軍の强弱は、國民の肉體的、經濟的および精神的强弱に左右される。とりわけ、精神力は、非常な長期にわたる戰爭に際し、民族維持のための生存鬪爭において必要とする團結力を軍および國民にあたへるものであり、この團結は、また國家存亡のために行ふこの種戰爭に、最後の決をあたへるものである。おもふに、今日いづれの國家も軍の裝備や訓練を等閑に附してゐない。そして、たゞ精神的團結のみが、國民をして、戰時惡戰苦鬪の中にある軍に、終始、新たなる精神力を注入し、軍のために盡し、戰時の苦難の中においても、將又、敵の戰爭行爲の下においても、自ら必勝の信念に燃え、敢然として、抵抗を繼續させるのである。わづかに平時における軍は、國民の精神的團結の見地において、一種特別の地位を占め得る。しかし、一度び動員令が下つて、在鄕數百萬の男子が召集せられゝば、この特殊の地位はたちまち消滅し、戰

爭が長引くに從つて、一般國民の精神狀態は、次第に軍に反映し來り、戰線における勝利によつて、軍隊および國民に對し、直接に精神力が注入せられぬ以上は、結局全く、軍の精神を支配するにいたるのであると。

ルーデンドルフ將軍の全體戰爭論の全部がわれわれの肯綮に値するのでは、むろんない。ことに、あれほどの名將軍でも、遠い東亞の皇國日本の神髓にどれほどの深い理解をもつてゐたのか、疑はれる節もある。たとへば、「日本國民の團結は、これイタリヤやロシヤの團結とは、全然、趣を異にする。その團結は精神的であり、主として天皇に對する忠節を基調とする神道の信仰にもとづくものであつて、彼等の祖先の遺風に副ふものである。天皇に對する忠義と同時に國家への忠義は、日本人の信仰生活が命ずるところである。日本民族の傳統から發生した神道の信仰は、國民および國家の要求に適應したものであつて、現今日本人

はこの點を認識して、神道の精神を大に鼓吹し、天皇の神性はいよ〳〵絶對性を増してゐることが知られてゐる。日本國民の强みは全く、その民族的傳統および信仰の統一と、それにもとづく國民の生活の仕方に存するのである云々といつた說き方をしながら、どうしたわけか、これにつゞいて、「しかし、他の宗教と同樣神道もまた日本國民に重大な危險を齎すのである」などゝ、妙な斷定を下したりしてゐるばかりでなく、その戰爭理論においても、「戰爭および政治は、ともに國民の生存のために行はるゝものであり、なかんづく、戰爭は、國民生存意志の最高の表現である、といふことから、「從つて、政治は、戰爭指導に奉仕すべきものである」といつたりしてゐることなどもわれわれの無條件に承服できぬところである。しかしながら、その總力戰論全體を通じてみるときは、その所論の趣旨においては、大體を盡くしてゐるとみていいのであつて、ヒトラーがナチス

第三國家として、總力戰即應の國家體制を建設するにあたつては、周知のやうに、まさに、同志たるルーデンドルフのこの戰爭理論を基調として、物を考へ、策を施してきたのである。

× × × × ×

むろん、わが日本の立場からながめた場合、ルーデンドルフの全體戰爭論が、一々あてはまるものと考へてはならない。例へば、「戰爭の本質が變り」政治の本質も變つた以上、政治と戰爭指導との關係もまた變らざるをえない。戰爭と政治とは、ともに國民の生存のために行はれるものであり、とくに戰爭は、國民生存意志の最高の表現であるから、從つて政治は戰爭指導に奉仕すべきものである、といつた考へかたは、わが皇國の政治と戰爭の觀念とかならずしもおなじ

でないのであるけれども、しかし、ナチス・ドイツの戰爭理論、戰爭哲學として、まさに、最高のものと考へられた。

ナチス國防國家建設の基調は、ある意味でこのルーデンドルフ將軍の全體戰爭の觀念にあつたともいへるのである。

すなはち、ルーデンドルフ將軍の提唱した「全體戰爭」の觀念からは、たゞちに、「全體國防」の觀念が引きだされ、ナチス國防國家の建設は、その國防觀念において、總力戰を完遂するに必要な國家のあらゆる力を國防の一點に集中して考へるといふことを基調としたのであつて、まさしく、將來直面すべき全體戰爭のための全體國防を豫め全面的に考慮することこそが、ナチス施策の眼目であつたのである。

ナチス國防經濟建設の步み

×

ドイツの建設は、ナチスにより經濟政策の上に具現化されて、有名なフィールヤーレスプラン（四箇年計畫）となつた。國防國家體制において、國防「經濟」の占める位置は、絕對である。四箇年計畫は、このナチス國防經濟の實際政治施策の上にうちたてられた國家計畫にほかならないのである。しかし、ナチスが、フィールーレスプラン（フィルヤーレスは四箇年、プランは計畫の意味）といふときはなにかしら經濟的意味以上のものが表現されてゐるのであるが、それこそ

特定理想を目標とするナチス國防國家建設、戰爭のための建設といふ道義的意味が、深遠な含蓄となつてゐるためにほかならない。

ナチス建設を語るには、どうしても、このフィールヤーレスプランの話を落すわけには行かない。四箇年計畫による建設は、見様によつては、ナチス建設上の大綱をなすものだからである。

ヒトラーが政府を組織してから、第二次歐洲戰爭のはじまるまでの七、八年間が、ナチスの活潑な建設の行はれた時期であるが、その間に、ナチス政府の政策は四ケ年の區切りをつけて計畫的に行はれた。一九三三年から一九三六年までの四箇年が第一次、一九三六年からの四箇年が第二次、といふ風に。これを普通に、ナチス四箇年計畫といふのである、おなじく「四箇年計畫」(フイールヤーレスプラン)といつても、第一次四箇年計畫と第二次四箇年計畫とでは、その性格、

その目標、その組織において、大いに趣が違つてゐた。かいつまんでいへば、第一次の方は、どちらかといふと政治思想計畫であり、第二次の方はどちらかといふと經濟産業計畫であつたのである。しかし普通にナチスの四箇年計畫といへば、大概後の第二次の方の四箇年經濟計畫の方を意味するやうである。といふのは、ナチス建設の仕方においては、なんといつても經濟分野が最後の最も重要な目標であり、政治思想計畫の方は、いはゞそこに到達するまでの準備計畫だつたからである。

しかし、「建設」といふ點からすれば、そのいづれの計畫、いづれの施策でも、ウエイトに輕重はつけられないはづである。これは、物的經濟主義の行きすぎを警戒するためにも、十分に、注意しておいていいことと思ふのである。

ナチスの第一次四箇年計畫は、ヒトラーが政府の首班として、はじめて演壇に立つて獅子吼した一九三三年（昭和八年）一月三十日のポツダム特別議會で、有

名な「われに藉すに四箇年をもつてせよ」といふ大演説をしたのにはじまつた。
切迫に切迫をつゞけた大戰後の情勢下に、血のでるやうな政治闘爭のあげく、やつと廻つてきた政權であつたから、ヒトラーとしては、まづ思ひきつた政策を强力に推進し、斷行せねばならなかつたので、まづ初つ鼻において、四箇年の期限付で、一切の專斷權を議會（國民）に要請したのが、その第一回演說の主旨だつたのである。
とにかく四箇年の猶豫をあたへよ、その約束の四箇年以内に、政府は、かならずや、國民の期待にそむかぬ建設を遂行してみせる。それには、政府に、議會その他の機關の拘束から脫した自由な裁斷權、專行權をあたへてもらはねば困る。しかし、これを許容してさへもらへば、政府はきつと、ドイツ甦生の效果をあげてみせる。といふのが、ヒトラー政府のスタートにあたつてあげた第一聲であ

とつて、きはめて興味深いものがある。

このときの議會の模様は、今日の大ドイツへの建設經過をふりかへるものにとつたのである。

× ×

ナチス政府成立後はじめての歷史的な議會は、三月二十一日、ナチス黨絕對多數の下に招集された。但し、共產黨に屬する代議士八十一名には招集狀を發しなかつたので、彼等は一名も登院できなかつた。開院式は、ポツダムの衞戍教會にて行はれた。衞戍教會は、フリードリツヒ・ウヰルヘルム一世とフリードリツヒ大王との遺骸のあるところ、白髮のヒンデンブルグ大統領、かつての青年中尉としてケーニヒグラツツの戰に從ひ、普佛戰役の勝利の喜びを味ひ、歐洲大戰の恐

るべき鐵火の渦巻中に祖國のために戰つた彼は、この國民渇仰の的たる故帝王の墓の前に花輪をさゝげ、教會の鐘は「主を讃へよ」と嚴かに鳴りひゞいた。祝砲は、殷々としてとゞろいた。幾萬の群衆は、立錐の餘地もないまでに街路を埋め、この記念すべき式典の一班なりと見んとし、ラジオの前には、黒山の群衆が、大統領の演說、ヒトラーの熱辯に聽き入つた。式中目立つたのは、前皇太子とマッケンゼン老將軍とが列席したことであらう。夜は突撃隊（いはゆるＳＡ）、鐵兜團、ヒトラー少年團などによつて、太炬火行進が行はれ、幾十萬の人々は街上を埋め、ヒトラー萬歳の聲は、怒濤のごとく、「ドイチエランド・ユーバー・アレス」（ドイツ國はすべての上に）の國歌と、「旗を高く揭げ、固く隊伍を組みて」のナチス黨歌とは、全國に湧きおこつたのであつた。

開院式後、議事は、議事堂全燒（同年二月二十七日夜半國會建物内部より發火

した。いはゆるドイツ國會議事堂放火事件をもつて、ナチス政府は、共産黨員の恐るべき反政府運動計畫の烽火なりとして、これを機會に、共産黨員の大彈壓、大檢擧を斷行、一擧にこれを清掃したことは、ナチス建設史初期の緊迫さを物語る有名な事件である）のため、ベルリン市中クロル劇場で行はれ、ゲーリングが議長席についた。

まづ、大統領ヒンデンブルグは、左のごとく演說した。

「二月一日の命令によつて、余は、國會を解散し、ドイツ國民自らが、余の新たに組織せしめた國粹的集中政府を支持し得せしめた。三月五日の國會選擧においてて國民は、明白なる多數をもつて、余の信任により任ぜられし新政府を援け、政府をして政策を行ふに必要なる憲法上の基礎をあたへたのである。

いまや、大宰相（ヒトラーを指す）およびその閣僚がなさんとする任務たるやき

はめて重大であり、複雜である。内政並びに外交において、また國民經濟の問題において、困難なる問題を解決し、重要な決定を遂げねばならぬ。余は信ずる、大宰相およびその政府は、確乎たる意志をもつて、これらの問題解決のために邁進することを。卿等、新たに選ばれし國會議員各位、望むらくは、この緊急の事態を明かに認識せられ、政府を援け、政府が困難なる努力をなすに對して、これを支持すべく力をかさるゝであらう。

今日、われわれの集合せるこの會場は、われわれをして、古きプロイセンを想起せしめる。プロイセンこそは、敬虔と義務に忠實なる努力と、退くことなき勇氣と献身的祖國愛とによつて偉大となり、この精神をもつて、ドイツ民族を統一したのである。願くば、この光輝ある會場の古き精神が、ドイツ國民を感奮せしめ、利己慾との闘爭または政黨的抗爭をやめ、われわれを國粹的更生と精神的改

新に結合せしめ、統一されたる、自由なる、また、誇りあるドイツ國を祝福するに至らしめんことを。

この願ひをもつて、余は、新しき任期の開かるゝに際し、國會に敬意を表し、さらに大宰相に對する挨拶とする。」

このヒンデンブルグ大統領の莊重な演説につゞいて、ヒトラー新首相は演壇にすゝみ、左のごとき熱烈な演説をこゝろみた。

「大統領閣下並びにドイツ國會の男女議員諸君！

久しきにわたり、重き苦惱は、わが國民の上に宿つてゐる。

誇りある興隆の時代、われわれの生活の、すべての方面における豊かなる華かさと繁榮の時代の次に——過去においても、しばしばありしごとく——ふたゝび艱難と窮乏とは、われわれの許に來つた。

勤勉にして、勞働の意志あるにかゝはらず、十分なる知識と善き意志との能力あるにかゝはらず、幾百萬の同胞は、今日空しく、その日のパンをもとめてゐる。經濟は荒廢し、財政は破綻した、そして、幾百萬の失業せる人々。

世界は、われわれの都會の外觀のみをしり、慘苦と不幸とは、何人もこれを見ぬ。

二千年以前より、わが國民は、かゝる變遷極みなき宿命の裡にある。隆昌の後には、つねに、沒落が來つたのである。

原因は、つねに、同一であつた。

ドイツ人は、内面的に沒落し、精神の統一を欠き、意志は混亂し、行爲に自覺なく、自己の生活を維持する力すら失つたのである。彼は、星の間に權利を夢み、地上における地盤を失つたのである。

ヒトラーは、語をついで、ビスマルクの偉業も歐洲大戰により瓦壞し、政治的に、道德的に、文化的に、また經濟的に、ドイツが沒落の道を急ぎつゝあつたことを指摘し、ドイツ國とその國民とが、内部の瓦壞に沈みつゝある際に、自己民族に敬虔なる信頼を抱き、これを統合せんとする新運動（ヒトラー運動を指す）おこり、この若さ、新しきドイツ國に、大統領は、偉大なる決心をもつて、國家の指導を委ねられた。國民自らが、生活の新しき秩序の建設に參加せしむべく、この國粹政府の人々をして、さらに、國民を糾合せしむべき旨を述べ、國民の代表たる政黨は、十五年にわたる受難の後に、空論的政黨政派的考へより超越すべきである、と要求したのであつた。今日、みるごとき强大なナチス・ドイツも、とにかく、滑り出しの當初は、ヒトラーみづから、かうした非常な決意と、そして抱負とに燃えてゐたのであつて、いはゞこの決意と抱負とがあればこそ、困難な

建設をやり遂げえたのであらう。

尤も、この議會演説の前に、ヒトラーは、組閣直後の二月一日夜、ラヂオを通じて、國會解散後のドイツ政界拾收策、ナチス・ドイツ建設の方途に關して、熱辯をふるひ、全國民に訴へてゐる。

この演説は、一層、ハツキリと、その決意と抱負を國民の前に示したのである。すなはち

かの不幸なる日、ドイツ國民が、數多の空手形に眩惑されて、過去の貴き所有物を忘れ、國の榮譽と自由とを捨てゝ顧みなかつた日より十有餘年が過ぎた。この日より、天は、ドイツ國民に惠をあたふることをやめた。衰滅の運命は、容赦なく、その歩を進め、十有餘年の長きにわたつて、マルキシズムは、ドイツを荒廢に歸せしめ、ドイツ農民を困難の深淵に陷れ、幾百萬の失業群をつくつた。國

民政府は、鐵のごとき決心と不拔の忍耐力とをもつて、つぎの計畫を行ひたいと思ふ。すなはち、（イ）四年の間にドイツ國民を窮乏の淵より救ひ、（ロ）四年の間に失業を徹底的に克服することを。それがすべての經濟振興の前提である。以上のこの振興の使命とともに、國家地方團體の行政財政の改革を使命とする。以上の計畫の核心をなすものは、勞働義務の觀念と移住政策とである。國民は、われわれに藉すに四箇年の日子をもつてせよ。しかる後にわれわれを批判し、審判せよ。

大體、かういつた意味の演說であつた。

つまり、ヒトラーは、最初の四箇年間において、失業者七〇〇萬の疲弊にあへぐ祖國、ユダヤ思想、共產思想の跋扈して思想的混迷にあへぐ祖國の建て直しを斷行し、單なる建て直しではなくして、將來の世界におけるドイツ國策の歸趨に

鑑みて、總力戰體制の確立といふことを眼目とした建設を、全面的に、實行しようとしたので、これが、ナチスの第一次四箇年計畫の眼目だつたのである。

× × ×

私は、こゝで、その建設計畫の具體的內容をこまぐ述べようとは思はない。要は、ナチス施政の最初の四箇年でもつて、いはゆる「國防國家」の總力戰體制が、組織的・思想的にほゞ完成されたばかりでなく、その當面の大眼目だつた失業撲滅方策や國內移植政策や、文教政策やが、すべて、所期のごとき成果をあげ、「戰爭のための建設」の一翼として織りこまれ、刻みこまれ、そして植えつけられた、といふことを知れば足りるのである。

一九三六年（昭和十一年）の秋、ヒトラーは、國民に向つて、その四箇年間に

おける施政の綜合戰果を、誇らかに、發表し、この第一次四箇年計畫につゞいて、さらに、第二次四箇年計畫を實行し、もつて、形のできあがつたナチス國防國家に、肝腎の魂をいれたいから、もう四箇年間、われわれナチス政府に全權を委任されたい、と演說した。

ヒトラーが誇示したナチス政府最初の四箇年間の施策成果といふのを、ならべてみると、

第一に、この四箇年間に、社會民主黨・共產黨・中央黨・ブルジョア黨は、一人も存在しなくなり、政治的・精神的な統一戰線が、實現したばかりでなく、例の頑强を誇つた階級鬪爭のための勞働組合も、資本家組合も、完全に姿を消し、經濟的・思想的な統一戰線もできあがつた。

第二に、國家の統一が完成し、地方割據の州政府も州議會もなくなり、十六州

旗の代りに唯一の國旗が生れ、總力戰體制の核心たる中央集權が名實ともに實現した。

第三に、ナチス黨及び國民多年の要望たるヴェルサイユ條約の鐵鎖からの解放が、果敢に實現され、ふたゝび國民兵役制が布かれ、二箇年の兵役義務が實施され、强く自由なる國への第一步が踏み出された。

第三に、海岸線および通商の防護のため、新艦隊の建設に着手され、都市および工場乃至は國土全體の防衛のために、强大な空軍が建設されるにいたつた。

第四に、ラインランド進駐が斷行されて、ライン地方が、ドイツの支配下に置かれ、ドイツ國力の强化が、漸く、世界の注目を惹くにいたつた。

第五に、なににもまして大きな成果は、六〇〇萬七〇〇萬と稱された失業者が、四箇年間のうちに、僅か一〇〇萬足らずに減少してしまひ、しかも、その就業者

は、おほむね、國策上重要なる事業部門に配置された。

第六に、農民に對する强制執行がきはめてすくなくなり、農民の收入は、かへつて、第一次大戰前よりも增加し、農村復興の機運をみせるにいたつた。

第七に、國民全體の貧富といふ點においても、年四一〇億ライヒスマルクだつた國民所得は、四箇年の後には、五六〇億ライヒスマルクに激增した。

第八に、中產階級と中工業者が、新たに、活況を呈しはじめ、商業も、またもとのような活氣を恢復するにいたつた。

第九に、ハンザ諸都市が、ふたゝび海運業の中心として繁榮しはじめ、また無數の工場も數倍の從業員を抱へるにいたり、新設工場は激增し、有名なクルップ工場のごとき大工場などは、未曾有の活潑な活動をつゞけつゝある。

第一〇に、經濟不況に祟られて休業してゐた自動車工場の復活擴張がみられ、一

九三二年年産四五〇〇〇臺が精々だつた生産能力は、四箇年後には、一躍二五萬臺にまで向上するにいたつた。

第一一に、國有鐵道は立派に甦生し、有名な自動車道路（アウトバーン）の建設は、豫定計畫の一部完成、殘りの大部分が工事中である。

第一二に、數十萬の家屋を擁する新集團住宅地が開發され、舊都市にも、立派な新建築が、どし〳〵着工されてゐる。

第一三に、山峽・谿谷にはドイツ技術文化の粹を集めた數百數千の大橋梁が架せられた。

第一四に、四箇年間に、地方財政の改善がほとんど實行され、州および町村の赤字は減る一方で、國庫の税收も、年約五〇億ライヒスマルクの増加となるにいたつた。

大體、ならべれば、かういつたことであつた。

これは、むろん、ナチス政府はじまつてから四箇年かゝつて獲得した成果のうちで、最も重要な代表的な成果をあげただけで、その外にも事項としてあげれば、まだいくらもあるのであり、そしてまた、われわれの銘記せねばならぬことは、かうした成果の一つ一つが、政府の眞劍な努力と國民の忍耐と協力との賜だ、といふことである。

× × × ×

ナチス・ドイツでは、毎年秋、ナチス黨の全國大會を開催するが、一九三六年(昭和十一年)の秋の黨大會も、例年のように、ニユールンベルグで行はれた。

この黨大會では、ヒトラー總統が、例年、重大な政治演說をこゝろみる慣例に

なつてゐるのであるが、その年の演說では、とくに、前にのべた第一次四箇年計畫の輝かしい成果を誇示するとともに、かくして出來たナチス・ドイツの型に魂をいれる作業として、ひきつゞき第二回の四箇年計畫を行ひたい、ついては全權委任法をもう四年延長して、一九四〇年まで實施したい、と演說かたゞ國民に要請したのである。

これが、ナチス第二次四箇年計畫の宣言なのである。このときのヒトラーの演說は、數多い彼の演說中でも、とくに政治的意義の大きな演說として注目すべきものであり、ことに、その演說の中で、第二次四箇年計畫は何をなさんとするのか、その目標、その方針、その要項は何か、といつたことまで言及してゐるので、甚だ意義のある演說である。そのうち、中心となる文句だけを拔き讀みしてみよう。

わがドイツにおいては、純正な國内經濟の建設、すなはち植民地をもたない國民經濟の建設は、殘念ながら、不可能事に近い。なぜなら、ドイツの現狀は、自國通貨流通領域において、食糧と原料を十分に調達できぬからである。しかし、われわれとして、全力をあげて、われわれの國土からとれるだけのものをとらうと試みてきた。

ドイツの經濟は、健全な國民經濟のすべてがさうであるやうに、自國民を經濟的に維持するために、できるだけ自力を活用することに努め、他力たる世界經濟の力は第二次的にのみ利用するにとゞめたいと思ふ。ナチス國家は、どんなことがあつても、人口制限など絶對にしない、制限どころか、あくまでも自然的な人口增殖を欲するものである。從つて、人口增加といふことに對しては、將來永く、なんらかの對策を考へねばならぬ。しかし、土地の收益を現在よりも飛躍的

に高めようと思つてもできないこともあるし、さればといつて、輸出を急激に増大せしめることも、近い將來においては、望み薄である。

こゝにおいてか、ナチス國家の指導者、ナチス經濟の指導者の任務は、ドイツ國内において必要とする原料、燃料などで、どんなものを自給生産できるかを、仔細に調査檢討することでなければならぬ。かくして節約し得た外國爲替は、今後食糧品を確保する資金の一部に當て、または國内でどうしても自給生産できぬ物資の購入に當てなければならぬ。そこで、余は、こゝに、新しい四箇年計畫を樹立し、發表したいと思ふ。

ドイツは、今後四箇年以内に、ドイツの必要とするすべての物資の外國依存を打破し、これらの物資は、なんらかの方法により、ドイツの能力によつて、すなはちドイツの化學工業・機械工業、もしくはドイツ得意の鑛山業によつて自給

生産すべきである。

この大規模なるドイツ原料品工業の再建は、軍備擴張の一段落ついた後に現れる失業者の大群をも、經濟的に有效に活用できるであらう。われわれは、これによつて、ナチス・ドイツの生産が、各分野にわたつて、またもとのやうな能力にまで增進できることを期待するものである。またナチスの生産が、國內取引の上においても增加し、その結果、輸入品は、主として、不足せる食糧品と原料品との補給に限定されることを期待するものである。

この强力なるドイツの經濟計畫を遂行するに必要な指令も、余は、すでに發した。これが實行は、ナチス的エネルギーと實行力とをもつて、なされるであらう。しかし、むろん、ドイツは、別途植民地要求の解決を斷念したわけではない。ドイツ國民の生存權は、他の國民の權利と同樣、强烈にして重要なものである。

大體かういつた演説であつた。

この宣言演説でも、すでに明かなやうに、第二次四箇年計畫の目標は、すでにほゞ完成したナチス國防國家體制の强大なる推進力としての國防經濟力を昂揚することにあつた。その計畫は、あくまでも、重點主義で、「軍備强化のための國防經濟的基調としての食糧および原料の自給體制の確立と製鐵業・化學工業・機械工業などの重要基礎産業の本格的生産力擴充」といふことに、全力を集中することとしたのである。

これは、ドイツの建設においても、まさに、劃期的な大計畫であつた。經濟的にだけでも、大規模な國防經濟計畫を遂行するためには、勞務者問題と物價問題とにおいて、格段の工夫を凝らさねばならなかつたし、社會的には、軍需優先のために、いや應なしに、一般民需の逼迫、生活の切下げは、不可避な

ことであつた。「バンよりも大砲」を望む國家建設としては、絶對的な構へであつたのである。

この四箇年計畫を遂行するために、政府のとつた措置の主なるものをあげただけでも、第一に、この計畫遂行の全權をゲーリング航空大臣に委ね、新たに四箇年計畫廳を設け、四箇年計畫遂行に關するかぎり、各省大臣及黨を指揮監督する權限をゲーリング四箇年計畫受託官にあたへた。このためには、經濟省の大改組さへ斷行され、いはゞ四箇年計畫廳は經濟參謀本部として、各省の上にこれを統轄する形をとることになつた。これは、ドイツの總力戰體制上、最も重要な、劃期的な政策で、ヒトラー政府の政治力をます〳〵强化するに役立つた。

四箇年計畫廳の構成は、第一部から第六部まであり、各部長には、ナチス著名の逸材が拔擢任命された。この役所は、いはゞ計畫官廳の特色として、下役より

も上役の方の多いクラゲ式の構成をとつてゐる。わが國でいへば、差向き企畫院といつた役所にあたるものである。これは、結局、總統の政治力强化のために行はれた機構整備で、思ひきつた施策だつたことを注意せねばならぬ。

第二に、この四箇年計畫の遂行のために、尨大な勞働力が必要であることはいふまでもないが、ナチス政府成立當時あつた七〇〇萬の失業者は、もはや一〇〇萬足らずに減つてしまつて、勞務給源に一工夫しなければ、新らしい勞務動員は、なかなかできぬ狀態にあつた。このために、ナチス政府は、いろいろ思ひきつた勞務對策を實施したのであつたが、なにしろ、勞働組合・資本家組合のやうな階級闘爭思想を基調とした勞働組織をうちこはして、新しく、勞働者と資本家とを打つて一丸とした擧國的生產者組織として、ドイツ勞働戰線を創設したり、經營內の企業家と從業者との關係を規律する、ナチス世界觀(指導者原理・公益優先主

義など）に基いた新しい勞働秩序法を制定したり、さては、全國二千數百萬に上る勞務者の登錄、勞務手帳制を手廻しよく實施したり、有名なアルバイツディーンスト（勤勞奉仕制）を實施したりしてゐたので、いよ〳〵全國の人的動員の緊急事態に當面しても、うつ手に無駄といふものがなく、ことに、軍需工業や生產擴充部門への勞務動員の外に、西部國境の有名なジークフリード要塞の構築にあたつての勞務動員には、國民徵用制を樹立し、またこれを强化するなど、大戰はじまる前から、すでに戰時意識でやり拔くことができたわけである。もちろん、政策の上ではさうであつても、實際の情勢が、いつのときにも逼迫の度を示してゐたことは想像に餘りあるのであつて、政府としても、なか〳〵苦慮せねばならぬところであつたことは、否定できない。いづれにしても、平時から「戰爭のための建設」にかゝつてゐたのであるから、表面は、平時でも、客觀情勢は、大戰

開始の頃にいたつて高度の逼迫を示したとて、怪むに足りないといふべきである。

ことに、第三に、物價政策において、さういへるのである。ナチス政府は、國防經濟第二次四箇年計畫實施に入る早々、諸般の事情を察知して、いちはやく、一九三六年（昭和十一年）十月十八日に、物價停止令を施き、低物價政策の完遂を期した。所期に近い低物價水準の維持に成功してきた、といふのも、ドイツ人の合理的科學的な頭腦に適した原價計算制度の徹底が大きな原因をなしてゐやうが、第二次四箇年計畫の强行が、早晩齎らすであらうところのもろもろの問題に對して、思ひ切つた施策をいち早く斷行した準戰時意識の所産であることは間違ないのである。

× × × × ×

ドイツの第二次四箇年計畫は、獨ソ戰爭の開始によつて、一切が戰時計畫にきりかへられた後も、依然繼續實施することゝされ、しかも、その翌年、一九四一年（昭和十五年）で一應終る勘定になつてゐたが、同年、政府は、戰時中といへども、なほ、今後さらに、四箇年、第二次四箇年計畫を繼續實施する旨を宣言した。あへて、「第三次」四箇年計畫といはないのは、「第二次四箇年計畫」のもつ意味に、前にのべたやうな、特殊の國防經濟的意味があるからであらう。

とにかく、ドイツの「戰爭のための建設」は、一九三六年（昭和十一年）ごろから、急角度に本格化したことは、事實であつて、しかも、ナチス政府が誇示したところによると、頗る順調な成果をあげたものとみられるのである。

ナチス政府が、面白い數字を示してゐる。一九二八年（昭和三年）を基準にして、ドイツが、一九三六年（昭和十一年）、一九三八年（昭和十三年）に、その工

業生產力をいかに向上せしめたか、といふことを、英・米・佛の三國と比較してゐるのである。それによると、

	一九二八年(昭和三年)	一九三六年(昭和十一年)	一九三八年(昭和十三年)
ドイツ	一〇〇	一一四	一三二
イギリス	一〇〇	一二一	一二一
アメリカ	一〇〇	九八	八一
フランス	一〇〇	七六	六八
世界全體	一〇〇	一二二	一二二

といふのである。事實さうだとすると、ドイツの大戰にいたるまでの工業生產力乃至一般國力の躍進は、一の驚異に違ひないのである。一切を戰爭に備へての建設といふことであれば、その國防力の强化、推して知るべきであらう。

×　×　×　×　×

たゞ、こゝで、一つ注意して置きたいことがある。それは、ナチスの四箇年計畫下に營まれてきた國防經濟建設の觀念が、名は、「計畫」でも、「統制」にあらずして、「指導」であり、「統制經濟」にあらずして、「指導經濟」であつたといふことである。ナチスの經濟建設においては、「統制」といふ文字が、ほとんど使用されてない、といふことは、われわれに何ものかを示唆しないであらうか。フユーレン（指導する）とか、シユトイエルン（操縱する）とか、レンケン（方向を定める）とか、レーゲルン（調整する）とか稀に、プラーネン（計畫する）とかいつた用語例があるだけで、「一律に抑へる」といつた意味の「統制」の語は、ナチス經濟には、案外にも、まるでみ當らないのである。

一昨年春、來朝したナチス經濟建設の關與者の一人たるヘルフエリッヒ（ハンブルグ東亞協會會長）氏が、かつて、日本經濟聯盟會における講演において、このことに言及して、つぎのやうに、のべたことがある。

「われわれが、ドイツで發見しました新らしい經濟形式は、往々誤つて、計畫經濟として呼ばれて居りますが、むしろ、この經濟形式は、たとへそれが多くの場合、非常に廣範圍にわたる指導であるにしましても、それは、事實、一つの「經濟指導」であるのであります。いふところの「計畫經濟」は、非個人的・官僚主義的な表示でありますが、ナチスは、――經濟上においても――まつたく個性（ペルゼーンリツヒカイト）を主とするものであります。ナチスは、私有財產權の概念を、完全かつ全面的にみとめるものでありますが、しかし、個人の無制限な利得主義はみとめません。ナチスは、「公益は私益に先んず」なる言葉を銘として居

ります。ナチスは、個人の利得は、これを許すのでありますが、公益を先にすることの制限附で許すのであります。その協同體觀念に立脚するナチスは、個人主義を否定するものでありますが、しかし、個性、すなはち個人の創意（イニシアテイヴ）個人の自責・これを一言にしていへば、技倆（ライスツンク）を要求するものであります。これは、なんら矛盾するものではなくて、やゝ異なるものにすぎません。しかして、われわれが、ドイツで、新經濟形式の範圍において課せられたすこぶる大きな任務は、經濟指導とこの個性的技倆とをいかにして調和し、統合するかといふ問題でありました。經濟指導において、それが一つの官僚化に變性しなければ、なんらの羈束がないこと、われわれは、みとめて居ります。むしろ、反對に、われわれの建設しつゝあるこの經濟指導制度は、一つのより優れた自由原則だとみてゐるのであります。……

大體、かういつたことをいつてゐるのである。その經濟建設が、想像されるやうな過激觀念論的理想論的改革に走ることなく、過去における各經濟部門發達の經過ならびに機構は、できるかぎり尊重し、その機構を國家目的にそふやうに、指導し、利用して居ることや、その經濟指導のための機構を一元化し、命令系統をあきらかにするとともに、事務の澁滯や能率の低下を極力防止してゐることや、局部的計畫に走らず、つねに綜合經濟的見地より檢討してゐることや、いはゆる重點主義的な指導經濟であつて、戰爭目的に無關係な部面の抑壓などより、徒らに、摩擦・相剋を招くやうなことは、極力回避してゐることや、國家目的遂行上必要な指導經濟の遂行を阻害するごとき行爲に對しては、嚴罰主義をもつてのぞんでゐることや、すべての計畫が、官民の別なく、その道の實務に明るい專門家により立案され、實施されてゐること、など、いづれも、ナチス經濟政策の實際を研究調

査せるものの、ひとしくあげる特長であつて、われわれとしても、大に、學ぶべき點があると思ふ。（私としては、前に、「ナチス戰時經濟體制研究」なる小著において、その他二三の機會において、さうした點にとくにふれておいたことがあるから、こゝでは、これ以上のべないであらう。）

生産の戦爭と建設

×

近代總力戰が、生産戰の一面をもつことは、いまさらいふまでもないことである。それは、近代戰が、巨大な消耗戰たることからくる自明のことである。生産に從事する人の數を戰線に奮鬪する兵の數に比較してみれば、近代總力戰における生産戰の意義がよくわかる。第一次歐洲戰爭においては、前線に活躍する兵百人の兵器・彈藥・兵糧・戎服その他一切の裝備をあつらへるのに、工業の從業者は二百八十八人要るといはれたのであるが、第二次大戰下においては、その後の絕大なる兵器の進歩、裝備の發達のために、どう少くみつもつても、まづ五百人

は要る、といはれてゐる。近代總力戰における軍需産業の動員は、軍動員に比して、それほど規模が擴大されてゐるのである。つまり、銃後の生産戰が、停頓することは、前線の武力戰が停頓することを意味する。

銃後からの補給がつゞくことが、前線の活躍を保障する所以である。

總力戰は、生産戰だ、ともいふのは、この意味である。

大東亞戰爭下、皇國の頑敵は、むろんアメリカである。尨大なる産業機構と豊富なる原料と無數の勞力と、そして、世界無比の財力とをもつて、世界支配に耽々(たんたん)たりしアメリカが、いまや皇國の目前に、まことの敵國として立つてゐるのだ。

緒戰の敗北には、さすがのアメリカも、愕然としたと覺えるが、名にしおふアメリカである。みづからの大生産國たる衿恃(きんじ)の手前、このまゝ、だまつて引きさがるはづはないのである。

はたせるかな、アメリカは、緒戰の敗北を拔き打ちにやられたかすりきずにすぎないとし、陣容を建て直して立ち向つた曉は、目にものみせてくれんず、と豪語してゐるのである。しかも、アメリカの朝野の敵愾心は、相當なものだといはれる。大きなアメリカが、小さな日本に、たとへ、だしぬけにせよ。一度でも、うちのめされたことは、彼等のもつヤンキー的自負心を損ふことおびたゞしいものがあつたからであらう。

よし！　一九四四年まで待て、航空機は六萬臺、艦船は八〇〇萬トンといふ大能力あげて、總反攻し、日本など一もみだ。それまでの戰力培養こそ、アメリカの當面の問題である。ルーズベルトは、かう怒號して、ひたむきに、國民の戰時意識昂揚につとめてゐるのである。

支那事變で、すでに四年有餘、日本も、軍事的・經濟的に、相當弱つてゐるの

だらうとみて、卑劣な經濟壓迫政策で押してきたのは、アメリカの勝手な誤算であつた。支那事變中といへども、國力の四割を事變そのものの遂行にそゝいだにすぎず、あとの六割といふものを軍備および生產力擴充にそゝいできた日本の遠謀、國防國策を御存じなかつたのである。まことに大きな誤算といふべきである。

だが、一たび誤算と感づいたアメリカは、まさに、猛然と、起ち直つた。そしてあの巨大なる圖體をゆりうごかして、やをら立ちあがつたのである。

外面、徹底的な議會主義、デモクラシーの國とみえたアメリカは、內實、ルーズベルト中心の獨裁政治が、相當の程度に行はれ、彼の號令下、さすがの自由主義アメリカも、めざましい戰時體制化を開始したといふのである。

例へば自動車文化の國アメリカは、自動車工業の生產によつて、國の盛衰が左右されるとまで從來いはれたのだが、事實は豫想に相違して、みごとな戰時轉換を

やってのけ、いまや軍需一點張りの自動車工業を運營しつゝありといはれるし、女の國アメリカに、いまや女の兵隊、女の勞働者がめざましい進出と活躍をみせて、防衛と生産に從ひつゝありともいはれる。

かうなると、アメリカとても油斷はならぬ。

本格的に起ちなほられては、厄介な敵手である。

敵は、長期戰をねらひ、長期立ち直りの後に、立ちむかつてくる算段である。

日本は、この際、よほど、しつかりした戰爭意力を昂揚し、あらゆる生産力を、できるかぎりの頑張りで伸張して、對抗せねばならぬ。生産戰でくるものには、一應、生産戰で立ちむかはねばならない。

むろん、唯物的な眼から、あの尨大な生産力の國アメリカと日本とをくらべて、とてもかなはぬ、比較にならぬ、とさじをなげるものがあるとすれば、もつての

外である。日本人は、「日本人として」物を考へ、事に當らねばならぬ。

思ふてもみるべし、「金棒」は「金棒」それ自體として力があるのではなく、「鬼」がこれをもつて、ふりまはすところで、力がでるのである。アメリカは、生産力に物をいはして、「金棒」は、どし／＼つくるかもしれない。だが、しかし「鬼」はどうか。「鬼」の精神はどうか。魂のこもつた「鬼」でなければ作りすぎの「金棒」は、むしろ、もてあますのみである。

肇國以來の大精神で、大君の邊にこそ死なめ、と鍛えに鍛え、練りに練つてきた大和武士が、大和魂をゆりうごかして、「金棒」をふりまはすかぎり、ヤンキーの「金棒」ごときに、辟易する道理がない。日本の生産戰で、一本でも多くの「金棒」をつくりあげ、皇國の「鬼」をして、縱横無盡にふりまはさせるならば、アメリカまたなんするものぞである。

だから、われわれとしては、皇軍の戰鬪力に絶對の信頼を置いて、たゞひたむきに、生產性を昂揚させなければならない。一トンの鐵・石炭でも一俵の米でも、總力戰、生產戰の對象は、單なる兵器彈藥のみでない。

生產從事者は、そのあたへられた職域で、遮二無二、生產戰に頑張りさへすれば、勝利は、おのづから、われわれの上に輝くのである。繰返へしていふ、武力でくるものには、武力で、生產力でくるものには生產力でたち向ふよりほかないのである。

× ×

總力戰の一面は、まことに、生產戰であり、勤勞戰である。一人一人の勤勞者が、あらゆる困難を克服して、最大最高の勤勞生產性を發揮できるやうな體制が、

總力戰體制の重要な一翼となるのである。

勤勞者としての國民としては、要するに、みづからのもつ全能力を發揮して、みづからにあたへられた仕事をできるかぎり短時間にやり遂げる、といふこと以外にないであらう。むかしの自由主義・個人主義時代のやうに、賃金がどうの、勞働時間がどうのと、工場主と工員との間に、もめてゐたのでは、それだけ、生産力のロスになるわけである。工場主は工場主で、ゆるすかぎり、工員の生活を考慮し、工員は工員で、工場主に、全幅の信頼を置いて、その全能力を、工場の作業に傾ける、そこから生れる工場生産の力が、そのまゝ、總力戰を完遂するための一戰力に轉化してゆくのである。

總力戰には、武器をとる兵士と、機械に携る兵士と、二つの兵士があるが、その義務や責任やは、兩者全く相同じい、といふ意味のことを、ドイツ指導者はし

ばく強調して居る。

したがつて、「機械に携る兵士」のための國防組織は、ドイツとしても、執政以來、大に考へてきたのである。

アルバイツ・フロントと、K・D・Fといふのが、すなはちそれである。

そして、また一方、生産の擴充を計畫的に確保するためには、産業經濟全體の組織を從來のやうな自由主義體制に放任しておくわけにはゆかぬ。その體制は、あくまでも、綜合國力の發揮に適した有機的構成をもつ組織でなければならぬ。

ドイツの經濟組織が、その國防經濟建設への門出にあたつて、いちはやく、再編成されたなどは、ナチス政府の遠慮、果斷の所産として、われわれのとくに注意せねばならぬところである。一九三四年(昭和九年)二月二十七日に制定された「ドイツ經濟有機的國體構成準備法」以下の諸法令にもとづいてできた「全國團」・

「經濟團」・「專門團」・「分團の業種別組織」「中央經濟會議所」「地方經濟會議所」の地域別組織の全國産業經濟組織がそれである。

わが邦でも、國家總動員法に依る重要産業團體令によつて、各種の統制會ができ、さらに、近く、從來の商工會議所に代つて、經濟會議所が生れやうとしてゐるが、狙ひとするところは、いづれも、おなじ生産の力の擴充といふことであり、戰力の增强といふことであるべきものである。

むろん、生産戰の遂行には、單に、かうした産業經濟の組織の確立といふことだけでは足りないのであつて、或は、戰時下不急不要の産業部門をはじめ日常生活品産業といへども、戰時國民生活を確保できる程度の生産目標の程度で、おさへて、そこからうまれる餘分の勞務・資材・設備などを、一切、他の重要産業にふりむけて、生産增强に資せねばならぬ。或は、中小商工業を整理統合して、能率

本位の生産に建て直し、かつ勞務の供出にも資せねばならぬ。或は、國内の眠れる資源の回收活用、不急不要の工場にある遊休未働の設備の轉用なども、どしどし行はねばならぬ。とにかく、國内一切の事物が、戰力增强といふ眼から見直し、その狙ひで考へ直されねばならぬのである。そこに、また、不斷の「戰爭と建設」があることをわするべきでない。

つまり、生產戰の完遂といふことは、國家總力戰の一翼として考へられるかぎり、單に、一機械、一工場、一鑛山の生產數量を物理的に增すだけで十分なのではない。長きにわたる戰力の維持のために、不斷の生產を確保するはもちろんのこと、さらに、その生產根源を確保するために、國力の一切を生產增强の一點に集中し、綜合化せねばならぬのである。

× × ×

わが邦の産報運動、「大日本産業報國會」の組織にあたるアルバイッフロント(勞働戰線)、とくにその外廓組織たるクラフト・ドルヒ・フロイデ(歡喜力行會)の活動について眺めるときは、ドイツ勤勞者層が、祖國の建設について、いかなる心構へと組織とによつて、その生産部面を擔當してきたかが、きはめてよくわかるのである。

むかし、左翼思想の盛んなころに、勞働組合といふものがあつた。階級鬪爭思想を金科玉條のやうに考へてふりかざし、生産部門の把持者たる資本家と彼に使はれる勞働者とは、もと〳〵利害相反するものであるから、勞働者側としては、團結して、資本家に對立抗爭しなければ、賃金は切下げられ、勞働時間は延長さ

れるといふ危險がある。かういふ淺ましい社會思想が根底となつて、勞働組合が發達してゐた。ドイツでも、むろんさうであつた。いや、ドイツの場合は、その經濟界の困亂、思想界の混迷のためにとくに、不健全な反國家思想がはびこり、左翼思想に支配されて、勞働者側は、自分一個の利害の追及のみに精一杯であり、資本家階級の「搾取」からなんとかして脱却しつゝ自己の利益を伸張しようとあせり、唯物的世界觀でコチ〳〵となり、團結の力を利用して、怠業その他の勞働爭議に憂き身をやつしてゐた。從つて資本家側も、自然、これに對抗して、團結し、資本家組合と勞働組合との對立のうちに經濟は動かされてゐたのである。

ナチス新ドイツ建設が着手されるにいたつた一九三三年（昭和八年）當時のドイツには、かうした勞働組合の數が全國で一六九、資本家組合は四六を數へ、その間に惹起された勞働爭議は、夥しい件數に上つたのである。

かうした總力戰國家體制建設上の最大障碍が、ナチス政府の英斷で、まづ第一に手入れされ、新しい構想の下に再建されたことは、さもあるべきことであつた。

全國唯一の、資本家と勞働者とを包擁した新しい組織の名を、ドイツ・アルバイツ・フロント（ドイツ勞働戰線）と呼ぶのである、フロントといふのは、「戰線」「第一線」といふ意味の軍隊用語である。ナチスには、かうした風の軍隊用語を政策用語にどし〳〵轉用して、戰時體制的な感覺を出してゐる例が多い。その總參加人員いまや二千五百萬を突破し、ドイツ人口の四割を占める狀態にあるのである。

この新團體が正式に成立したのは、一九三三年（昭和八年）十月二十四日附の法律に基いてできたのであるから、數多いナチス施策のうちでも、とくに早い方であつた。しかも、立法に先立ち、同年の五月一日（往年のメーデー、ナチスの國民勞働記念日）の大會を期して、勞働新體制確立に關するヒトラーの宣言が行

はれるや、翌日早速、左翼陣營の勞働組合本部に對して斷壓が强行され、事實上、舊勢力が掃蕩され、こゝに間髮をいれず、新たなる政治條件に合致した勞働生活形式としての一大組織體が、革新的脚光を帶びて、生れ出たといふわけである。

「勞働戰線」といふ譯語からうける感じは、一寸狹隘な感じだが、構成員はドイツ國內のサラリーマンも、職工も、事業主も、自由職業者も、銀行、商店の經營者もおよそ勤勞に從事するもの一切が、これに參加するのであるから、いはばドイツ內のあらゆる職業分野が、これに參加してゐることになつてゐる。たゞ、農業だけは別に、なつてゐる

× × × ×

ドイツのカー・デー・エフ（K・D・F）といへば、知らない人は少いであらう。

とはクラフト（力）の頭文字、Fとはフロイデ（歡喜）の頭文字、Dとはドウル

と(に依る)の頭文字。「歡喜による力」といふ意味で、いはゞ「歡喜力行會」とでも譯すべきものである。

アルバイツ、フロント(勞働戰線)の營む數多い社會事業施設の中の一つで、政府自慢の社會勞働政策である。これも、いはゞナチス建設面における重要な一翼を擔つてきたものであつた。

「歡喜力行會」は、つまり、ドイツの勤勞者層に、できるかぎり文化生活を味はせやうといふ趣旨で設けられたドイツ勞働戰線本部の外廓組織である。從來、金と暇とにめぐまれた一部特權階級のみの獨占物となり勝ちだつた文化生活を、わづかの資とわづかの餘暇とを活用することによつて、生産の第一線に從事する勤勞者層にも、できるかぎり、享受せしめよう、かくすることによつて、彼等勤勞者層の精神鍊成、思想善導にも、健康保持乃至體位向上にも大いに役立たしめよう、

といふのが、その大きな狙ひなのである。

「歡喜力行會」の會員は、むろんドイツ勞働戰線所屬の勤勞者のほとんど全部であつて、二千數百萬人に達する。その經費は、これらの會員の會費と官廳會社方面からの寄附とで賄つてゐるのであるが、會費は高給のものほど多額で、平均月額約十四ライヒマルクだといふ。その事業はおよそ勤勞者大衆の文化生活の向上に役立つやうなものを網羅して居る。歡喜力行會本部の組織が、組織局、資金局、宣傳局の三局の外、事業關係として、スポーツ局、旅行遠足局、工場美化局、社會教育局などに分れてゐるところでもわかるやうに、その事業の主なるものは、スポーツの奬勵、勞働の餘暇を利用する他の技術の習得、休暇利用の安價なる旅行、演劇の割引見物、職業知識の向上、工場作業場の美化運動などである。

第一のスポーツの奬勵は、國民保健のための運動の大衆化といふことを目標に

して、水泳場グラウンド・體育館コート・屋内體操場などの擴張新築などに、資金・資材の許すかぎり、力をそゝぐ一方、大會社、大工場、大商館などに專用の設備をもたしめるやう、奬勵するのである。ヨットとかグライダーとかいふものに對しての、歡喜力行會の力の入れやうは、大したものであり、またゴルフの手ほどきなどもやる。とにかく、單なる記錄の競爭でなく、勤勞者のための娯樂・慰安をかねた體位の向上となるやう、注意深く考慮されてゐると聞いてゐる。

第二のは、勞働は餘暇を活用する他の技術を習得したいものに、できるかぎりの便宜を供與する、たとへば旋盤工でも無電の技術を習得するものなどさへある第三の餘暇を利用して、たとへば日曜日または休暇に、國內國外への旅行、ハイキング、キャンピングなどの催を團體的に行はしめることは、歡喜力行會の最も重要な事業の一となつて居る。國有鐵道なども、大いに協力して運賃割引をして

勤勞者各自單獨では、なか〳〵やり得ない海外旅行なども、容易に實行できるわけである。このためには有名な「ロバート・ライ」號とか「ウヰルヘルムグストロッフ」號とかいふ歡喜力行會專屬の二、三萬トンの御用船さへ用意してある。ドイツの雜誌などによく歡喜力行會一行のライン河畔ハイキングの寫眞などがでて居るが、勤勞者層の慰安と修養と保健をかねた、かうした催は、彼等の職場における能率增進を狙つてゐるのであるが、大規模にやればやるほど、國民厚生の施設としても、重要な役割をもつわけである。

第四の演劇、芝居の割引見物も、さうした意味で、歡喜力行會では、大いに力をいれてゐるらしいが、第五の工場作業場の美化運動のごときはとくに、本部に專管の局までおいて、一生懸命やつてゐる。仕事場の清潔と整頓、とくに作業場の塵埃汚物の處分、小ざつぱりした工場庭園または空閑地の設置、食堂の美化、脱

衣所洗面所休憩室、休息用綠地その他附屬設備の淸淨化、綠地に臨む明るい作業場控室の他その完備せる衛生施設など、ならべるといろ〳〵な仕事があるわけであるが、要するに仕事場に一日を送る勤勞者層、とりわけ青少年勤勞者のために、環境の美化といふことは、敎化上からも、または勤勞能率の上からも、大きな影響をもつことは、當然なのであつて、歡喜力行會の一大事業として、からしたことを、とくに、强制的にでなく、自發的に實行しやうといふ主旨なのである。「仕事場の外觀は内部の仕事の價値を表はす」とか「仕事にはまづ光線」などいふスローガンをかゝげて、本部の指導が行はれてゐるが、これは、單に勤勞者側だけに呼びかけてもだめで、工場主側にも、十分な理解が要請されてゐる。

第六の勤勞者層の職業知識の向上、ナチス的世界觀の涵養、一般知的教育の增進といふことも、歡喜力行會の重要な自治的事業の一つとなつてゐる。國民敎化

事業局といふかドイツ社會敎育局といふか、さうした一つの部局が設けられてゐて、博物館の見學、展覧會の開催、移動圖書館の設備などから、團體的に、音樂寫眞・將棋・繪畫などの敎授さへ行ひ、その他、全國數百箇所に、特別の講習會を開設して、國語、速記、美術工藝その他いろ〳〵の基本知識の敎授さへ行つてゐるのである。

× × × × ×

要するに、かうした生産職場における勤勞者（企業と勞働者とをふくむ）の組織的、理念的再建設が、現實の生産戰の遂行のためにいかに大きな役割を營みつゝあるかを、われわれは、十分に味ふべき點と思ふ。

民族力の戰爭と建設

×

總力戰を戰ひ拔く原動力は、あくまでも、國民自體にある。わけても、青少年自體のうちにある。長期戰とか、百年戰爭とかいふ言葉は、いひかへれば、青少年戰爭といふ意味となるのである。

一國の國勢を判斷せんとするには、その國の青少年をみよ、とさへいはれる。平時においても、國勢の上り坂にあるか、下り坂にあるかは、その國の青少年が質實剛健なりや、遊惰なりやで判斷される。いはんや、戰時下においては、戰爭

のあらゆる分野が、青年の力に待つこと大である。國防の第一線でも、産業戰士としても、銃後の護りにおいても、一切は、青年の活動に期待されるのだ。戰爭によつて、いや應なしに國民生活の上に齎らされる有形無形の困苦と缺乏とは、ともすれば、國民精神の上に暗い陰影を生じがちになるが、この難境によく耐へて、率先垂範、國民指導力となるものは、實に、青年の責務にほかならない。

かうした重大な責務をもつ青年が、平時から、組織的・計畫的に、よく錬成されてあればあるほど、國防力の充實となり、戰力の擴充となることは、いふまでもないことであらう。

ことに、戰爭と建設の一面の目標が、十年先、五十年先にあるかぎり、現在の少年は青年となり、青年は壯年となつて、この難事業を遂行する責務を先々と果たさねばならぬことになる。

總力戰が、必然的に民族戰爭となるのは、あきらかなことである。幼兒も、子供も、青年も老人も、年が移り、代が變つても、今後果てしなくつゞく戰爭と建設の營みに、よく耐へ、よく忍びつゝ、邁進せねばならぬ。前途の光明を期して、邁進せねばならぬ。苦しめば苦しむほど偉大な成果がうまれる。

このことたるや、まことに容易なことではない。從來のやうな自由主義・個人主義の知育本位の知育體制に委せられた青少年がかういふ重大な負荷に耐へえぬは、當然である。教育もまた、戰爭と建設に即した體制をとらねばならぬ。

國防國家體制下の教育は、單なる知識教授の教室教育だけでは、完遂されない。ナチス政府が、その國防國家建設への出發にあたつて、とくに第一にとりあげたのは、實に、青少年の國防錬成といふことであつた。久しくデモクラシーの洗禮で民族的に汚瀆されたドイツ民族を根本から再建設するのには、これをうちこ

は す强力な世界観によらねばならぬと考へたのである。

ナチス的世界観による青少年錬成こそは、ナチス・ドイツ建設の根幹である、と考へたヒトラーの施策は、あらゆる分野にこゝろみられたのであるが、とりわけわれわれに注目されるのは、ヒトラー・ユーゲントと、アルバイツディーンストとであらう。このことは、わが國にも、すでに、ひろく紹介ずみであるから、あらためて、詳しい説明もいるまいと思ふが、あらましをのべてみよう。

× ×

ドイツの子供は、男女滿六歳にして、國民學校（フォルクスシューレ）に入學することになつてゐる。就學義務は八箇年であるから、滿十四歳までが義務教育年限である。そして、滿一〇歳、すなはち第四學年になると、學校教育の外にヒ

トラー・ユーゲントに加入して、その方の教育も受けねばならない。

學校による教育と有名なヒトラー・ユーゲントによる教育とは、共にドイツ青少年を對象として併行して行はれるのである。學校による教育が、授業による知育本位であるのに對し、ヒトラー・ユーゲントによる教育は、身體鍛練の體育、政治教養の德育本位である。ドイツでは、この兩教育が、摩擦なしに併存し、相共に、幼少時よりの錬成によつてナチス國家の有用な一員たるべき國民を造成することになつてゐる。

ドイツのヒトラー・ユーゲントは、單なる民間團體でも、半官半民の團體でもなく、立派な國家の國民練成機關である。尤も、正確には、ナチス黨に所屬の組織であるが、黨と國家とは、不可分一體性であるから、學校と變りない制度性をもつてゐるのである。

すなはち、ヒトラー・ユーゲントは、一九三六年（昭和十一年）十二月一日に制定された次のやうなヒトラー・ユーゲント令に基いた國家制度なのである。

第一條　ドイツ領土内ニ居住スルドイツ青少年ハ、スベテ、ヒトラー・ユーゲントニ之ヲ編入スルモノトス

第二條　ドイツ青少年ハ、スベテ、家庭竝ニ學校ニ在リテハ、ヒトラー・ユーゲントニ於テ、肉體的・精神的・道德的部門ニ亘リ、ナチス精神ニ基キテ民族竝ニ民族協同體ヘノ奉仕ヲ目標トスル教育ヲ受クベキモノトス

第三條　ヒトラー・ユーゲントニ於ケル全ドイツ青少年ノ教育使命ハ、ナチス黨ノドイツ青少年統監ニ之ヲ委任ス。仍テ、ドイツ青少年統監ハ、ドイツ國青少年統監トシテ、ベルリンニ在住シ、ドイツ最高官廳ノ地位ヲ占メ、總統ニ直屬スルモノトス

第四條　本法ノ施行竝ニ補充ニ必要ナル細則及ビ一般行政規程ハ、總統之ヲ定ム

現在のヒトラー・ユーゲントは、かうした法令の根據をもつ國家制度化してゐるが、むろん、すべての他の運動と同樣、青少年運動がかくまで發展するにいたるまでには、短かゝらぬ沿革をもつてゐるのである。こゝでは、くはしく述べる餘裕もないが。

ヒトラー・ユーゲントと一概にいふが、男女、年齡の違ひで、組織の名稱にも、差異がある。簡單に、その組織編成をのべて、參考に供すると、男子のヒトラー・ユーゲンドは、滿十歲から十八歲までであるが、十歲から一四歲までをユング・フォルク（少國民）として編成し、十四歲（國民學校終了）から十八歲までを狹義のヒトラー・ユーゲントとして編成する。編成單位は、最少團員十五名

以内で編成する同志隊（カメラードシャフト）と幼年隊（ユングシャフト）から順次上の方にピラミット型につみあげる。

女子のヒトラー・ユーゲントも、同じやうに最小單位を十五名以內の少女隊（メーデルシャフト）幼女隊（ユングメーデルシャフト）からはじまる。たゞし、少女隊の方は、十四歳から二十一歳までとなつてゐる。

ドイツ全國の男女青少年は、その性別、年齢別に應じて、かならず、そのいづれかの隊に席をおくことになるのである。

十五名以內で編成された最小單位は、いづれの場合でも、三個集つて、五十名以內で、同志隊は群團（シャー）を、幼年隊は、幼年團（ユンクツーク）を、少女隊は少女群（メーデルシャー）を、幼女隊は幼女群（ユングメーデルシャール）を編成する。といふ工合に、順次に上にむかつて、整然たる隊組織をもつて構成

されるのである。

組織は組織として、しからば、ヒトラーユーゲントの任務は、どんなことにあるのか。

一九三三年(昭和八年)の九月二日にニュールンベルグに開かれた恒例のナチス黨全國大會で、ヒトラーは、大會に參加したヒトラー・ユーゲントに向つて、つぎのやうな演説をした。

わがドイツ青少年諸君！　諸君は、未來のドイツである。諸君は、われらがかつて將來のドイツに期待したことを學ばねばならない。諸君は、まだ若いし、人世の相背馳する樣々な影響といふものを體驗してゐない。諸君は、將來決して相互に離反することがないやうに、がつちりと團結しなければならないのだ。諸君の若き胸に、獨斷や、不遜や貧富の階級的思想や差別感が萠してはならぬ。諸君は、

諸君がもつてゐる友情や團結の偉大なる感情を確保してゐなければならない。諸君が、もし、それを放棄しようとさへしなければ、何人といへども、それを諸君から奪ひとることもできないであらうし、そのときこそ、はじめて、諸君は、ドイツ青少年として、われらの大なる希望、わが國民の信頼、信仰として、現在さうである様に、がつちりと腕を組んだ一つの國民となるであらう。

諸君は、偉大にならうとする國民が必要とする諸徳を涵養しなければならぬ。諸君は、忠實であり、潑溂とし、果敢でなければならぬ。そして、それがためには、諸君は、唯一の、偉大にして堂々たる團體を組織しなければならないのだ。しかるとき、わが國民の生命のために拂はねばならなかつたし、現在まで拂はれてきた過去のすべての犧牲は、無駄ではなく、これらすべての犧牲の中から、遂に、漸く、わが國民の生命の幸福なる發展が實現せられるにいたるであらう。

親愛なる青少年諸君！　諸君らは、ドイツの生きた保證人であり、將來の生きたドイツである。空虚な概念、蒼ざめた命題ではなく、諸君はわれわれらの血の血、われらの肉の肉、われらの精神中の精神であり、わが國民の永續する生命なのである！………」

ヒトラー・ユーゲントのもつナチス的使命は、このヒトラーの情熱的な演說で盡きてゐるのである。

要するに、長き建設の前途を考へるとき、將來の重責を擔ふものは青少年であり、これらの青少年が年經て、眞のドイツの成年となれる曉において、その負荷された重責に堪えるがためには、若いうちから十分に練成しておかねばならぬ。青少年の肉體と精神とを組織的に鍛へあげられるならば、まづ、國防國家體制の大半は確立できたやうなものである。ヒトラーはさう考へたのである。

だから、ヒトラー・ユーゲントの活動分野の中心をなすものは、第一に、學校教育と併行して、ナチス・ドイツ國民としての國民教育の徹底を期することであるが、第二に、青少年の保健と體位の向上といふことがより重要視されるのである。或は週に一度、水曜日の夜集會して行はれる青少年塾の夕において、團員同志の團體意識を昂揚したり、或は土曜日曜を利用して、大自然の中に野營生活を行つて、共同生活の体験を重ねたり、或は實際生活に即した社會事業、例へば資源回收事業などに從事して、直接、國家社會に寄與したり、その他、ヒトラー・ユーゲントの營む事業は無數にあるわけであるが、いづれにしても、その眼目は、大ドイツ國の將來を擔ふ青少年の國防錬成の一段階と考ふべきものである。それは、學校在學中のもののために、なるべく授業に差支へぬやうな考慮されたり、實務に就いてゐるもののために、なるべく、その餘暇を活用するやう考慮されたりして

ゐるのは、ヒトラー・ユーゲントのもつ全體的意義から考へ當然のことである。

國防經濟の進展に伴ひ、ことに戰時經濟ともなれば、殷賑産業分野に織りこまれた産業青少年のうちから、いろ〳〵不良化問題が起つてくるものであるが、もし、このヒトラー・ユーゲント式組織を通じ、彼等の就業時間外の餘暇が適當に善用され、單に嚴格な軍隊的訓練の下に固い修練のみを重ねることなく、とくに青少年の樂しい團欒を中心として組織された自發的青少年團體たる特質をもつヒトラー・ユーゲントのやうな國家的組織の中に織りこまれて修練されるならば、おそらく、不良少年問題の發生のごときは、よほどすくなくなりはすまいか。

われわれは、いま、ヒトラー・ユーゲントのことについて、もつといろ〳〵のべてみたいのであるが、紙數の都合もあり、さうもゆかない。日本のナチス文献のうちにも、ヒトラー・ユーゲントの紹介は多數みられるから、さうしたものに

ついて、他山の石を拾ふことができるであらう。

たゞ、われわれ、ドイツのヒトラー・ユーゲントについてみる場合、とくに興味をおぼえるのは、これらの青少年運動が、もつぱら、青少年の手によつて、運營されてゐるといふことである。全國八百萬の團員を統率する中央の最高指揮者は、今年（昭和十七年）とつて、わづかに三十五才のシーラッハ氏であり、文字通りの青年なのである。その他本部の局長クラスは、すべて、三十才前後の若者ばかりで占めてゐるといふのである。青年を知るものは、青年である。シーラッハ自身逸材であることは疑ひなからうが、これらの若者たちに、よく全權を委ねてゐるヒトラーの腹のある方針も大に感心させられるのである。

× × ×

ヒトラー・ユーゲントにつゞく青少年國民錬成の段階は、あの有名なアルバイツディーンスト（勞働奉仕）である。一概に、勞働奉仕といつても、日本で行はれてゐる臨時應急的且つ自由意志による行事と異り、常設の國家組織で義務的に行はれる國民錬成である。

滿十八才でヒトラー・ユーゲントによる錬成を終へたドイツ青少年は、ひきつゞいて、ドイツ勞働奉仕團に入團して、半ヶ年の勞働奉仕勤務に服し、その方の錬成をうけることになる。勞働奉仕團への入團は、毎年二度、四月一日と十月一日に行はれる。四月一日から九月三十日までは、半ヶ年夏季奉仕、十月一日から翌年三月三十一日までの半ヶ年は冬季奉仕である。

ドイツで、この勞働奉仕制度を本格的な國家制度として採用し、ドイツ青年のすべてに一律に義務制をとるやうにしたのは、一九三五年（昭和十年）からで、

それまでは、自由志願制として、とくにナチス在野黨時代から相當廣範圍に實施されてきたものである。

俗に「シャベルの軍隊」といふ名稱でもよばれるやうに、この半ヶ年間の勞働奉仕團の組織・活動・編制・規律・生活その他一切が、軍隊と同じ要領で行はれる。たゞ銃の代りにシャベルをもつといふだけで、ドイツ青年の勞働奉仕に對する心構へは、國防軍に對すると大差ないのであり、それは、いはゞ軍隊生活に入る前の準備であり、豫行である。軍隊生活は、固有の國防訓練を主眼とし、もつぱら戰鬪訓練に重點をおくのに對し、勞働奉働生活は、廣義の國防目的に奉仕する、ナチス的世界觀の敎育、ナチス政治敎育の實踐による國民錬成段階であるといふ違ひがある。しかも、その沿革、發展史をみるとわかるやうに、その起りは、ゲルマン民族運動の一翼として、大戰後とくに盛んとなつた青少年運動にあるの

であつて、いちはやく民族的青年運動のナチス國防國家建設上もつ重要な意義を察知したヒトラーによつて、在野時代から助成をうけて發達し、その將來性を約束されたものである。

ドイツの勞働奉仕制度は、一九三五年（昭和十年）六月二十七日附の法律によつて、はじめて義務制として施行されたのであるが、その法律の第一條に、

一、ドイツ國勞働奉仕ハ、ドイツ民族ヘノ名譽奉仕タルベキモノトス

二、全男女青年ハ、勞働奉仕ヲ行フコトニ依リテ、ソノ民族ニ奉仕ヲ爲スノ義務ヲ有ス

三、ドイツ國勞働奉仕ハ、ナチス世界觀ニ基キ、ドイツ男女青年ヲ民族協同體並ニ眞ノ勞働觀念、特ニ肉體勞働ノ正當ナル尊重ヘノ教育ヲナスベキモノトス

四、ドイツ國勞働奉仕ハ、公益的活動ノ遂行ニ之ヲ特定ス

といふことが書いてある。

これによつても明かなやうに、ドイツの勞働奉仕制施行の本旨はドイツ民族への名譽奉仕であり、ナチス國家の精神に基き、ドイツ男女青年に對して民族協同體並に眞の勤勞精神を涵養し、とくに肉體勞働を尊重するやうな實際敎育を施すといふに在るのである。

いひかへれば、ナチスは、ドイツの全青年をこの奉仕團で組織的計畫的に半ヶ年間鍊成することによつて、青年がナチス國家建設といふことを自らの責務として自覺することを狙ひとしたのである。とくに青年の民族意識に目覺めた血と土との中より生れ出た內在的な義務感情として伸ばして行くことを勞働奉仕の根本の使命としたのである。

實際に從事する作業も、公益的事業一本槍である。個人事業では採算が合はぬといふので抛り出してあるもので、實際は國家公益のため、どうしてもやらねばならぬやうな祖國土地開發事業などが主要な仕事をなすのである。不毛地・濕地・沼澤地などの開拓事業・土木事業がとくに行はれる。これには、單に祖國の國土開發といふ狙ひの外に、食糧增產によるドイツ國民經濟の自給自足といふ狙ひをもつたものであることは、いふまでもないであらう。

要するに、勞働奉仕制度は、ナチス・ドイツの公民敎育の實踐道場に外ならない。祖國開發といふ共同目標の下に、身分・地位・職業の別なく、それこそインテリも農民も職工もひとしく、ドイツ國土に生きるドイツ民族として、血と土との繫りを體得し、そして忠實・服從・友愛の諸德を身につけ、後日、ナチス國家のために、情熱をもつて、職分奉公する人材を錬成する制度なのであつて、遠大な

建設計畫として、かうした勞働奉仕制度のごときものをいちはやく國家制度としてとりあげたことは、國情とはいひながら、その英斷と遠慮とにおいて、われわれに示唆するところ大であるやうに思ふ。

これ、とくに、「戰爭と建設」といふ面から、民族力の徹底的動員といふことを考へるときに、はなはだ興味あるやり方であるやうに思ふのである。

生活の戰爭と建設

×

近代總力戰の極致は、「生活戰」といふことに盡きる。總力戰たる近代戰はいやでも應でも、國民の生活戰といふところまで突きいつてくるのであつて、この生活戰の勝敗もまた、近代戰を左右するのである。

これは、まことに、われわれのなににもまして心すべき重要事である。

生活戰とはなにか。

それは、總力戰の遂行といふことから必然的に起つてくゐ國民生活上の變化に

いちはやく順應し、新しい戰時生活にきりかへて、戰爭が何年つゞかうと絶對に搖がぬ　活精神を確立するための民族的努力によるたゝかひのことである。この生活戰的努力を怠る國は、總力戰の敗者であり、しからざるもののみ、總力戰の勝者となり得るのである。

　むろん、一たび戰爭開始となつてからあわてて生活戰を遂行しようとおもつても、なか〳〵もつて困難な仕事である。近代總力戰における一切の戰爭態勢がさうであるやうに、戰爭と同時に、スウヰツチをいれて、すぐ戰時生活に切換へ、生活戰を遂行するといふわけには、なか〳〵行かないのである。

　總力戰の完遂には、完遂するだけの準備が要るのである。準備は、建設である。生活戰爭のための建設が要るのである。そして、武力戰の開始と同時に、その準備し、建設された、生活戰爭も、また本格化されるのであるが、現實の戰爭は、さ

らにまた、より高度の生活建設を要求することにもなるのである。

いはんや、戰爭前に、そのためのなんらの生活建設もなさなかのた國が、どうしても戰爭に敗れまいとすれば、いや應なしに、生活戰爭を遂行しつつ、生活建設を遂行し、おほらかな覺悟をもつて大きな變動と革新を體驗せねばならないのである。

生活戰爭と生活建設とは、國民生活のほとんど全面を對象とする。單に、物的な衣と食と住とのみでなく、それらの綜合としての生活力も對象となるのであり、衣生活と食生活と住生活と、そして、生活意力とを總力戰遂行に適應せしめることが、生活戰爭に勝つための生活建設の要諦である、といふことにならう。

フランスはなぜ敗れたか。

アンドレーモーロアは、きはめてハッキリと答へてゐる。フランスは、とくに

生活建設に立ち遲れ、生活戰爭に敗れたからであると。

大政翼賛會の菅沼醫學博士が、「必勝の生活戰」といふ小册子の中に、グラングロアールといふフランス新聞から興味ふかい話を引用して居られる。それは、敗戰國フランスの商人が、敗戰前の一九四〇年（昭和十五年）一月の銃後において、いかに、腐敗した闇取引根性の根強いことであつたか、といふ事實の一端を報道したものである。

生活戰の完遂、戰時生活の確立のためのわれわれの恰好な反省材料として、こゝに拜借して、よんでみよう。——

フランスでは、開戰と同時に、「戰爭を金儲けの道具にするな」、「戰爭成金を作らすな」といふ運動が起つてゐた。しかし、こんな標語も運動も、ある種類の商人に對しては效果がなかつた。物資の出廻りの澁滯・闇値の横行・粗惡物資の

氾濫が、市民の生活を脅かしはじめた。そこで、勞働者や會社員、官吏などの細君たちから成り立つたフランス隣組の價格監視委員ができて、不良商人の摘發にのりだし、物價騰貴による生活不安や、これにつけこむ敵性第五部隊の暗躍の源を根絶しようとつとめたのであつた。そして、この委員たちに摘發された商人が、パリーのヌイイ裁判所で、裁判されたのであつた。

その一。四十ぐらゐの乾物商の男は、チーズと麥粉の公價違反で法廷に立つたのであつた。始終口の中で、「これはひどい、これはひどい」と、ぶつ〳〵いつてゐた。

裁判長――被告は、チーズと麥粉を普通の市價の二倍近くで賣つてゐたわけだナ。

乾物屋の男――それは、仕入れ價格を高くしないと、品物が集まらないので、

どうしても、賣値をあのやうにしないわけにはいかなかつたのです。私は、店の得意に不自由させまいとしてやつたゞけです。

裁判長――さうか、被告の商業的才能には若干疑問をさしはさむ餘地がある、他の店では、普通の通りチーズを仕入れて普通の價格で販賣してゐるのに、被告の店だけがさうできないといふのだからネ。またそんな風に仕入れ値段の吊りあげをやつたら、自然、他の店にも影響をあたへずにはゐないわけだナ。被告は、いまわれわれは、どんな時期にあるか、知つてゐるのかネ。

乾物屋の男――私は愛國者です。愛國聯盟の特別メンバーです。

裁判長――だがこの請書によると、仕入値段が高かつたといふ被告のいひ分はなりたゝないやうだネ。被告は前からのストック品まで、闇値で捌いてゐたやうではないか。……被告にとつては、百の愛國聯盟の特別メンバーになる

より、公價で物を賣るやうに努める方が、ずつと愛國的だつたはづではなかつたのか。

その二。製藥所長が、粗惡不良の藥品の販賣で、法廷の人となつた。普通八、九割であるべき有效成分の含有量が、わづかに五分にすぎなかつたといふ惡辣ぶりであつた。

製藥所長——私は、なにも法律に觸れるやうなことは、やつてをらんのです。價格は前の通りです。

裁判長——被告は、値段さへ變へねば、中味はどうでもよいと思つてゐるのかネ。例へば、重曹をキニーネや止血劑の値で賣つてよいと思つてゐるのかネ。

製藥所長——私の店の品物は、良い品にちがひありません。軍におさめても、そのまゝ通るのですから。

そのやうなインチキ藥品が、戰線に送られてゐるといふことが、傍聽席を竦然とさした。

裁判長——被告は、すでに、十年フランスに住み、その間に財産をつくつてゐる。しかも、被告は、フランスに負うてゐるものを、この非常時を利用して何で報いようとしてゐるのか。……もし、フランスの敵が、製品商に手を廻して工作する場合、それは血の止らない止血藥、消毒しない消毒藥、下熱しない解熱藥を前線に送ることだ。負傷した同胞の回復はおくれ、できる快癒もできなくなるかもしれないのだ。そして、それだけフランスの抗戰力は弱まるのだ。被告のやつたことは、まさしくこのやうな第五列的行爲ではないか。……それは、誰の眼から見ても、きはめて反國家的な行爲だ。また、そんな行爲の共謀者であることを潔しとしないで、被告の工場の職工長が、

被告を告發したのも、實にもつとものことである。

製藥所長——あれは、恩知らずです。私は、できるだけの良い給料をやつてゐたのです。

裁判長——彼は、フランス人なのだ。そして、フランス人として祖國に對する責務を果しただけである。

その三。青物行商の老婆が、法廷に立つて、泣きながら、

私の家で、こんな恥かしい目にあつたのは、私がはじめてゞございます。この二百三十フランの紙幣と銀貨とが、野菜を高く賣つて、一箇月の間に餘計に儲けたお金です。これは、お返しします。なんでこんな恥かしい目にあふやうなことをする氣になつたかわかりません。どうぞ今度だけは、お許しください。國のためにならんことをしたとは、知らなかつたのですから、もう二度とやる

ことではございません。
この老婆に對する裁判長の訊問は、きはめて簡單であつた。そのとき、突然、製藥所長は立ちあがつて、
私は、軍に二十萬フラン献金したことを忘れずにおいてください。
とつけ加へたが、裁判長は、無言であつた。
老婆は、微罪不起訴となり、乾物屋と製藥所長は、おのおの二千フランの罰金が、いひ渡された。
裁判長は、もつと重刑を望んだのであつたが、それには、新しい法律が必要であつた。そこで彼は、ナポレオン時代の法律まで研究したうへ、附加刑として、店頭の人目につき易い場所に、「不正商人の店」といふ大きな貼紙を一箇月間貼り出しておくことを命じたのであつた。

まことに、興味ぶかい話ではないか。大きな「他山の石」ではないか。

われわれは、あくまでも、勝ち拔かねばならぬ。生活戰に勝ち拔き、總力戰に勝ち拔くためには、不平もやめねばならぬ、不滿もよさねばならぬ、そして、つねに勝利への希望に眼を輝かし、胸をふくらましつゝ、おのが生活の周圍をみ直し、一切を戰爭意識の上から反省し、建て直し、みづからの職域にはげみつゞけねばならないのである。

武力戰の戰士は、戰線の兵士のみかもしれないが、生活戰の戰士は、まさしく銃後一切の國民である。

一人一人の國民が事務をとるものも生產に從ふものも、男も女も、老ひも若きも、富めるも貧しきも、知識層も無知識層も、ひとしく、その日々の生活に、戰ひつゞけてゐるのだ、とのつよい意識をもつて、魂を躍動させつゞける。そこに

こそ、生活戰の勝利は、輝くのであり、總力戰を勝ち拔く要諦は、そこにあるのである。

× ×

大戰後の十餘年の苦難時代を經、ナチス六箇年の忍苦時代を經て、第二次大戰の檜舞臺にふたゝび、その勇姿を現すにいたつたドイツの復興は、たしかに、二〇世紀初頭における世界の一大驚異だといふことができるであらう。

今度の第二次大戰にのぞんだドイツのその立ち上りにおけるあまりにも鮮かな戰爭振りに目をみはり、ドイツはなぜかくも强いか、と反省し、結局、これをナチス執政以來のあらゆる富國强兵施策、ヒトラーの巧妙な指導、その指導體制の完備とに歸した。それも、たしかに、有力な一面である。私も、機會あるたびに、

このことを强調もしてきたのであり、かつかたくこれを信ずるものである。しかし、われわれは、かうした表面の事相に即して物を考へるとともに、さらに、その裏面の、生活實體、生活地盤なるものにも當然考へ及ばなければならぬそである。すなはち、ドイツ國民自體の大戰敗北以來における苦難時代の血の出るやうな忍苦の體驗はほとんど國家として最下底のドン底まで墮し下つた慘ましい境遇のうちにも、なほ民族特有の理想主義をすてず、理念的甦生の機運を逃さず、ついに見事に起ち上つたドイツ民族自體の民族精神の問題である。いはゞ、ナチス・ドイツの甦生建設は、かくのごとき欝物たる甦生復興の氣構へに燃えるドイツ民族が、不世出の熱血漢アドルフ・ヒトラーの政治的指導を得て、みごとなる起ち上りを具現したまでのことであるといつてもいいのである。いひかへれば、問題の核心はドイツ魂であり、ドイツ精神であり、ドイツ人氣質である。魂の入らぬ仕

事は無駄仕事に終る。ナチス・ドイツの建設は艱難汝を玉にするといふ天の攝理にほかならないのだ、とナチスの指導者は、よくいつてゐる、がわれわれとしても深く味はねばならぬことである。

× × ×

ドイツ人の氣質、ドイツ精神といいつたことは、からした意味で、わが國の心ある人によつていちはやくとりあげられて居ることは、喜ばしいことである。さしあたり私の目にとまつたものでも、たとへば、書物の紹介になるが、村上湖磨雄氏著「ドイツ精神」(昭和十三年)とか、蘆谷瑞世氏著「獨逸人氣質」(昭和十五年)とか、森崎善一氏著「學べ!!獨逸國民生活」(昭和十五年) とかいつた手頃な勞作がある。

われわれは、ドイツの甦生、ドイツの强さドイツの建設のかげに、大きな要素をなしてゐる、かうした精神・氣質・魂と、民族性ならないものをいつもみ落してはならないものだと思ふ。

さきにあげた本の中から、二三の話をひろひだして考へてみよう。志のある方は、ぜひ直接かうした書物を手にされドイツ精神を知り、ナチスドイツの生活建設の根本を理解すべきである。

たとへば、ドイツ人の勤儉貯蓄心のつよいことなど有名である。

ドイツ人の勤儉貯蓄精神について、森崎氏は、かういふ話を書いてゐる。——

ある人ドイツへ旅行して、或る下宿へ世話になつた。ところがその人は三箇月目のある日、急に豫定を變更して、ベルリンを去らなければならなかつた。

そこで、下宿のおばさんに、「明日の午後出發いたします」と話したところ、下宿のおばさんは、二人がかりで、明後日にしてくれ、と抗議を出した、といふのである。

そのわけをたづねてみると、かうである。

「いま、あなたの靴下二足、それにワイシャツ二枚を修理して洗濯中であるが、明日では乾かぬので、ぜひ明後日に願ひたい」といふのであつた。

ところが、靴下は踵の箇所に穴のあいたもの、ワイシャツは襟首のところが破れてゐたので、實は、その人がそれを塵箱へ捨てたのであつた。それで、「あれは破れたから捨てたのです」と話したが、「捨てる」といふことが、どうも通じないらしい。言葉がわからないのではなくて、そんなものを捨てるといふことが、判斷できなかつたのである。

まだ修繕すれば、立派に用ひられるものは、絶對に捨てることをしないドイツ人であるからである。

いくら話してもその意味がわからず、ぜひとも一日豫定を延ばして持つて歸る様にすゝめる。しかし友人は、どうしても出發しなければならないために、何としても明日歸ると頑張つたところ、下宿のおばさんは、「それでは、船へ送つてあげませう」といつて漸く得心（とくしん）した。船がナポリに着くと、そこにチヤンと洗濯した靴下とワイシヤツが、小包で屆いて居たといふことである。

そして、小包の中の手紙には、「下手ながら破れた箇所は修繕してある、まだ〳〵着られるからこれを着用する様に」と、注意書きがしてあつたといふ。この手紙を讀んでその人は、思はず眼頭が熱くなつたとのことである。だから、ドイツの婦人は、おめかしや贅澤な着物を着ないばかりではなくて、「捨てることを

知らない」ほどに、廢物を利用して支出を少くするのである。

さうして得た收入は、かならず、豫定額を毎月間違ひなく、貯蓄するのである。或は政府の賣出す國債や、都市の公債や、地方の公債を買つては、少しでも自分が國家のためになつたことを喜ぶのである。

ドイツは一九一八年戰ひが止んでから、六年目の一九二四年に漸くマルクの安定をみたが、それから各國に賴んで、國債を募集した。苦しい場合であるから、無理な條件も承知しなければならなかつた。すなはち、一九二四年四月一日にレンテン銀行から借入金を始めとし、ドーズ外債、ヤング公債、クロイガー借欵、レンイノルド公債、ヒルファーディング公債などがあり、今日迄實に百回近くの公債を發行し、一九三三年の如きは、二十數回の內外債が募集せられた。

專門家は、ドイツは果たして、あれだけの公債を發行して、これをよく消化し

得るか、と心配してゐたが、とにかくにも現在のドイツが現出し、經濟的に何不安なく國内の自給自足ができてゐるのである。これは、ひとしく國民が、國家のために協力して公債を買ひ、或は貯蓄を勵行したからである。（前掲著二六二頁以下）。

森崎氏の本にはまた「ドイツ人と石炭」といふ話がある。

ドイツの船員が本船にかへるとき、道に落ちてゐた拳大の石炭を三つ拾ひ、これを本船にもつて歸つた。

戰後、石炭に窮乏したドイツでは、寒中、學校を休校しなければならなかつたといふ。又、當時焚くものがなくて、寒さに凍死したものも相當あつたほどに、深刻に石炭の大切なことを味つたのである。汽鑵を焚く場合でも、鑵の焚き方をよく心得てゐて、決して一度に多量に多量の石炭を入れない。面倒でも少量づゝ

れるのである。又石炭の有效に燃える方法を心得てゐて、石炭の入れ方を加減する。從つて、全部の石炭が、完全に燃えることを工夫し、僅かな石炭をもつて、多くの熱量を出すことを忘れない。だから、一度に澤山の石炭を入れて、燻ゆらせたり、灰を出してみたら燃ゑ殘りの石炭が澤山あつたといふ樣なことは、まづ、ドイツ人にはみられない。これは、至極當然のことの樣であるが、仲々出來ないものである。自宅で焚く風呂一つにしても、これは容易でない（前掲一五四頁。）この「ドイツ人と石炭」の話の中に、ドイツ國の、資源愛護精神がよく現れてゐる。

また、ドイツ人の科學研究心の旺盛、單なる「旺盛」では說明のつかぬほど、日常生活の實際が突詰めた科學的硏究的に合理化されてゐるといふ話を一つ拾つてみよう。「民衆と科學」といふ話である。

民衆の生活と、科學とが、しつくりと結びついてゐる點は、美しいばかりである。勿論迷信といふ樣なことも、絶無とはいへないにしても、進歩せる學問の努力の前には、到底その力を、維持して行くことのできないのは、いふまでもない話である。

電氣やガスのメートルが、完全に讀みこなせる家庭は、案外すくないといふ話を、その道の人から聞かされてゐた著者は、ドイツに行つてみて、まづ驚かされたことは小學生あたりが、チャーンとそれを讀みとつて、料金の計算をやつてゐることである。日本の高等女學校卒業の新夫人の中にもどうかすると、かうした點では、ドイツ小學生に及ばない樣な人も、かならずしも、無いとばかりも、いへないかもしれないのではあるまいか。電氣に故障が起るとすぐ家內用の梯(はしご)をかけて、壁面に沿ふて走る、コードの檢査を試みるのが、小學卒業の主婦である。ガス混爐

一つ眺めてみても、おそろしく合理的にできてゐる樣であるが、それを朝夕使ひこなすのが、實業補習學校生徒なる、女中である。卵の半熟を、と請へば、幾分間にしようかと尋ねられる。幾分間煮沸した程度の熱度を欲するかといふのである。風呂を少し熱くしてくれ、と賴むと、幾度にしようかと、反問される。これではまるで、當分は、手も足もでない日本人ではあるまいか。

衞生思想の普及してゐることも、勿論いふまでもない話である。豫防消毒の知識も、相當によく行きわたつてゐる。帶狀丹毒の疑で、G大學の附屬病院の傳染病室に、一週間ばかり收容されたとき、そのまた一段奧まつた地域に、建てられてゐる病棟を、何の爲のものかと聞いたら、あれはコレラとペストとの爲の、隔離病舍であるが、三十幾年間今迄一度も、使はれないまゝで居るとのことであつた。ドイツで、街上を通つて、とくに眼を惹くのは、不具者の多いことである。

脚の曲つたもの、片足が前後反對についてゐるものなどが、杖をたよりに歩いてゐる。松葉杖を挾んでゐるもの、躄車に乗せられてゐるもの、散歩にでかけてゐるものなど、種類もかなり多いのである。聞くところによると、整形外科學の進歩のおかげで、他の國では、到底助からない様な、重症患者でも、ドイツでは、大抵救はれる結果だといふ。ありさうな話である。左腕に黄色の布を捲きつけ、その布の上に、渡邊家の紋所の、横棒がないといつた風の、黒丸三つをつけてゐる連中を、時々見かけることがある。盲聾啞者で、街の交通機關に、注意を促すための腕章だといふ。よい思ひつきだと考へるのである。

「臭くない便所と、燒けない家」これを日本も持たなくてはならないとは、入獨當初から、私の痛切に感じたところである、全くのところ、どんな僻邑に行つてみても、大抵水道の設備あり、そしてまた、水道の設備のある村には、きつ

と、水洗式の便所が設けられてゐる。便所が臭くなくなるといふことは、たゞに便所の所に止る問題ではなく、實は、人間生活の全範圍に影響する問題である。傳染病の傳播蔓延なども、臭い便所に由來するところが、與つて大であらうと思ふのである。多額の防疫費なども、節約せられるにいたることは、いふまでもないことである。さらにまた、排泄物の科學的處理のおかげで、肥料問題なども、一層合理的に、解決せられるにいたるであらうと、思ふのである。もしそれ、無臭便所の、人間精神作用上に及ぼす効果いたつては、實に無形ながら、甚大なるものがあるであらうと、考へるのである。大便所と洗面所と風呂場とが、同一室内にあると聞いたら、日本では、それこそ、鼻持ちもならない話とされるであらうが、事實ドイツでは、いくらもみかける例である。

ツエッペリン飛行船による大空の支配、空中窒素の肥料化、石炭液化、さては

また、泥苦から纎維を作る工夫にいたるまで、科學を人生の利用厚生に轉用する企は、いよ〳〵出でていよ〳〵盛なる、ドイツ國のことである。その將來の發達は、實に凄まじいものがあることを、今日すでに豫想することが、できるのである。國民生活の實際と、科學の利用は、ます〳〵、その提携を緊密にして來つゝある。農耕の業のごときも、盛んに科學と機械力とで、舊來の面目が、一新せられつゝある現狀を目して、驚異措くあたはざるものがあるのである。——

これは、村上氏の書いてゐる一節である（前掲著一五八頁以下）。氏は、その外のいろ〳〵な方面におけるドイツ精神のありのまゝの姿をひろく具體的に示してゐる。

ドイツ國民性には、やはり、どこかえらい特色があり、すぐれた特性があるからこそ、今日のごとき立派な國に甦生し得たのであらう。その精神なり、魂なり

が、すでに臭りきつて、民族的な伸びを失ひ、反撥かへす力をなくしたのであつたなら、ヒトラーやゲーリングやゲッペルスがいくら大聲で叱咤し、指導してもなか〳〵上へは動かぬはづである。むしろ、大戰後の極度の疲弊時代に、どこかの國に身賣りしてしまつて、跡形もなくなつてゐたはづである。

要は、民族の精神に在る。この根本の精神にして、まだ救ひ得るうちに救ひえたドイツは幸運であつたまでのことである。實際、大戰直後の國內赤化期からやつと社會民主々義の程度に脫却しえた敗戰國ドイツのことであつたから、せつかくのドイツ精神も、あはや、ユダヤ思想、共產思想の好餌になり終るばかりであつたのである。これをとにもかくにも十餘年もちこたへ、ヒトラーの出現をまつて、巧みに甦生し、もとの自由と富强をとりもどしたのも、ドイツ民族のもつ一つの大きな底力、ドイツ魂のためと考へねばならないのである。

しかし、かうした大和魂にも似たドイツ魂がドイツ國民のなかに宿つてゐるにしても、そのまゝでは、やはり、ドイツ民族の根強さといふものでとゞまつてゐるだけである。ドイツ國家の建設を荷負ふ國民精神的鍊成といふものがなければいかぬ。その證據に、支那民族といふものも、あれでなか／＼優秀な、侮るべからざる特性をもつた民族なのだが、支那國建設のための國民精神的鍊成をうけないから、いつまでたつても、強大な自由な國家に成育し得ない。たま／＼蔣介石といふ指導者をあたへられ、やゝその緒についた感があつたにもかゝはらず、指導者自體の近視眼的施策にあやまられて、惜くも、中絶してしまつてゐる。といふ、大事實が、われわれの眼の前にあるのである。

×　×　×　×

支那とドイツとの比較は、かならずしも、妥當でないかもしれないが、要するに、すぐれた民族性をもつドイツ民族が、ヒトラーといふ優秀な指導者の下に、一意專心錬成をつゞけた結果が、宿敵フランスを二週間で屠るといふ驚異的戰果をあげるまでの强大國に甦生したといふことだけでもわれわれ生活戰士の絶好の反省資料に違ひない。

ヒトラーは、ドイツ民族のもつ長所短所を熱知し、これによく合致したような有形無形の指導方策を實際に移したまでのことであらう、ナチスの建設において、ドイツ國民の國家精神的錬成はその第一の重要さをあたへられてゐる。前大戰に武力戰に勝ちながら、精神戰・思想戰に負けて、敗北の憂き目をみた體驗は、ヒトラーをして、なにをおいても、あらゆる施策の裏づけとして、ナチス國防國家建設への方向においたドイツ精神生活の昂揚を忘れしめなかつたのである。

われわれの誓ひ

×

まことに、昭和十六年（一九四一年）の十二月八日は、皇國の「戰爭と建設」の歴史において、未曾有の重大意義を有するる。世界の歴史も永久に、この日を記念するであらう。「米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス」と嚴かに大詔の煥發せられ給ふたこの日、われわれ日本人であるかぎり、男も女も、老ひも若きも、ひとしく純一無雜の「日本人的感激」に打たれなかつたものは、ただの一人も無かつたはづである。多感な愛國歌人たちは、ひとしくこの日の感激を詠んでゐる。

おほみことつひにくだりぬかむつるぎ
　つひにくだりぬ醜がかうべに　（相馬氏）

祖先の幾代の血潮みなぎれる
　皇民一億起たざらめやも　（逗子氏）

撰ばれし國のみ民とえらばれて
　今日たづさはる神大御業　（齋藤氏）

此の國の惠に生まれて吾等あり
　垣とも立ちて永遠に護らむ　（土屋氏）

そしてかの、愛國詩人野口米次郎氏のごときは、この日本人的感激をつぎのやうな雄渾な詩につづつて居られる。

一翼布哇を撃ち、
他翼マレーを斃す、
大鵬か、否ないな、日本魂、
羽下に世界三分の二を納め、
洋上千餘の島嶼、杯を開いて、
皇徳の美酒を受けんとす、
畏きかな、妖雲影を失ひ、
天日燦然たらんとす、
我等肇國の神勅に聞く、
「大人の制（のり）を立つる、義（ことわり）必ず時に隨ふ、
苟も民に利（さち）あらば、何ぞ聖造（ひじりのわざ）に妨（たが）はむ」と、

この言ありてより二千六百年、
何ぞ眞理の行はる之れ遲きや、
他を奪はず自ら分を守る、これ道なり、
天皇、暴戾搾取の國家に退けと命じ給ふ、
肯んじざるに於て、劍の審判に服せよと命じ給ふ、
これ八紘爲宇の遺訓に則り、
地に平和の慈雨あらしめ給ふ叡慮なり、
われに神護あり、正しきを賞みし給ふ、
われに決意あり、顯正の死を迎ふ、
腰間の秋水、叫んで止まず、
「民族維新の黎明だ、

起て、往け、
使命に殉ぜよ！」
われわれは、あの日以來、かうした愛國的詩歌のかず〲によつて、いかに、魂をゆりうごかされることであらう。そして「戰爭と建設」のわれわれの誓ひをいかに固いものにさせられることであらう。

× ×

世界發展を指導すべき大東亞の戰爭と建設の天業は、こゝに、米英の非望を排し、皇國の國運を賭して、斷乎開始せられたのである。日本の歷史、世界の歷史に新しい第一頁を展（ひろ）げしめつゝあるこの大偉業が、いかなる性格をもつものか、いかなる姿でなされつゝあるかを、われわれは、本書の說述のなかから一應の理

解と感得をもとめ得たつもりである。

しからば、終りに、われわれは、皇國當面の戰爭と建設の完遂のために、皇國民としてのかたい誓ひを誓ふべきである。

およそ、「戰ひは必勝への意志と意志、信念と信念との頑張合ひであり、この意志と信念にひびの入つた方が負けである」ことは、いふまでもない。われわれ皇國民としては、まづ、あくまでもこの戰爭を戰ひ拔き、この建設をやり拔くの絕對的意志と信念とを確立するの誓ひをかためねばならぬ。矢はすでに弦をはなたれたのであり、ルビコン河は、すでに、渡られたのである。皇國のみがもつ神秘なる底力に信倚し、一切の敵國宣傳に乘ずる隙を與たへず、各自めいめい、そ

しかも、大東亞戰爭開始以來一年、緒戰の敗戰に一時は度膽を拔かれた諸國も、いまや猛然と起ち直り、巨大な體を戰爭に驅り立てつゝある。敵のもつ物的戰力の大きいことには十分な用心が要るであらう。しかし、恐れる必要は毫もない。鐵鋼生產が何千萬トンあらうと、航空機生產が何萬臺あらうと氣にする必要はない。戰爭は單なる物力と物力との間に戰はれるのではなく、國力と國力との間に戰はれのである。敵の物力に對しては、われわれのもつ最大の物力をもつて對抗するまでゞある。すなはち、國力總生產陣を强力に綜合的に總動員して、これに對抗するまでゝある。

「長期戰」といふと、いかにも、戰爭をのんびりやつてもいいもののやうに思ふ向きもあるかもしれないが、およそ、戰勝の要諦は、全力をあげて事を一擧に解決する意志にある。のらりくらりと平時的な頭で、虫のいい戰後經營などを考へ

ながら、戰爭してゐるのであつたら、一年で濟む戰爭も五年かゝり、五年で濟む戰爭も二〇年かゝり、勝つべき戰ひさへ失ひかねないであらう。戰爭の遂行に國力の一切を總動員して、全力をふるふことこそは、戰勝への近道であるのである。

かうした感覺で、われわれは、お互ひわれわれみづからの生活をふりかへつてみて新たなる誓ひをなすべきである。そこには、なほどれほど多くの非戰時的生活態樣がのこつてゐるかにおどろかされるに違ひない。生產も、消費も、文化も、敎育も、一刻も早く平時生活を脫皮して、戰時生活に切りかへた國が勝ちである。

政治家でも實業家でも、學者でも、商人でも農業でも職工でも、およそ一切の國民層がひとしく自己の戰時生活を一刻も早く確立ずべきである。

たとへば、無駄排除といふことがある。われわれの生活の上には、まだ〳〵い

無駄となれば、いかに大きいことであらう。

戰爭が長期化し、激烈化すればするほど、われわれの國民生活は、有形無形の壓迫をうけて、當然に窮屈になる。戰時生活にきりかへてなければならないほど、窮屈を感ずる。不平不滿も起りかねない。皇國の國運を賭して戰爭と建設に邁進しつゝあることに想ひいたるならば、一寸した生活必需品の出廻り不足や文化生活の不自由さに、不平も不滿もいへたものではないはずである。

またたとへば、食糧や衣料が切符制になつて、配給の公正が最低量の確保を保障することになつたからといつて、あたへられた切符をみな物に換へてしまふ不心得を戒める。一部に買溜めがあれば、それだけ、全體の需要供給に狂ひはかならず來る。なにごとにかゝはらず戰時生活に、ひとりよがりや我利我利根性は、絶對不可である。一錢でも一圓でも、餘分の金は、貯蓄戰の彈丸にむけねばなら

ぬ。貯蓄戰もまた、總力戰の一大要素である。

どんな苦しいことがあらうともどんなつらいことがあらうと、戰ふ日本人として、戰爭と建設の第一線にある者を偲び、とくに、業半ばにして、護國の忠靈となられた同胞のことを思ふたならば――そして、十二月八日あの日の譬へようのない日本人的感激をつねに、生活の上に刻みつけてゐたならば、これしきの苦痛と我慢し、忍耐するぐらゐのことは、たやすいことでなければならぬ。われわれの世紀の誓ひの對象は、案外こんな手近かなところにもあるのである。

われわれの誓ひも、すでに、書中隨所にふれてあるので、あらためてしるすほどのこともなかつたのであるが、以上いさゝか蛇足をそへて、本書のむすびとした次第である。

出文協承認ア270169

昭和十七年十二月五日印刷
昭和十七年十二月十五日發行

五、〇〇〇部

（定價　金壹圓八拾錢）

著者　菊池春雄

發行兼印刷人　有村俊夫
會員番號一一二三二七
東京市京橋區西八丁堀三ノ二二
振替口座東京一七九五七四番

印刷所　大陸印刷所
（東東四一一七）東京市神田區美土代町三十番地

發行所　新東亞協會
東京市京橋區西八丁堀三ノ二二
電話京橋(56)一六〇三

配給所　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

海軍少將 匝瑳胤次著

新刊

歴史は轉換す

三百四十頁
定價貳圓三十錢（〒十二）

新しき人類共榮の新世界は現出し歴史は今將に一大轉換を遂げんとしつゝある。著者は軍事評論の權威者　明治維新以來大東亞戰迄を興味深く著した書

技術院總裁 井上匡四郎閣下序
陸軍中將・工學博士 多田禮吉述

將來戰と科學新兵器

定價一圓（〒八錢）

國家總力戰の結果が強く要望される秋　將來の科學戰に於ける兵器の趨勢に對する獨創的な透見と科學技術に關する卓越した見解を以て高度國防國家建設の明日への動向に正しき標識を明示された斯界の權威多田中將の所論戰時下一般國民の必讀書